志津見ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14

小　丸　遺　跡

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

志津見ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14

小　丸　遺　跡

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画３点セットの一翼を担う事業として、神戸川の上流に平成22年度完成を目標に志津見ダムの建設事業を進めています。このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積約2.3㎢もの貯水池ができることとなりますが、神戸川流域では古くから鉧製鉄が行われていたように、ダムによる水没予定地内にもこれらを含め多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、島根県教育委員会を始め関係各位の御協力を頂き、これら遺跡についての調査を計画的に実施してきております。

当報告書は、そのうち小丸遺跡の調査結果をとりまとめていただいたものです。この遺跡からは、縄文時代から近世にかけての遺構や遺物、特に古墳時代の焼失した竪穴建物跡を確認できたことなど、当地での生活を知る上で貴重な資料が得られたのではないかと思います。

当遺跡の場所には、改良された国道184号線が位置することから、ダム完成後は遺跡全体を見渡すことができなくなります。そのような意味からも、ダム事業を契機として得られたこの貴重な資料をできるだけ正確かつ詳細に記録し後世に残すことが、せめてもの我々の務めでもあり、この報告書はその成果とも言えるものです。

最後になりましたが、当遺跡の調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年３月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所　長　田　中　　靖

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成元年から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しており、このたび報告書第14集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成９年度から10年度に実施した頓原町の小丸遺跡での発掘調査の記録です。今回の調査では、弥生時代の竪穴建物跡や、古墳時代の焼失した竪穴建物跡が確認され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。本報告書が地域の歴史を解明していく糸口となり、郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書を刊行するにあたり御指導、御協力いただきました地元の方々をはじめ、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、頓原町教育委員会ならびに関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成14年３月

島根県教育委員会

教育長　山崎悠雄

例　言

1．本書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受けて平成９・10年度に実施した、志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本書に掲載した遺跡と地番は下記の通りである。

小丸遺跡　島根県飯石郡頓原町大字八神235-3外所在

3．平成９・10年度の現地調査と13年度の報告書作成作業は、下記の組織で実施した。

平成９年度

事務局　島根県教育庁文化財課　勝部　昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎蔵治（課長補佐）
鳥谷芳雄（調査第５係長）、澁谷昌宏（企画調整係主事）

調査員　埋蔵文化財調査センター
伊藤　智（同主事）、佐野木信義（同講師兼主事）、岩崎裕介（同調査補助員）

調査指導（五〇音順、敬称略）
浅川滋男（奈良国立文化財研究所〔当時〕）、時枝克安（島根大学）
松井整司（島根大学）

平成10年度

事務局　島根県教育庁文化財課　勝部　昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、秋山　実（課長補佐）
松本岩雄（課長補佐）、鳥谷芳雄（調査第４係長）
川﨑　崇（企画調整係主事）

調査員　埋蔵文化財調査センター
伊藤徳広（同主事）、倉橋浩（同教諭兼文化財保護主事）、佐藤幸子（同調査補助員）

平成13年度

事務局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）
松本岩雄（調査第１課長）、川原和人（調査第２課長）今岡　宏（主幹）
萩　雅人（調査第６係長）

調査員　伊藤徳広（同主事）、勝部幸治（同調査補助員）

4．自然科学的分析は次の方々・機関に依頼した。

考古地磁気年代測定：時枝克安（島根大学）、樹種同定：株式会社古環境研究所

5．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については建設省（現国土交通省）・社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会
［現場担当］持田明典（平成９・10年度）

［事務担当］市川美奈（平成９・10年度）

６．現地調査及び資料整理に際しては、以下の方々から有意義な御指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

今田昭二・田中迪亮・山崎順子・石飛幹祐（頓原町教育委員会）

関　雅之（日本考古学協会会員）

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

佐藤正好（茨城県立博物館）

石川日出志（明治大学）

設楽博己（国立歴史民俗博物館）

７．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を示し、レベル高は海抜高を示す。

８．第２図は国土地理院発行のものを使用した。また、遺跡空中写真撮影・基準点作成に関しては、社団法人中国建設弘済会を通じて、別途業者に委託した。

９．本書に掲載した遺物写真は主に伊藤（徳）が撮影した。

10．遺物の整理作業については以下の者が従事した。

三浦登久子、山下千都子、北野　恵、清水聡子、持田紫穂、大畑真由美、笠井文恵、金森千恵子、高島留美、鉄尾愛子、野中洋子

11．本書に掲載した実測図は各調査員の他、赤井和代、石田為成、大畑、金森、高島、鉄尾、野中が作成し浄書した。

12．本書の執筆・編集は文化財課・埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て伊藤（智）・伊藤（徳）が行った。なお第４章自然科学的分析については時枝克安氏・山室雅義氏、株式会社古環境研究所の報告を収録している。

13．本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過 ……（伊藤徳広）1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の経過

第２章　位置と環境 ……（伊藤徳広）3
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　小丸遺跡の遺構と遺物 ……（伊藤　智･伊藤徳広）8
　第１節　調査区の設定
　第２節　層序
　第３節　遺構及び遺物の概要
　第４節　Ⅰ・Ⅲ区の遺構
　第５節　Ⅱ・Ⅳ区の遺構
　第６節　遺構外出土遺物

第４章　自然科学的分析 ……65
　第１節　小丸遺跡における考古地磁気年代測定（時枝克安･山室雅義）
　第２節　小丸遺跡における出土炭化材の樹種同定（株式会社 古環境研究所）

第５章　まとめ……（伊藤徳広）75

遺物観察表

挿　図　目　次

第１図　小丸遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1／50000）
第２図　小丸遺跡周辺地形及び調査区配置図（Ｓ＝1／3000）
第３図　Ⅰ区基本層序（Ｓ＝１／100）
第４図　Ⅰ区第１ハイカ層上面遺構配置図（Ｓ＝１／300）
第５図　SI01実測図（Ｓ＝１／60）
第６図　SI01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）
第７図　SD02～06実測図（Ｓ＝１／200）
第８図　Ⅰ・Ⅲ区第３ハイカ層上面完掘状況図（Ｓ＝１／200）
第９図　屋外炉実測図（Ｓ＝１／30）
第10図　屋外炉出土土器実測図（Ｓ＝１／４）
第11図　SK01実測図（Ｓ＝１／20）
第12図　SK01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）
第13図　Ⅱ・Ⅳ区第１ハイカ層上面遺構配置図（Ｓ＝１／1000）
第14図　SI07実測図（Ｓ＝１／30）
第15図　SI12実測図（Ｓ＝１／40）
第16図　SI12出土土器実測図（Ｓ＝１／３）
第17図　SI04実測図（Ｓ＝１／40）
第18図　SI04竈実測図（Ｓ＝１／20）
第19図　SI04遺物出土状況図（Ｓ＝１／40）
第20図　SI04出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）
第21図　SI04出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）
第22図　SI04出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１／３）
第23図　SI05実測図（Ｓ＝１／60）
第24図　SI05　１号竈実測図（Ｓ＝１／20）
第25図　SI05　２号竈実測図（Ｓ＝１／20）
第26図　SI05遺物出土状況図（Ｓ＝１／60）
第27図　SI05出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１／３）
第28図　SI05出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１／３）
第29図　SI05出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１／３）
第30図　SI06実測図（Ｓ＝１／40）
第31図　SI06竈実測図（Ｓ＝１／20）
第32図　SI06遺物出土状況図（Ｓ＝１／40）
第33図　SI06出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）
第34図　SI08実測図（Ｓ＝１／30）

第35図　SI08竈実測図（S＝1／20）
第36図　SI08遺物出土状況図（S＝1／30）
第37図　SI08出土遺物実測図（S＝1／3）
第38図　SI09実測図（S＝1／40）
第39図　SI09出土遺物実測図（S＝1／3）
第40図　SB01実測図（S＝1／60）
第41図　SB02実測図（S＝1／60）
第42図　SB03実測図（S＝1／60）
第43図　SB05実測図（S＝1／60）
第44図　SB04実測図（S＝1／60）
第45図　SK02実測図（S＝1／30）
第46図　SK03実測図（S＝1／30）
第47図　SK04実測図（S＝1／40）
第48図　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／3）
第49図　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器実測図（2）（S＝1／3）
第50図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／3）
第51図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（2）（S＝1／3）
第52図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（3）（S＝1／3）
第53図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／4）
第54図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（2）（S＝1／3）
第55図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（3）（S＝1／3）
第56図　弥生土器実測図（1）（S＝1／3）
第57図　弥生土器実測図（2）（S＝1／3）
第58図　弥生土器実測図（3）（S＝1／3）
第59図　弥生土器実測図（4）（S＝1／3）
第60図　弥生土器実測図（5）（S＝1／3）
第61図　弥生土器実測図（6）（S＝1／3）
第62図　人面土器実測図（S＝1／2）
第63図　須恵器・土師器実測図（S＝1／3）
第64図　中世土師器実測図（S＝1／3）
第65図　石器実測図（S＝1／2）
第66図　小丸遺跡の住居址（SI04,05,06）のかまどの自然残留磁気の強度
第67図　小丸遺跡の住居址（SI04,05,06）のかまどの自然残留磁気の方向
第68図　小丸遺跡の住居址（SI05）1号かまどの残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

図　版　目　次

カラー図版１　小丸遺跡調査前状況
カラー図版２　小丸遺跡全景
カラー図版３　Ⅰ・Ⅲ区完掘状況
カラー図版４　Ⅱ・Ⅳ区完掘状況
カラー図版５　SI04遺物出土状況（北から）　SI05遺物出土状況（北から）
カラー図版６　SI04出土遺物
カラー図版７　SI05出土遺物
カラー図版８　小丸遺跡出土炭化材顕微鏡写真（１）
カラー図版９　小丸遺跡出土炭化材顕微鏡写真（２）

図版１　Ⅱ・Ⅳ区全景
図版２　小丸遺跡調査前状況　Ⅱ区調査状況
図版３　Ⅱ区完掘状況　Ⅰ・Ⅲ区第２黒色土層除去状況
図版４　Ⅰ・Ⅲ区第２黒色土層除去状況　Ⅰ区第１ハイカ除去状況
図版５　Ⅳ区土層　Ⅰ区土層
図版６　屋外炉検出状況　屋外炉土器除去状況　屋外炉完掘状況
図版７　SK01遺物出土状況　SK01完掘状況
図版８　SI01検出状況　SI01遺物出土状況　SI01完掘状況
図版９　SD02～06完掘状況　SD02～06検出状況
図版10　SI07検出状況　SI07土層
図版11　SI07遺物出土状況　SI07完掘状況
図版12　SI12調査状況　SI12完掘状況　SI12遺物出土状況
図版13　SI04検出状況（北より）　SI04上層遺物出土状況
図版14　SI04遺物出土状況（北より）　同上（南より）
図版15　SI04遺物出土状況（１）　同上（２）
図版16　SI04炭化材出土状況　SI04炭化板材出土状況　SI04床面礫出土状況
図版17　SI04竈正面　SI04竈側面
図版18　SI04床面検出状況　SI04完掘状況
図版19　SI05検出状況（北より）　SI05土層状況（北より）
図版20　SI05土層状況（東より）　SI05遺物出土状況（１）（北より）
図版21　SI05上層遺物出土状況（北より）　SI05遺物出土状況（２）（北より）
図版22　SI05北壁遺物出土状況（東から）　SI05南壁遺物出土状況（西から）
図版23　SI05炭化材出土状況（北から）　SI05遺物出土状況（３）　同上（４）
図版24　SI05遺物出土状況（５）　同上（６）　同上（７）

図版25　SI05柱穴検出状況（北より）　　SI05完掘状況（北より）
図版26　SI05柱穴土層　　SI05柱穴完掘状況　　SI05土坑状遺構完掘状況
図版27　SI05壁面小ピット完掘状況　　SI05　1号竈検出状況　　同上正面
図版28　SI05　1号竈側面　　SI05　2号竈検出状況　　同上煙道状況
図版29　SI06検出状況（北より）　　SI06遺物出土状況（南より）
図版30　SI06土層状況（東より）　　同上（北より）　　SI06完掘状況
図版31　SI06竈周辺状況　　SI06竈正面　　同上側面
図版32　SI08検出状況（北西より）　　SI08壁面立ち上がり状況
図版33　SI08土層（南西より）　　SI08遺物出土状況（南東より）
図版34　SI08遺物出土状況　　SI08炭化材出土状況
図版35　SI08床面検出状況（南東より）　　SI08完掘状況（南東より）
　　SI08竈検出状況
図版36　SI09検出状況（北東より）　　SI10完掘状況（南より）
図版37　SB01完掘状況（南西より）　　SB02完掘状況（南東より）
図版38　SB03完掘状況（北東より）　　同上（南東より）
図版39　SB04検出状況（北東より）　　SB04完掘状況（北東より）
図版40　SB04完掘状況（北西より）　　SB05完掘状況（北東より）
図版41　SK02検出状況（北西より）　　SK02上層状況
図版42　SK02下層検出状況　　SK02下層状況
図版43　SK03完掘状況　　SK04完掘状況
図版44　風倒木痕検出状況（１）　　風倒木痕完掘状況（１）
図版45　風倒木痕検出状況（２）　　風倒木痕完掘状況（２）
図版46　谷地形検出状況（西より）　　現地説明会風景
図版47　縄文土器出土状況　　同上
図版48　屋外炉出土遺物（１）　　屋外炉出土遺物（２）
図版49　屋外炉出土遺物（３）
図版50　SK01出土遺物　　SI01出土遺物
図版51　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器　　同上
図版52　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器　　同上
図版53　Ⅱ区出土縄文土器　　同上
図版54　Ⅱ区出土縄文土器　　同上
図版55　Ⅱ区出土縄文土器　　同上
図版56　Ⅱ区出土縄文土器
図版57　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器　　同上
図版58　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器　　同上
図版59　Ⅱ・Ⅳ区出土弥生土器　　同上
図版60　Ⅱ・Ⅳ区出土弥生土器　　同上
図版61　Ⅱ・Ⅳ区出土弥生土器　　SI12出土弥生土器　　Ⅱ・Ⅳ区出土弥生土器

図版62　SI04出土遺物
図版63　SI04出土遺物
図版64　SI05出土遺物
図版65　SI05出土遺物
図版66　SI05出土遺物
図版67　SI06出土遺物　　SI08出土遺物
図版68　SI08出土遺物
図版69　SI09出土遺物　　須恵器・土師器　　中世土師器
図版70　人面土器　　石器

表　目　次

表1　周辺の遺跡一覧…… 5
表2　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査関連文献一覧…… 7
表3　調査区概要一覧…… 8
表4　溝状遺構一覧……19
表5　竪穴建物跡一覧……45
表6　掘立柱建物跡一覧……48
表7　土坑一覧……50
表8　小丸遺跡における樹種同定結果……67
表9　年代測定用の定方位試料採取状況……69

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水調節用のダムである。昭和47年の集中豪雨により、斐伊川と神戸川が大洪水を引き起こし、出雲平野周辺地域や松江市街地に大きな被害をもたらした。この災害により、斐伊川と神戸川の抜本的な治水計画が検討され、両河川を一体とした治水事業が計画された。

ダムは神戸川の上流に位置する飯石郡頓原町志々地区に建設され、湛水域は頓原町大字角井から八神にまたがり、面積は230haに及ぶ。この地域内には多くの文化財があり、また、未発見の埋蔵文化財の存在が推定されたことから島根県教育委員会は頓原町教育委員会が進めていた町内の遺跡分布調査と同調し、昭和63年にダム建設予定地内の分布調査を行った。町教委の調査の結果、遺跡が希少であった志津見・八神・角井地区で150ケ所にのぼる埋蔵文化財が確認され[①]、ダム建設予定地には44ケ所の遺跡と、６ケ所の遺跡推定地が存在することが判明した。また、これと同時にダム建設によって消えゆく民俗文化財の調査が２カ年にわたって県教委によって行われ、その成果は平成２年度に刊行されている[②]。

埋蔵文化財の発掘調査は建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受け、平成元年度から調査を開始している。その後の発掘調査及び範囲確認調査によって、ダム湛水地域の他、生活再建地や道路付替工事などの関連事業地内で31ケ所の遺跡が調査の対象となり、平成13年度の調査終了段階で22遺跡の調査を完了している。

小丸遺跡は飯石郡頓原町大字八神に所在する遺跡である。ダム建設に伴って新たに改良される国道184号線が遺跡に掛かるため27,000㎡ある遺跡の内、調査が急がれたⅠ区（5,000㎡）とⅢ区（6,000㎡）、Ⅱ区（8,000㎡）の一部を調査対象地として平成９年４月から調査を実施しⅠ区とⅢ区は調査を完了した。平成10年度はⅡ区の未調査地とⅣ区（8,000㎡）の調査を行ったが、Ⅱ区とⅣ区に関しては第１ハイカ層以下は工事による改変を受けないことが判明したため下層調査を行っていない。したがって小丸遺跡はⅠ区とⅢ区は調査完了済み、Ⅱ区とⅣ区の第２黒色土層以下は調査未了であることを明記しておく。

第２節　調査経過

小丸遺跡は神戸川右岸の河岸段丘に位置する。平成元年度から始まった志津見ダム建設予定地内遺跡の範囲確認調査の結果、縄文時代から近世までの遺物が確認されたことから遺跡は当該期の集落遺跡と考えられた。

試掘調査の結果を受けて平成９年４月10日から国道184号線の架橋工事が急がれるⅠ区とⅢ区の調査に先行して着手した。

調査はまず表土層の除去から行った。表土層は試掘調査によって耕作土に由来し、第１黒色土層の上面に堆積していることが判明していた。この表土層から出土する遺物は原位置を保っておらず、また出土数もわずかであるため重機によって除去を行った。

Ⅲ区はトレンチ調査の結果、調査区の大部分で遺物包含層である第１～３の各黒色土層及びハイカ層が削平及び流失しており出土遺物はわずかで遺構の確認もできない状況であった。したがって比較的遺物の出土している一角をⅠ区と共に調査を行い、第３ハイカ層上面までの調査は８月28日に完了した。

Ⅰ区は第１黒色土層の掘り下げ及び第１ハイカ層上面の精査を５月３日に終了し、第２・３黒色土層の調査を行った。Ⅰ区も第２・３黒色土層が部分的に残っていなかったが、残りの良かった部分を掘り下げ、Ⅲ区の一部と共に第３ハイカ層上面まで調査を行い第２ハイカ層上面から屋外炉や土坑を確認し、第３黒色土層から縄文土器が出土するなどの成果を上げ、８月28日に完了した。

Ⅱ区は６月20日から第１黒色土層の掘り下げを行い、12月24日に調査区の一部を翌年度に調査することとして現地調査を一時終了している。

また７月31日に空撮を行い、調査中であったⅠ～Ⅲ区の撮影を行っている。

平成10年度は昨年度から継続調査のⅡ区と、新たにⅣ区の調査を４月20日から行った。

Ⅱ区とⅣ区は合わせて16,000㎡という広大な面積であったため作業期間と作業員数を考慮し、表土層は先にも述べたように耕作により攪乱を受けた層であるため、重機によって除去を行っている。

Ⅱ区とⅣ区は並行して調査を行い、第１黒色土層の掘り下げ、第１ハイカ層の精査を行い、遺構と遺物の確認に努めた。Ⅱ区とⅣ区は12月25日に現地調査を終了した。

先述しているが、Ⅱ区とⅣ区は第２黒色土層より下層の調査は今回行っていないため、今後当区に工事等何らかの改変が行われるのであれば、事前の協議が必要となる。

なお12月７日に空撮を行い、Ⅱ区とⅣ区の撮影及び図化（25㎝コンタ１／200）を行っている。

また、調査成果を地域に還元する活動として、10月17日に現地説明会を開催し、交通が不便な上、当日は台風が通過するという最悪の天候にもかかわらず、15人ほどの参加があった。

遺物の整理は現地の調査に並行して行っていたが、現地調査が終了した後も報告書作成に向けて引き続き行った。その成果は本書で報告している。

（注）

① 頓原町教育委員会『頓原町埋蔵文化財詳細分布調査報告(1)　志々地区』1989

② 島根県教育委員会「志津見の民俗」『志津見ダム民俗文化財調査報告書』1990

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

島根県と広島県の県境、中国山地の赤名峠の西方に位置する女亀山（標高830ｍ）に源を発する神戸川は、頓原川、伊佐川、波多川等の支川を合流しながら、優美な姿で知られる三瓶山（標高1126ｍ）の東麓を北流し、赤来町・頓原町・佐田町・出雲市・大社町の１市４町を経て、日本海に注いでいる。小丸遺跡はその神戸川の中流域に位置しており、島根県飯石郡頓原町大字八神235-3外に所在する。八神地域は現在では頓原町に属しているが、1888（明治21）年の町村制施行では飯石郡志々村とされていたところで、1957（昭和32）年に旧頓原町と合併して頓原町に編入され現在に至っている。

小丸遺跡は神戸川の右岸の河岸段丘上の平坦地に位置し、八神にある森遺跡は上流約１㎞にあり、志津見の板屋Ⅲ遺跡は約1.6㎞下流に位置している。

多くの遺跡が存在するこの神戸川流域は、西側約５㎞にそびえる三瓶山（標高1126ｍ）の影響を強く受けている。また、付近の地形は起伏量200～400ｍの中起伏山地が連なっており、その間を神戸川が縫うように流れることで砂礫段丘や谷底氾濫原が形成され、周辺の遺跡は山間に開けたこうした砂礫段丘や谷底氾濫原など僅かな平坦地を中心として展開しており、これが当地域の遺跡立地条件の大きな特色となっている。三瓶山は約3600年前まで噴火活動を繰り返した山で、それに由来する火山灰や火砕流などの堆積物や黒ボク土壌が多く見られる。この地域の基本的層序は、上層より第１黒色土層－第１ハイカ層（三瓶太平山降下火山灰：約3600年前）－第２黒色土層－第２ハイカ層（三瓶角井降下火山灰：約4700年前）－第３黒色土層－第３ハイカ層－三瓶浮布降下火山灰層－三瓶浮布降下軽石層の順になっている。第３黒色土層上層部ではアカホヤ降下灰層準が認められており、その年代は6300Ｂ.Ｐ.前後であることが確認されている。

島根の気候は、日本海岸気候に属し、東部・西部・隠岐の三つの気候区に分かれるが、頓原町は東部の山間地帯に属している。頓原町は中国山地の脊梁部に位置し複雑な気象現象が見られる。日本海を北流する対馬海流の影響で湿潤になった大気が吹き付けられ脊梁山脈にあたり降水量は多く、冬季は積雪量も多い。

第２節　歴史的環境

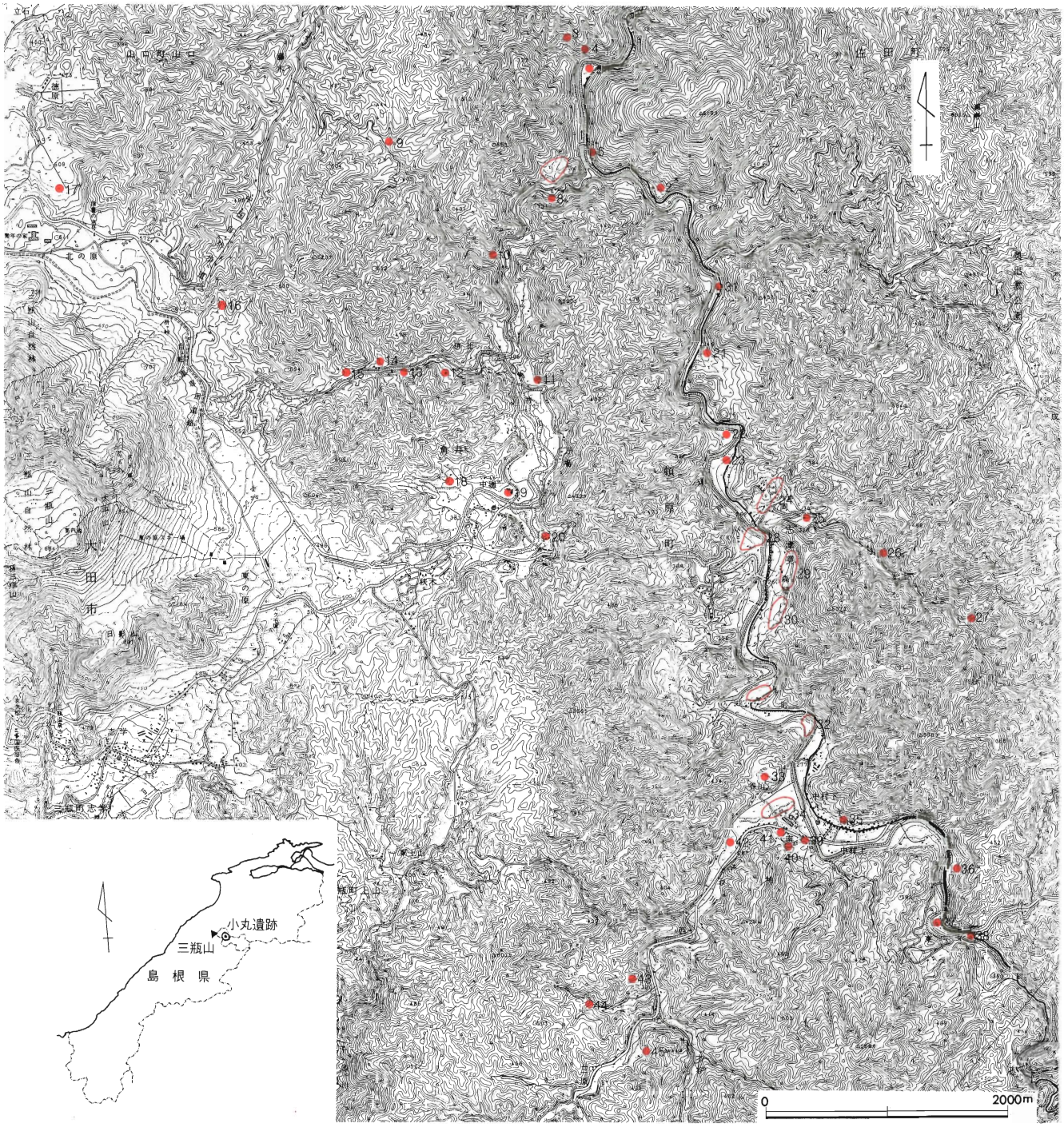
神戸川上・中流域における遺跡は、前述の通り砂礫段丘や谷底氾濫原などの僅かな平坦地を中心に展開しており、時期的にかなり長期にわたって営まれている複合遺跡が多い。これは急峻な山が多く、利用できる平坦地が少ないという地理的制約によるところが大きい。

頓原町及び周辺地域においては、旧石器時代の遺跡は未だ見つかっていない。以下、時代を追って頓原町及び周辺地域の主要な遺跡を取り上げ、この地域の歴史的環境を概観する。

縄文時代

周辺の各遺跡では、縄文時代の貴重な遺構・遺物が数多く確認されている。代表的なこの時代のの遺跡としては、五明田遺跡、森遺跡、門遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡等があげられる。このうち

板屋Ⅲ遺跡では、県内最古級の草創期末から早期初頭の表裏条痕文土器や前期の平地式住居２棟などが検出されている。さらにこの遺跡の調査において、縄文時代の遺構・遺物と三瓶火山灰が層位的に初めて確認された。第３黒色土層が草創期末～前期末、第２黒色土層が前期末～後期前葉、第１黒色土層が後期中葉以降の包含層であることが明らかとなり、周辺の遺跡を調査する際の基準となっている。また、プラントオパールの分析結果により、晩期初頭から雑穀類の栽培が行われていたことが明らかとなっている。五明田遺跡からは山陰地方では確認例の少ない縄文時代後期初頭から前葉の竪穴住居が確認されたほか、後期前葉の磨消縄文土器が良好な状態で多量に出土している。



第1図　小丸遺跡と周辺の遺跡（S＝1／50,000）

下山遺跡では東北地方からもたらされた「屈折像土偶」や後期の配石遺構が、また門遺跡では、後期の土偶や後期から晩期の墓坑群などが検出され、縄文時代の祭祀形態や墓制を知る上で貴重な資料が得られた。なお、製鉄遺跡である戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡においても、晩期の粗製土器が出土している。

弥生時代

前期まで遡る遺跡は、森遺跡、五明田遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡などがあるが、出土する遺構・遺物は多くない。板屋Ⅲ遺跡では前期後半の配石遺構群が確認されている。中期の遺跡は、拠点的な集落であり、多くの竪穴住居跡や甕棺墓が検出された門遺跡のほか、森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡等があり、継続して営まれているものが多い。広島県北部を中心に分布する塩町式系

表1　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	備考
1	小丸遺跡	集落跡	縄文時代～古墳時代集落
2	丸山遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
3	戸井谷遺跡	製鉄遺跡	
4	戸井谷尻遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1・大鍛冶場1
5	長老畑遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
6	殿淵山毛宅前鈩跡	製鉄遺跡	製鉄炉1
7	下山遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉2・縄文時代集落・配石遺構群など
8	権現山鈩跡	製鉄遺跡	
9	獅子谷遺跡	製鉄遺跡	鍛冶炉12
10	獅子谷遺跡	遺物散布地	
11	向原遺跡	製鉄遺跡	
12	伊比谷遺跡	遺物散布地	
13	伊比谷1号鈩跡	製鉄遺跡	
14	伊比谷2号鈩跡	製鉄遺跡	
15	伊比谷3号鈩跡	製鉄遺跡	
16	枡ケ峠遺跡	遺物散布地	
17	大水原遺跡	遺物散布地	
18	堂ノ原横穴墓	横穴墓	古墳時代
19	角井遺跡	遺物散布地	
20	杉戸遺跡	遺物散布地	
21	貝谷遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉・縄文時代集落など
22	後平遺跡	遺物散布地	
23	徳原遺跡	製鉄遺跡	
24	板屋Ⅲ遺跡	製鉄遺跡・集落跡	製鉄炉2・精錬鍛冶炉2・縄文～奈良時代集落など
25	弓谷尻遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉
26	弓谷鈩跡	製鉄遺跡	
27	弓谷奥鈩跡	製鉄遺跡	
28	門遺跡	製鉄遺跡・集落跡・古墳	製鉄炉1・鍛冶炉4
29	神原Ⅱ遺跡	製鉄遺跡・集落跡	鍛冶炉2・縄文～古墳時代
30	神原Ⅰ遺跡	集落跡	縄文～古墳時代集落など
31	大槇鈩跡	製鉄遺跡	製鉄炉2・鍛冶炉5
32	中原遺跡	製鉄遺跡・古墳	大鍛冶場跡1・横穴式石室1など
33	谷川遺跡	集落跡	縄文・弥生・土師器等
34	森遺跡群	集落跡	弥生～奈良時代集落など
35	慶雲寺鈩跡	製鉄遺跡	
36	鈩原鈩跡	製鉄遺跡	
37	比丘尼塚古墳	古墳	横穴式石室1
38	落合精錬所跡	製鉄遺跡	精錬所跡（近代）
39	五明田遺跡	集落跡	縄文時代集落など
40	檀原遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉2・精錬鍛冶炉1・鍛冶炉2
41	土居ノ上鈩遺跡	製鉄遺跡	
42	坂根鍛冶跡	製鉄遺跡	
43	三代木遺跡	遺物散布地	
44	三代木鈩跡	製鉄遺跡	
45	大歳鈩跡	製鉄遺跡	

土器も出土している。この時期には流水文を施す大型壺が見られるのも当地域の特色の一つである。後期の遺構・遺物を多く検出している森遺跡では、竪穴住居や溝状遺構、住居に隣接して土坑墓群を検出している。この中には碧玉製管玉を141個も副葬したものも含まれる。集落と墓域の様相を考える上で貴重な発見となった。

古墳時代

前期初頭には、弥生時代後期から継続して営まれる集落もあるが、前期・中期とも目立った遺跡は確認されておらず、下山遺跡で中期後半の竪穴住居が知られるのみである。後期になると集落跡や古墳の検出が顕著となってくる。森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡、小丸遺跡などで集落が営まれ、方形竪穴住居の壁に石組みの造り付け竈を設けるものが多く見られる。小丸遺跡では3棟の竪穴住居から炭化した建築材が出土し、焼失住居の好資料が得られている。また、横穴式石室を内蔵した古墳や横穴墓も各地域で造られており、八神地域では中原古墳・比丘尼塚古墳が知られ、志津見地域では門1・2号墳、角井地域では堂ノ原横穴墓がそれぞれ知られている。

奈良・平安時代

古墳時代後期の集落が継続して営まれるものが多く、森遺跡や門遺跡からは時期が明確でないが大規模な掘立柱建物が確認されている。また、神原Ⅱ遺跡では奈良時代の竪穴住居が検出され遺存状態が良好な紡錘車・鉄鎌などの鉄製品や銅製の腰帯金具も出土している。

中　　世

森脇山城跡は地形測量によって、典型的な戦国期の山城であることが分かっている。森遺跡、門遺跡、板屋Ⅲ遺跡からは13～16世紀の貿易陶磁や信楽・美濃・備前等の国産陶器も検出しており、石見銀山や国境に近いこの地域が、交通・交易・軍事の要衝であったことがうかがえる。また、志々地区においては、高殿鈩成立以前と推定される製鉄遺跡のうち、製鉄炉が16ヵ所、精錬鍛冶炉が4ヵ所で確認されている。当地域の製鉄関連遺跡は古代末以降から見られ、本床状遺構のみ持つ板屋Ⅲ遺跡1号炉、その両側に小舟状遺構も付設する弓谷鈩の旧製鉄炉跡などのほか、門遺跡2号炉や戸井谷尻遺跡6号炉などの精錬鍛冶炉がまとまって確認されている。

近世・近代

17世紀末に成立したとされる高殿鈩の地下構造が確認された遺跡には、長老畑遺跡・殿淵山毛宅前鈩跡・丸山遺跡・大槇鈩跡・下山遺跡・弓谷鈩跡がある。特に弓谷鈩跡では、大規模な床釣り施設を備えた鈩跡が検出され、山内の一部も確認されている。大鍛冶場は高殿鈩に付属するものと単独で立地するものがある。前者は大槙鈩跡・神原Ⅱ遺跡・檀原遺跡（隣接する佐田町）、後者は中原遺跡、戸井谷尻遺跡、獅子谷遺跡が知られている。獅子谷遺跡では鍛冶炉が計8基検出され、鍛冶場全体で3度の改変が行われたと想定されている。また、長方形または長楕円形の柱穴を伴う大型の掘立柱建物が板屋Ⅲ遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡などで確認されており、当該期の建物構造を知る上で貴重な資料となっている。さらに、麻蒸施設と考えられる焼石充填土坑が神原Ⅰ・Ⅱ遺跡で多数検出されているのも当地域の特色といえる。

近世以来の主要産業であった製鉄業は当地域でも続けられており、弓谷鈩・弓谷鍛冶が明治20年代まで稼業したことが史料から知ることができる。

表2　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財　　調査関連文献一覧

No.	書　　名	発 行 年	発　　行　　者
1	頓原町遺跡－志々地区－	平成元年(1989)	島根県頓原町教育委員会
2	増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ （出雲・隠岐編）	平成５年(1993)	島根県教育委員会
3	島根県中近世城館跡分布調査報告書（第２集） 出雲・隠岐の城館跡	平成10年(1998)	島根県教育委員会
4	五明田遺跡	平成３年(1991)	島根県頓原町教育委員会
5	五明田遺跡発掘調査報告書	平成４年(1992)	島根県頓原町教育委員会
6	梅ケ谷尻たたら跡	平成４年(1992)	島根県佐田町教育委員会
7	板屋Ⅱ遺跡＜１＞	平成５年(1993)	島根県教育委員会
8	森遺跡･板屋Ⅰ遺跡･森脇山城跡･阿丹谷辻堂跡＜２＞	平成６年(1994)	島根県教育委員会
9	門遺跡＜３＞	平成８年(1996)	島根県教育委員会
10	壇原遺跡・谷川遺跡・殿淵山毛宅前鈩跡＜４＞	平成９年(1997)	建設省斐伊川神戸川総合開発 工事事務所島根県教育委員会
11	板屋Ⅲ遺跡＜５＞	平成10年(1998)	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
12	中原遺跡＜６＞	平成11年(1999)	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
13	下山遺跡（１）－製鉄関連遺構の調査－＜７＞	平成12年(2000)	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
14	神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡＜８＞	平成12年(2000)	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
15	弓谷たたら	平成12年(2000)	建設省中国地方建設局 島根県頓原町教育委員会
16	戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡＜９＞	平成13年(2001)	国土交通省中国地方整備局 島根県教育委員会
17	丸山遺跡・大槙鈩跡＜10＞	平成13年(2002)	国土交通省中国地方整備局 島根県教育委員会
18	森Ⅴ遺跡	平成13年(2003)	国土交通省中国地方整備局 島根県頓原町教育委員会
19	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅳ 下山遺跡	平成８年(1996)	島根県教育委員会
20	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ 下山遺跡	平成９年(1997)	島根県教育委員会
21	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ 神原Ⅱ遺跡	平成10年(1998)	島根県教育委員会
22	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ 小丸遺跡	平成10年(1998)	島根県教育委員会
23	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ 小丸遺跡	平成11年(1999)	島根県教育委員会
24	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ 獅子谷遺跡	平成11年(2000)	島根県教育委員会
25	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ 神原Ⅱ遺跡	平成12年(2000)	島根県教育委員会
26	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ 貝谷遺跡	平成12年(2000)	島根県教育委員会
27	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 神原Ⅱ遺跡	平成13年(2001)	島根県教育委員会
28	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 戸井谷遺跡	平成13年(2001)	島根県教育委員会
29	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 貝谷遺跡	平成13年(2001)	島根県教育委員会

＜＞内は、県教委発行の志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書の通し番号

第３章　小丸遺跡の遺構と遺物

第１節　調査区の設定

小丸遺跡は調査前、畑地であった。調査対象面積は27,000㎡であった。したがって国道184号線の架橋工事が急がれた地点を中心に5,000㎡をⅠ区とし、その西側の8,000㎡をⅡ区、Ⅰ区の東側6,000㎡をⅢ区、最も西側の8,000㎡をⅣ区と４調査区に分割した。

さらに調査区内を細分し、遺構外から出土した遺物の位置を把握するため、国土座標に対応した20m四方のグリッドを遺跡全体に設定しこのグリッド毎に調査を進めることとした。

第２節　層　　序

小丸遺跡の層序はこれまでの志津見ダムの発掘調査の成果によって確認されている三瓶山の噴火に由来する堆積層と黒色土の互層堆積であった。上層より表土層－第１黒色土層－第１ハイカ層（3,600年前）－第２黒色土層－第２ハイカ層（4,700年前）－第３黒色土層－第３ハイカ層－三瓶浮布降下火山灰層－三瓶浮布降下軽石層の順になっている。なお「ハイカ」とは三瓶山の火山灰の地元での名称である。この基本層序は平坦面で構成されているⅡ区とⅣ区に当てはまる。

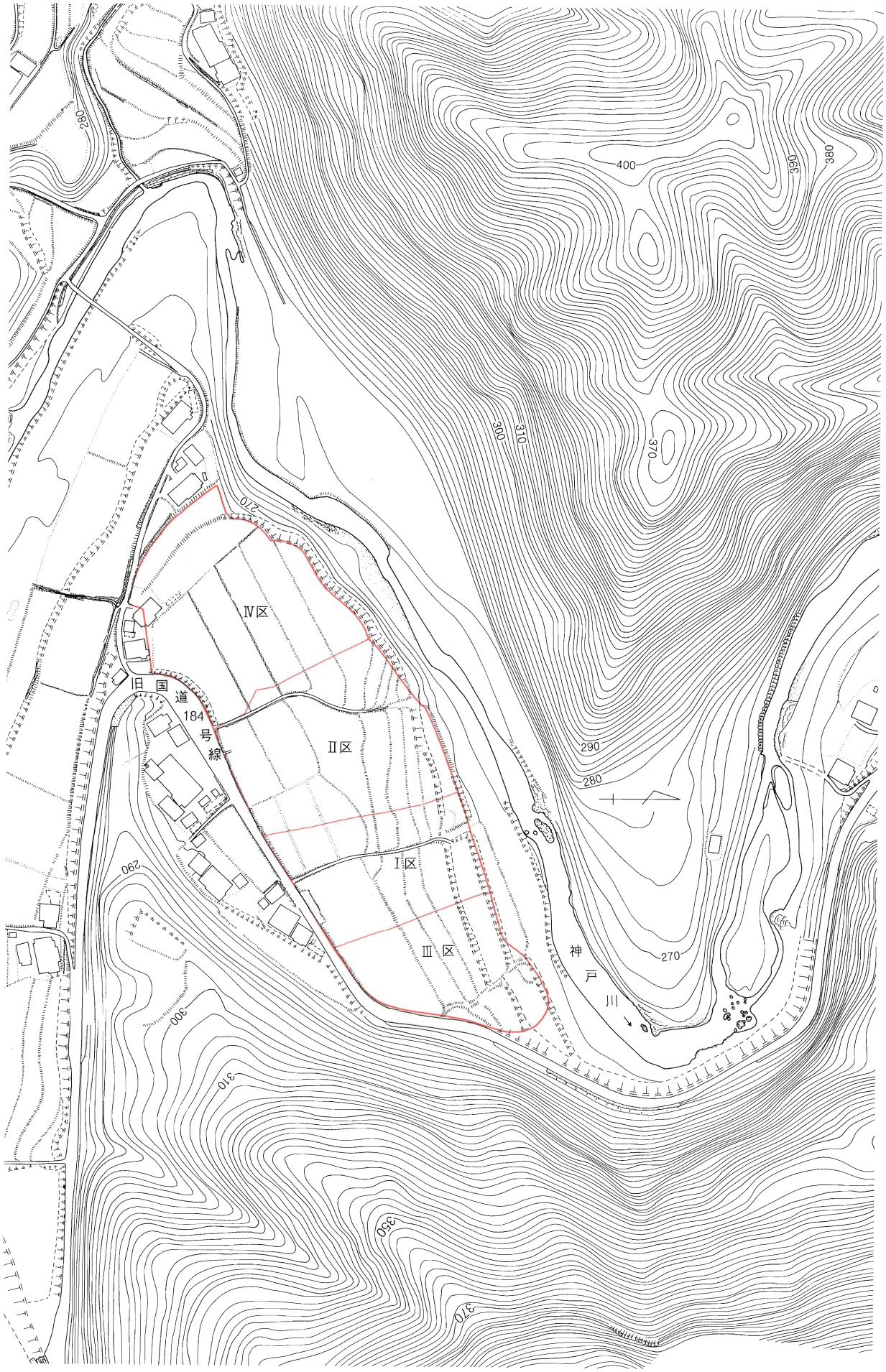
第３図はⅠ区に見られる斜面の基本層序である。斜面に沿って各層が堆積しているが、風化によるためか各層の厚さは一定していない。またⅢ区は黒色土が確認されないこともあった。これは遺跡内でも標高自体が低く、斜面でもあり流失してしまっているものと考えられる。

第３節　遺構及び遺物の概要

各調査区の遺構と遺物については表３として一覧を掲載している。したがってここでは表３では現れてこない点について述べようと思う。また、小丸遺跡で出土した遺物は数を集計していないため、大まかではあるがコンテナ数で以下は述べていきたい。

表3　調査区概要一覧

調査区	土　層	主な遺構	時　期	出　土　遺　物	その他の遺構	遺構外遺物	調査年度
Ⅰ	第１ハイカ上面	SI01	弥　生	弥生土器	ピット、谷地形	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器	1997
	第１ハイカ上面	SD02～06	近世？	陶磁器			
	第３ハイカ上面	屋外炉	縄　文	縄文土器			
	第３ハイカ上面	SK01	縄　文	縄文土器			
Ⅱ	第１ハイカ上面	SI04	古　墳	須恵器・土師器・鉄器・炭化材	ピット、谷地形、風倒木痕	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器	1997－1998
		SI05	古　墳	須恵器・土師器・鉄器・炭化材			
		SI06	古　墳	土師器・炭化材			
		SI08	古　墳	須恵器・土師器・鉄器・炭化材			
		SI09	古　墳	須恵器・土師器・炭化材			
		SI12	弥　生	弥生土器			
		SB01	古墳？				
		SB02	古墳？				
		SB03	不　明				
		SB05	不　明	土師器鉢			
		SK02	不　明	石材			
		SK03	不　明	石材			
		SK04	不　明	—			
Ⅲ						縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器	1997
Ⅳ	第１ハイカ上面	SI07	弥　生	弥生土器	ピット、土坑、風倒木、集石土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器	1998
		SB04	古墳？				



第2図　小丸遺跡周辺地形図及び調査区配置図（S＝1／3,000）

Ⅰ区からⅣ区のうち、最も遺物の数が多かったのはⅡ区で、Ⅰ区、Ⅳ区、Ⅲ区と少なくなっていく。

種別毎で見ると、土師器が一番多く20箱、次に縄文土器が11箱、弥生土器６箱、須恵器２箱、鉄器１箱である。弥生土器は前期が２箱、中期が４箱、後期は数点であった。土師器・須恵器は古墳時代後期がほとんどで、縄文土器は前期が数点で後期が７箱、晩期が４箱であった。

各調査区で見ていくと、Ⅰ区で最も多かったのは縄文土器で土師器と弥生土器が続く。Ⅱ区では土師器が最も多く、次が弥生土器、縄文土器、須恵器、鉄器と続く。Ⅲ区は遺物数はほとんど無く、各種別数点ずつといった状況である。Ⅳ区は土師器、縄文土器、弥生土器、須恵器である。

遺跡は国土座標に基づきグリッドを設定しているので、これに従い遺物を取り上げているが、当方の不手際により成果を報告書に掲載できなかったことをここに記しておく。

検出した遺構は表３にあるように様々検出されている。このうち年代の推定された遺構の時期は３時期に分けられる。

まず第１に、縄文時代中期後半から後期前半に比定される第２黒色土を掘り下げた後に第２ハイカ層に検出された遺構群である①。Ⅰ区の屋外炉とSK01がこれに含まれる。

第２は弥生時代中期後半である②。Ⅰ区のSI01、Ⅱ区のSI12、Ⅳ区のSI07である。

第３は古墳時代後期（７世紀前半）である③。Ⅱ区のSI04～06、08、09がこれに含まれ、掘立柱建物跡も何棟か含まれるのではないかと考えている。

以上のように検出した遺構と出土した遺物の年代はほぼ一致しているが、弥生時代前期は遺物数は多いが遺構が確認されておらず、削平などにより確認できなかったのか、あるいは調査の方法に問題があったのか判断できない。しかし別の時期の遺構は確認されていることが多く、遺構は残っていなかった可能性が高い。

（注）

①本書中の縄文土器の編年は以下の文献を参考にしている。

・大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』1996

・島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』1998

・　同　　上　『下山遺跡』(2) 2002

②弥生土器の編年については

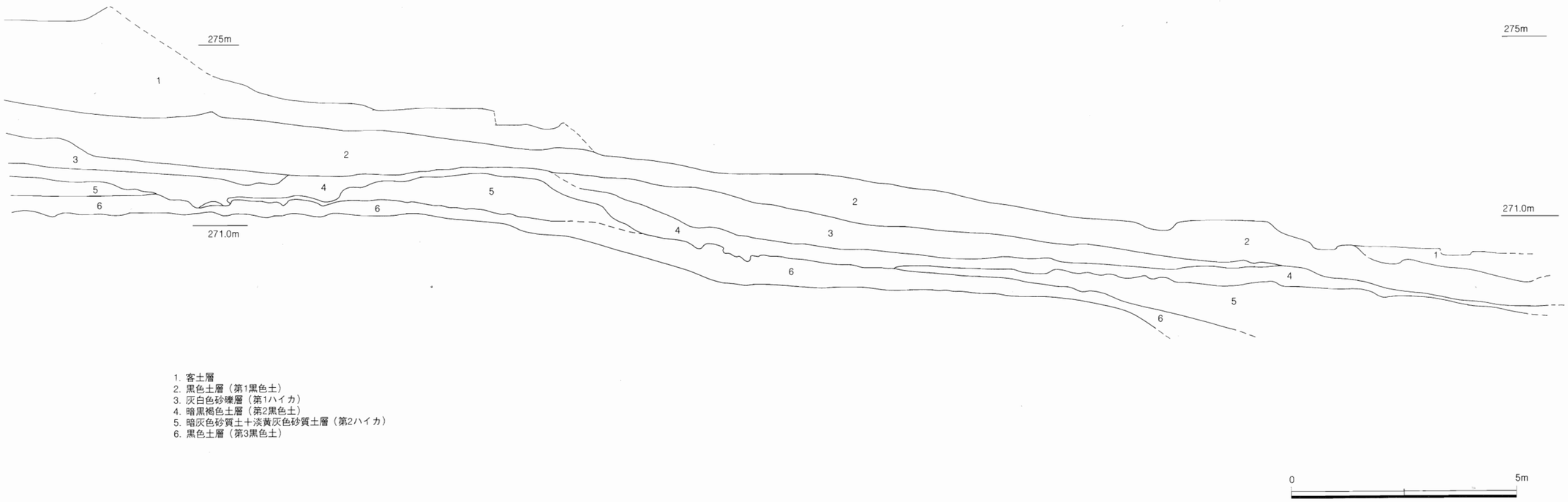
松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式を編年』山陽・山陰編　1992を参考にしている。

以後の弥生土器の記述についても同様である。

③古墳時代の須恵器の編年については

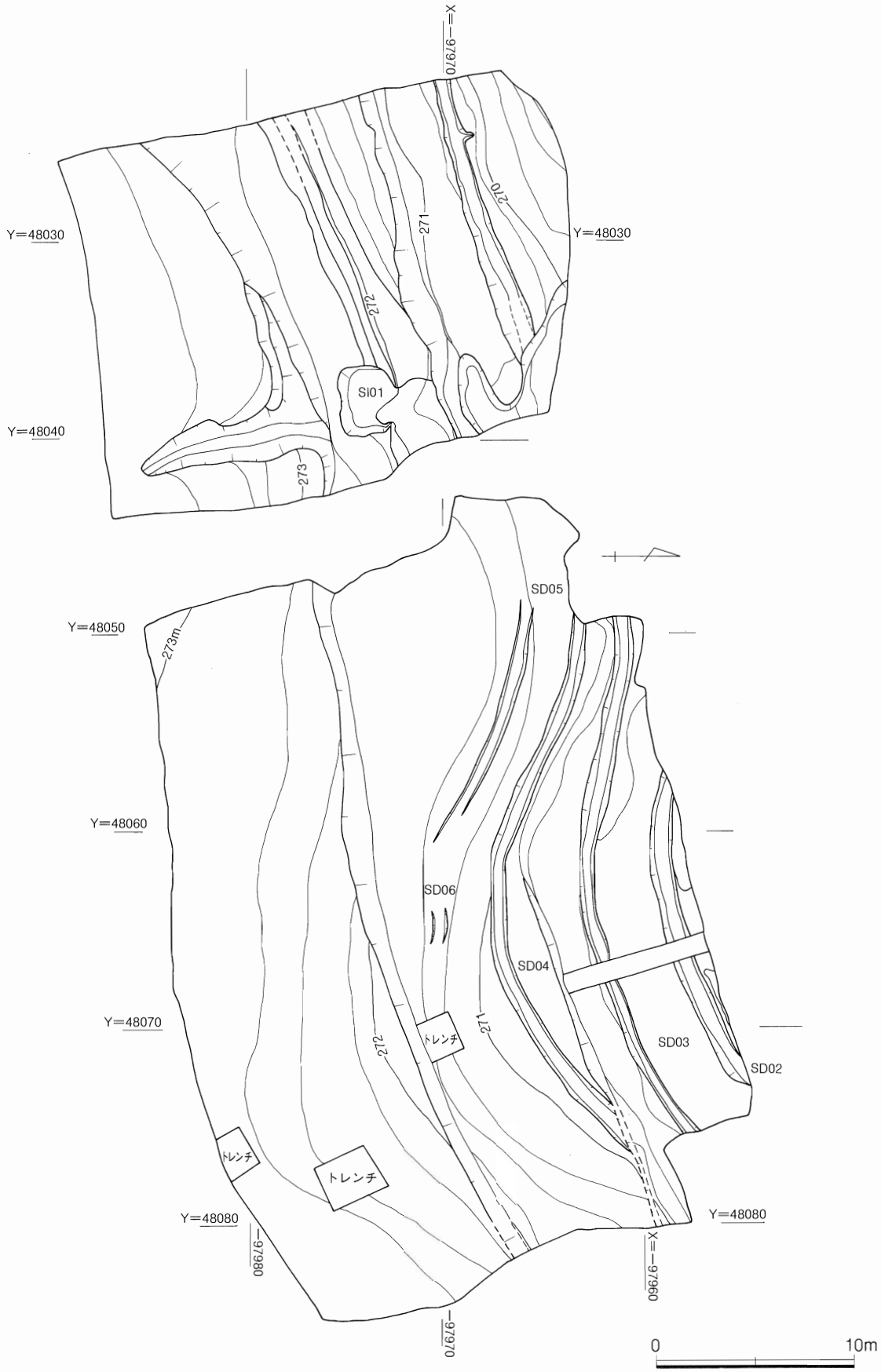
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994を参考にしている。

以後の須恵器に関する記述についても同様である。



1. 客土層
2. 黒色土層（第1黒色土）
3. 灰白色砂礫層（第1ハイカ）
4. 暗黒褐色土層（第2黒色土）
5. 暗灰色砂質土十淡黄灰色砂質土層（第2ハイカ）
6. 黒色土層（第3黒色土）

第3図　Ⅰ区基本層序（S＝1／100）



第4図　Ⅰ区第1ハイカ層上面遺構配置図（S＝1／300）

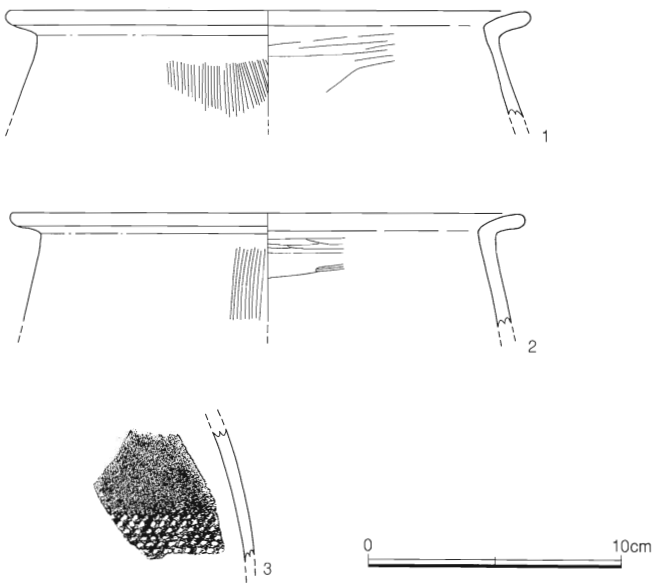
Ⅰ区SI01（第5図）

標高272.5mで遺跡のⅠ区の中央に位置している。第1ハイカ上面で検出されている。北側は斜面になって下っており、遺構が一部流出している。残っている部分の規模は平面が隅丸方形で、東西3.2m、南北2.3mである。周溝やピット、張り床等は確認していない。

遺物は弥生土器と直径30cmの礫が出土している。弥生土器は床面からわずかに浮いた状態で出土している。

第5図　SI01実測図（S＝1／60）

出土遺物（第6図）　第6図1と2は甕の口縁部で、頸部が「く」の字状に屈曲する口縁を持っている。3は甕の肩部から胴部にかけての部分であり列点文が横方向に施されている。



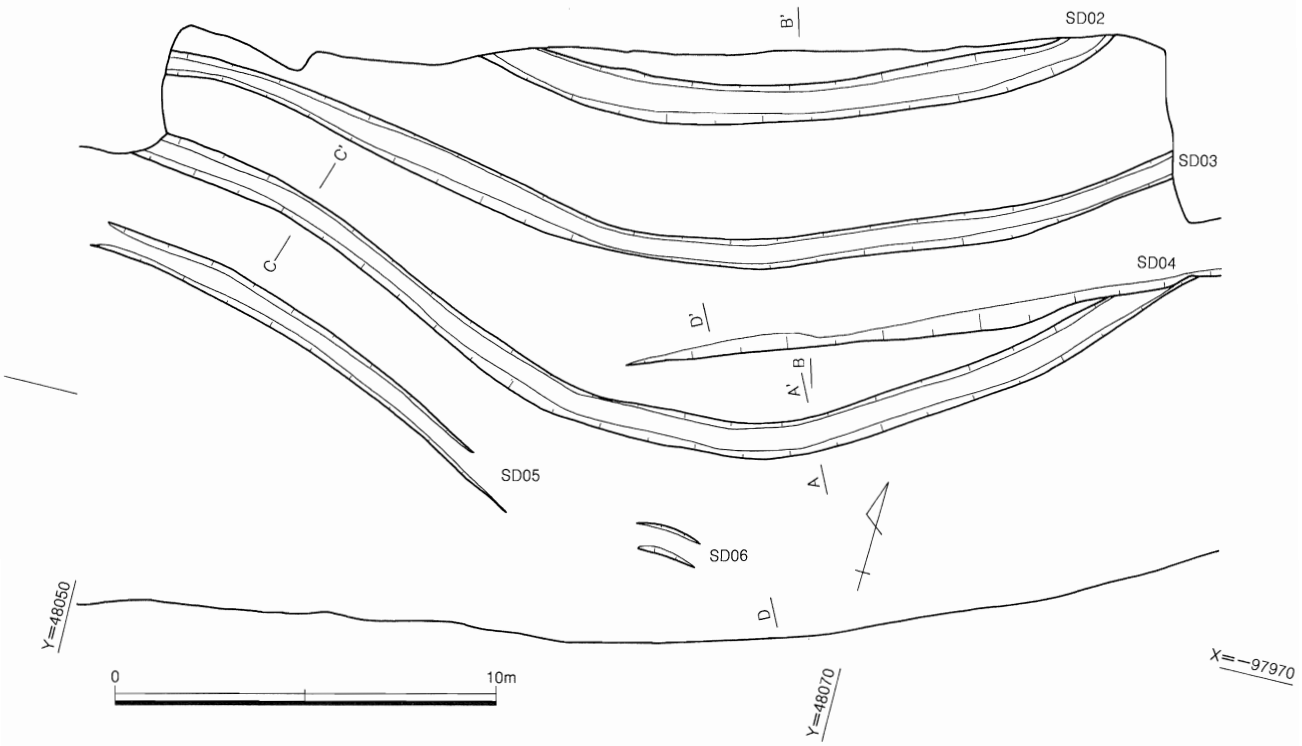
第6図　SI01出土遺物実測図（S＝1／3）

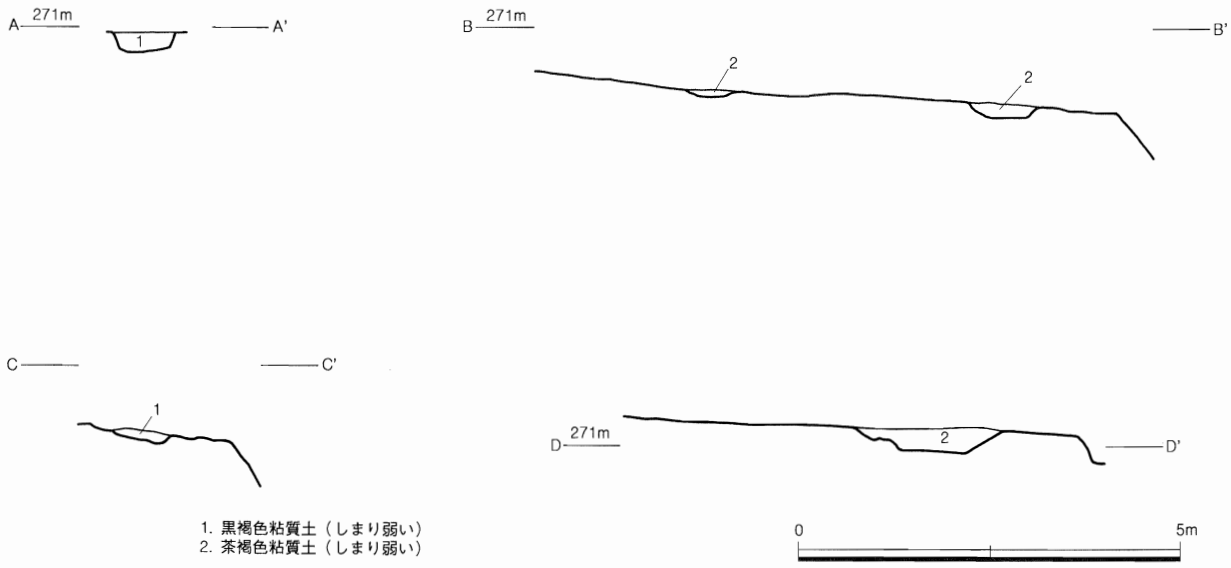
これらは松本編年出雲Ⅳ－2の範疇と見られる。

したがってSI01は弥生時代中期後半以降の竪穴住居跡と考えられる。

SD02～SD06（第7図）

Ⅰ区の北側に位置する溝である。5本とも西から東に流れていたと考えられ、等高線に沿うように中央部をやや南に湾曲するように、またそれぞれほぼ平行に掘り込まれている。SD02～SD06それぞれの長さはおよそ17m、27.5m、29m、11m、1.5mであるが、SD05とSD06については1本の溝だったと思われる。溝本来の堀込み面ははほとんど残っていないが、現存で深さは20cmから30cmである。ただしSD05、SD06は数cmしか残っていない。遺物は近世の陶磁器が出土している。遺構の性格も不明である。



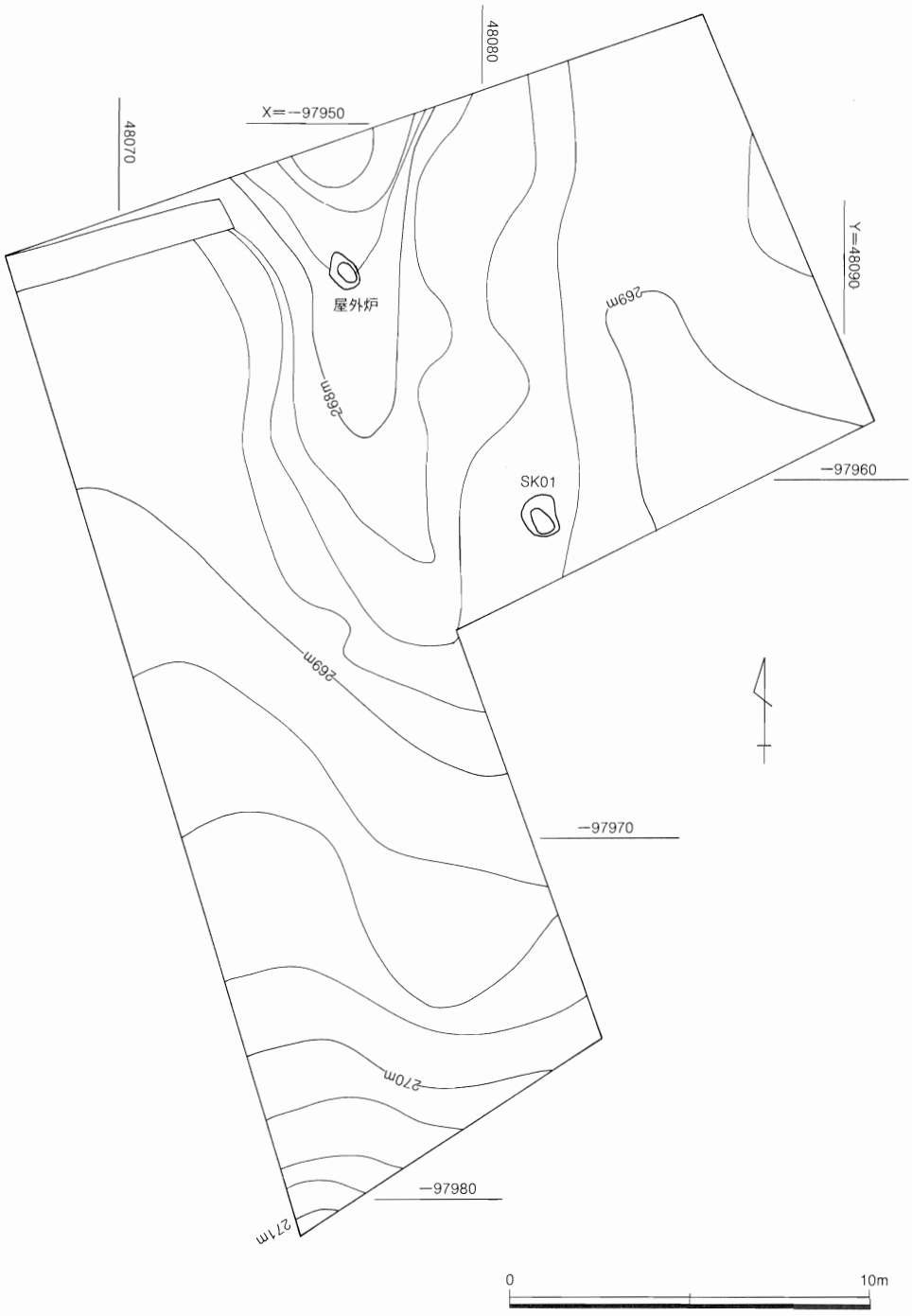


第7図　SD02～06実測図（S＝1／200）

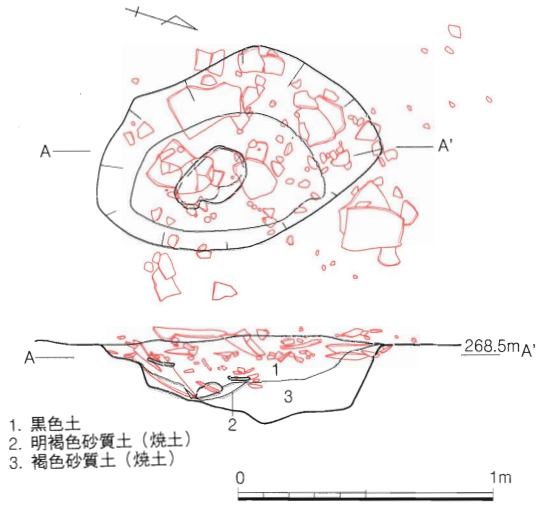
Ⅰ区屋外炉（第9図）

標高268.6mのあたりに位置し、第2黒色土中で検出している。掘り形は平面形が長軸1.3m、短軸0.7mのゆがんだ楕円形をしている。深さは最深部で0.35mを測り、すり鉢状に掘り込まれている。土層は3層に分かれている。

第1層からは遺物、炭が出土している。第2層、第3層は焼土が確認されている。第1層と第2



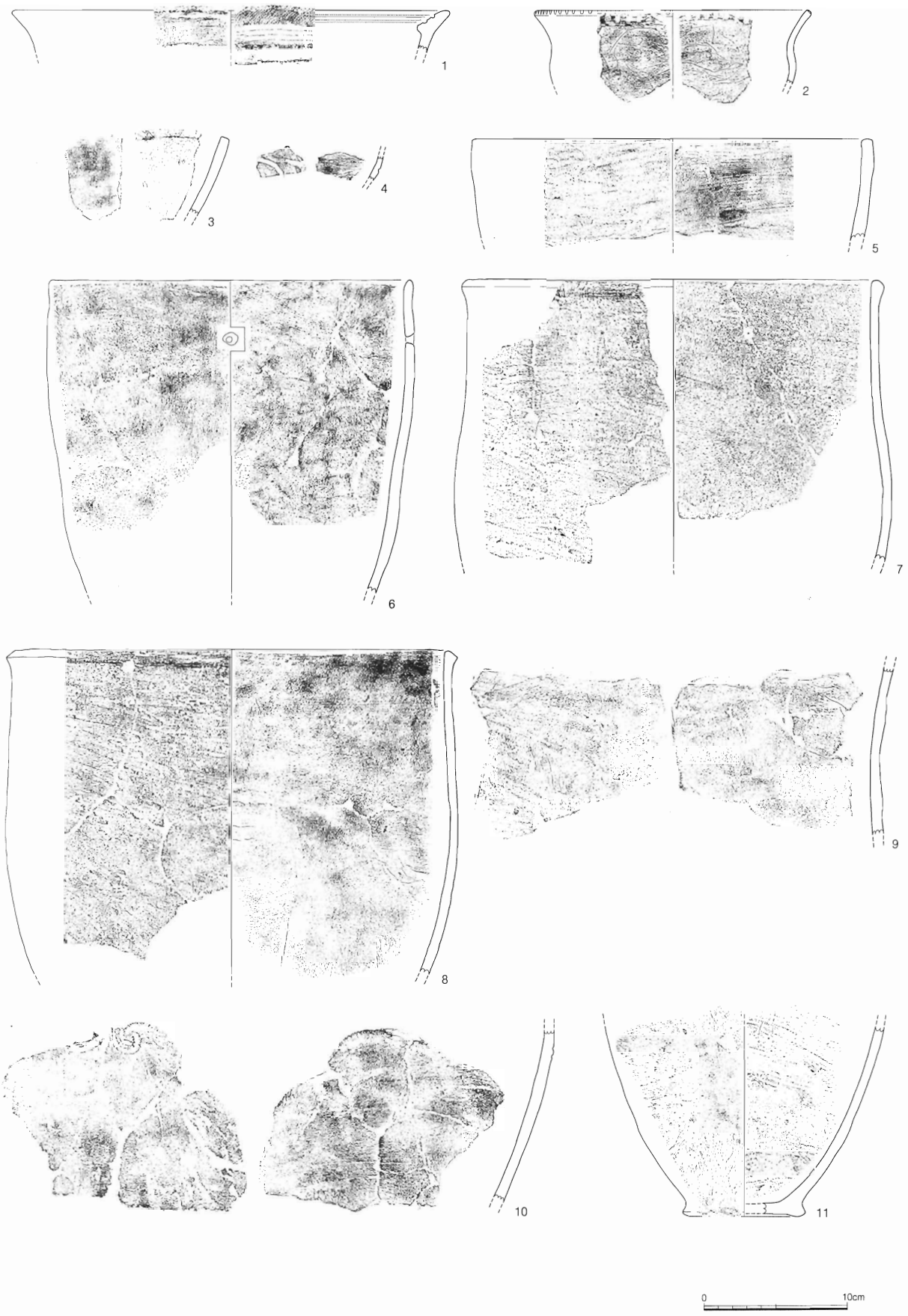
第8図　Ⅰ・Ⅲ区第3ハイカ層上面完掘状況図（S＝1／200）



第9図　屋外炉実測図（S＝1／30）

層の境界面には長軸30cm、短軸20cm、厚さ６cmの礫が置かれていた。

炉跡からは縄文土器が出土した。（第10図１～11）１は深鉢で、口縁部内面を肥厚させ２条の沈線を施し、外面に縄文を施している。２は浅鉢でやや内湾しており、色調は明るい赤褐色を呈している。内外面ともに丁寧に磨いている。３は薄手の浅鉢で、沈線が施されており、沈線の間に縄文が施されている。内外面ともに磨いている。４は鉢で、口縁部に刻目文が施されているが胴部は無文である。５～11は粗製の深鉢である。５は口径27.6cmで内外面ともに条痕文が施されている。６は口径25.2mで口縁部下４cm付近に外側直径９mm、内側直径４mmの穿孔が１カ所なされている。内外面ともにナデ調整である。10は胴部にＪ字の対向施文が沈線で施されており、沈線間に縄文が施されている。11は胴部から底部にかけて残存しており、外面はナデ調整、内面は貝殻条痕文を施している。これらの遺物は、後期前葉の彦崎ＫⅠ式に併行する時期と考えられるが、３については彦崎ＫⅠ式もしくはそれより少し新しい時期が考えられる。



第10図　屋外炉出土土器実測図（S＝1／4）

Ⅰ区SK01（第11図）

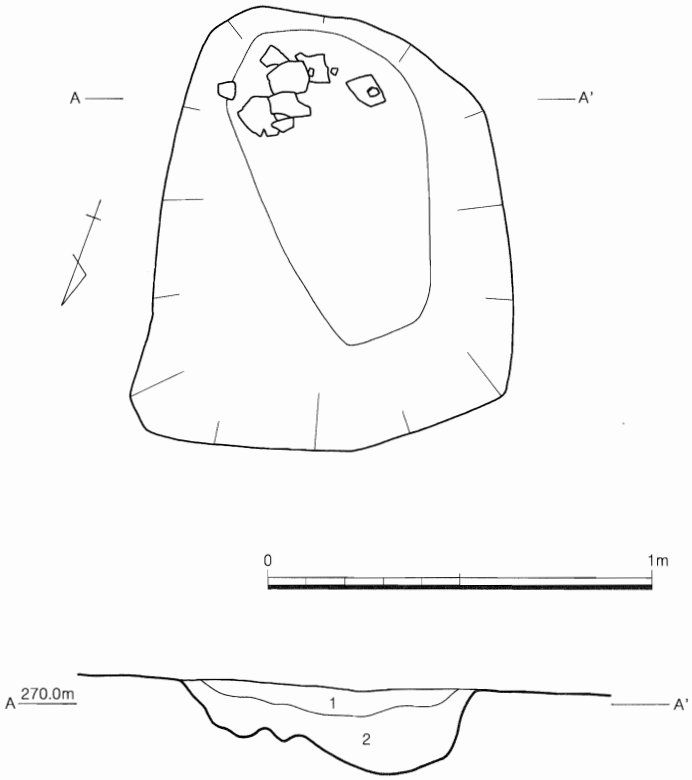
標高270.1mあたりで、Ⅰ区の北側に造られている。第2黒色土中で検出しており、平面隅丸の台形で、長軸1.2m、短軸0.9m、深さは最も残りが良いところで深さ25cmである。

出土遺物（第12図）

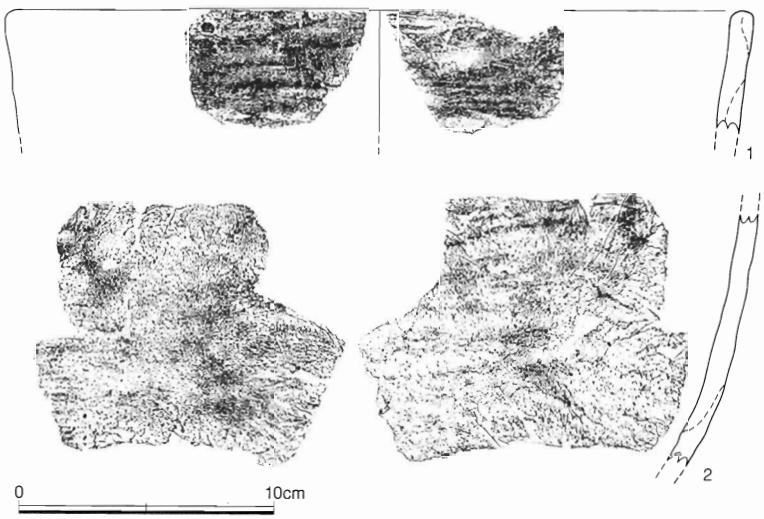
出土した遺物は全て縄文土器である。

第12図1は粗製深鉢の口縁部である。2は粗製深鉢の胴部である。両者とも内外面を強くナデている。

1と2は粗製深鉢で、時期を特定するのは困難である。しかし第Ⅱ黒色土層中の遺構と遺物なので、縄文時代中期後半から後期前半までと考えられる。遺構の性格については不明である。



第11図　SK01実測図（S＝1／20）

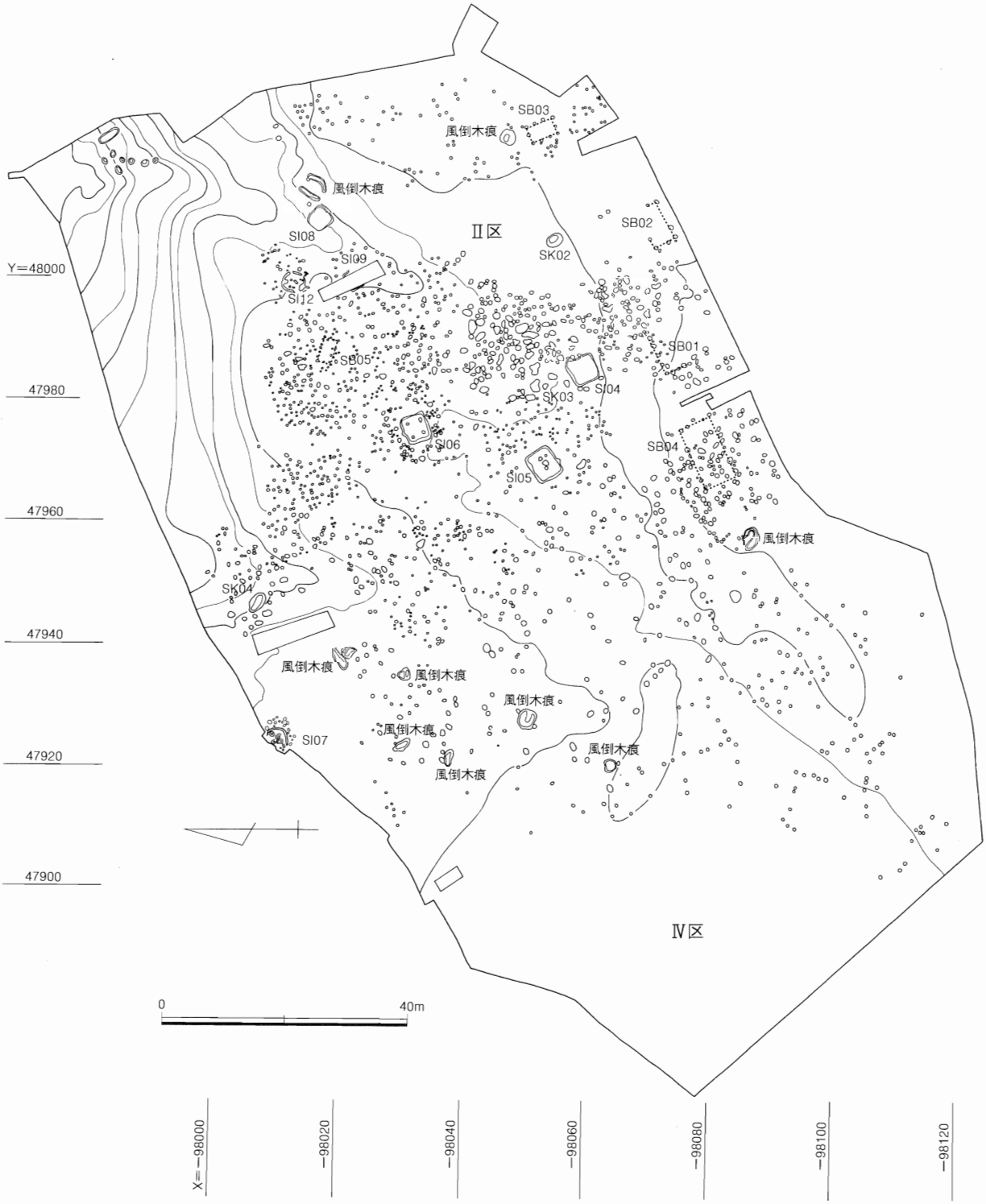


第12図　SK01出土遺物実測図（S＝1／3）

表4　溝状遺構一覧

調査区	遺構名	規模（m）			形状	出土遺物	時期	備考
		長さ	幅	深さ				
Ⅰ区	SD02	約16	1.8	0.4	蛇行する		近世	
Ⅰ区	SD03	約28	1.2	0.2	蛇行する		近世	
Ⅰ区	SD04	約30	1.6	0.6	蛇行する		近世	
Ⅰ区	SD15	約13	0.8		蛇行する		近世	
Ⅰ区	SD06	約 1.8	0.8		蛇行する		近世	

第５節　Ⅱ・Ⅳ区の遺構

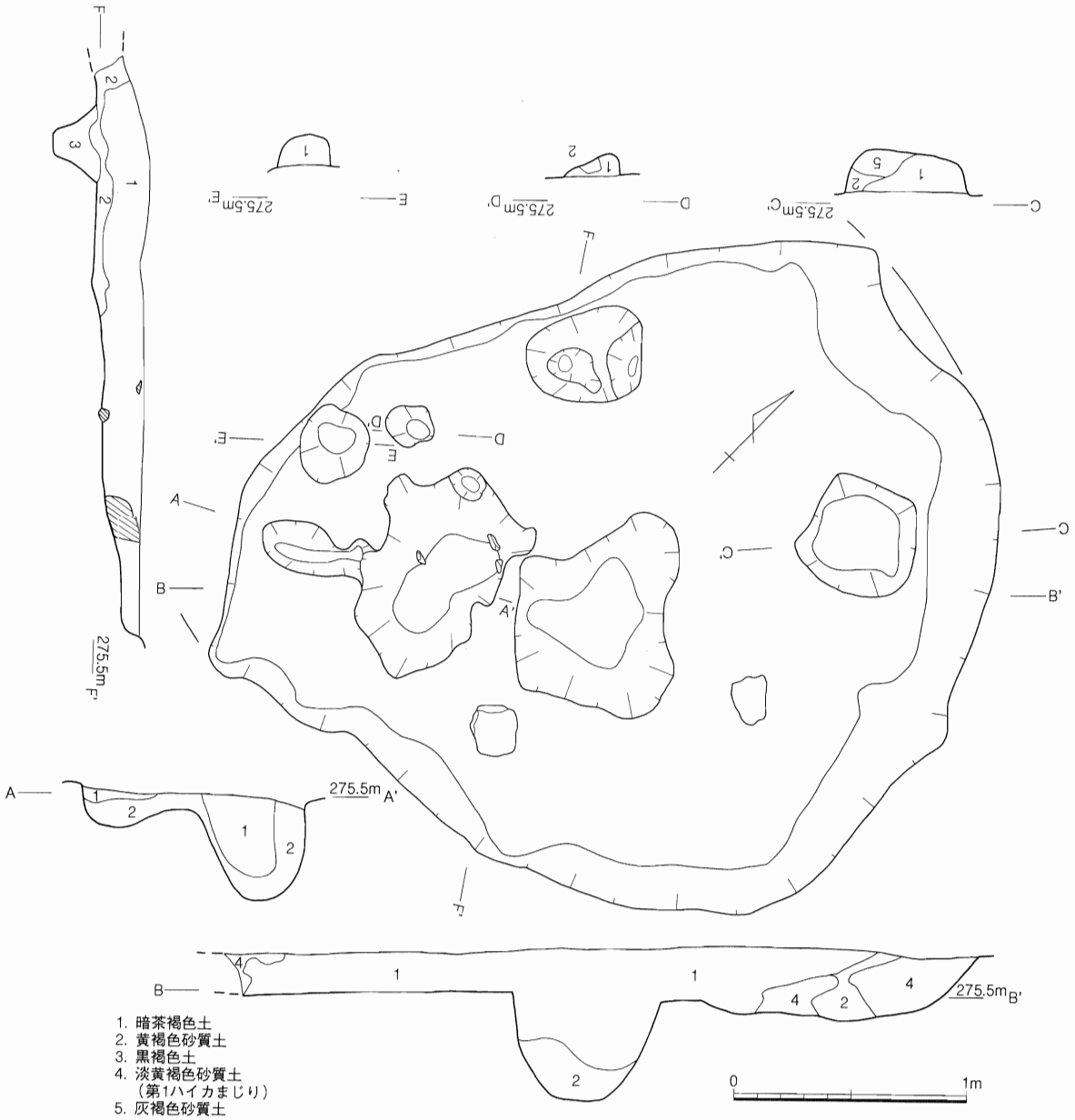


第13図　Ⅱ・Ⅳ区第1ハイカ層上面遺構配置図（S＝1／1000）

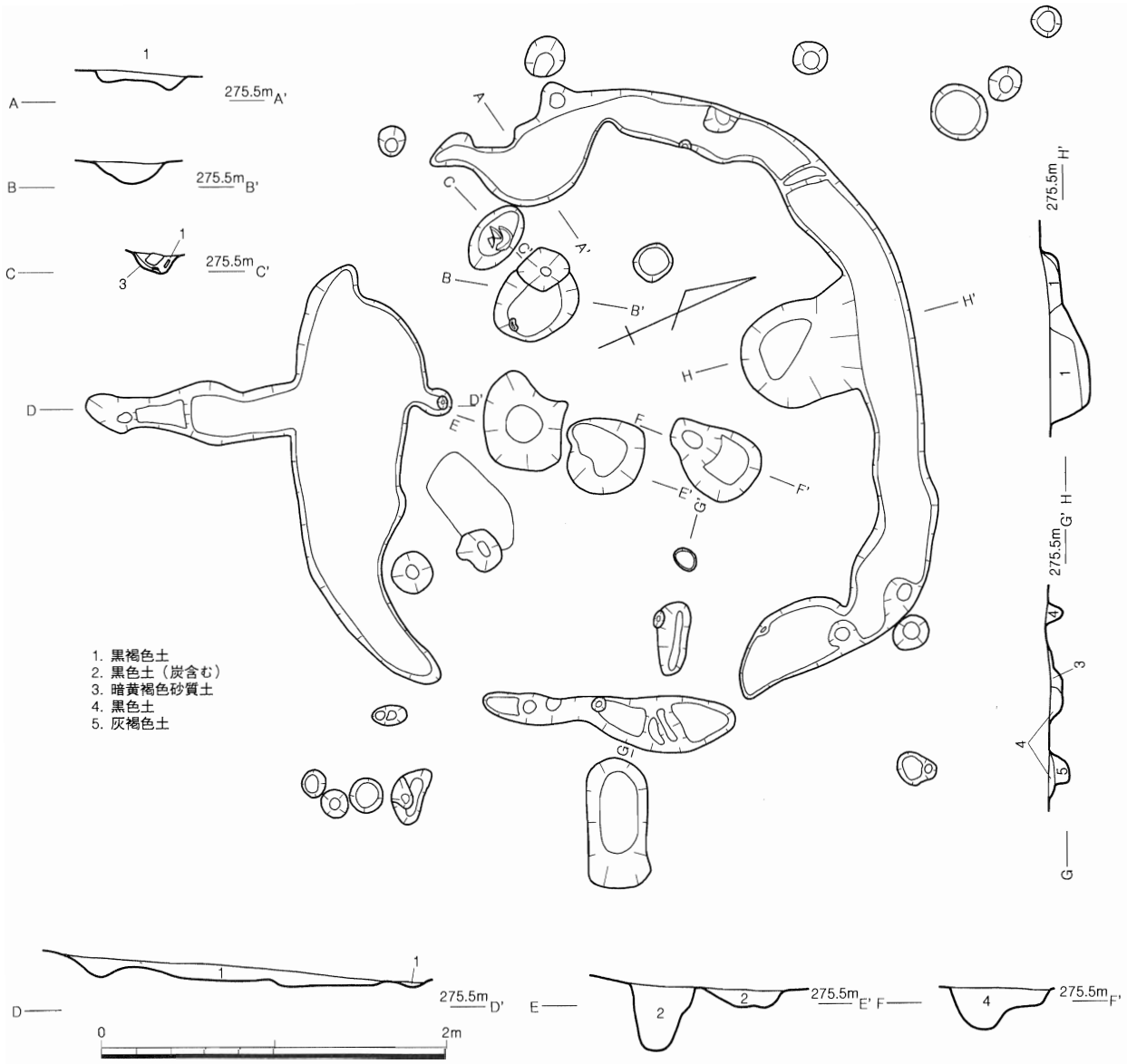
Ⅳ区SI07（第14図）

SI07はⅣ区の中央北端にあって、調査区外に遺構の一部が広がっている竪穴建物跡である。したがって遺構全体の調査は行えなかった。平面プランは検出できた部分から判断すると隅丸方形に近いように思われるので、調査は４分の３は終了していると思われる。遺構は最大径3.1ｍで深さは30㎝程残っていた。床面にはピットが数個掘られており中央からやや壁に近い所に中央ピットと思われる直径が50㎝を越えるような土坑が２つ検出された。その他のピットは柱穴になると思われるが規則的な配置は確認できなかった。床面からは礫が数点出土している。一つはブロック状の平面をもつ礫で長さが20㎝程あった。使用痕などは確認できなかったが台石のようなものではないだろうか。

出土遺物は非常に細かく割れている甕の破片が数点出土している。図化は小片のためできなかったが、弥生時代中期後半の土器であると思われる。これらの土器は床面から浮いた状態で出土して

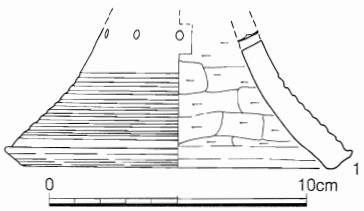


第14図　SI07実測図（S＝1／30）



第15図　SI12実測図（S＝1／40）

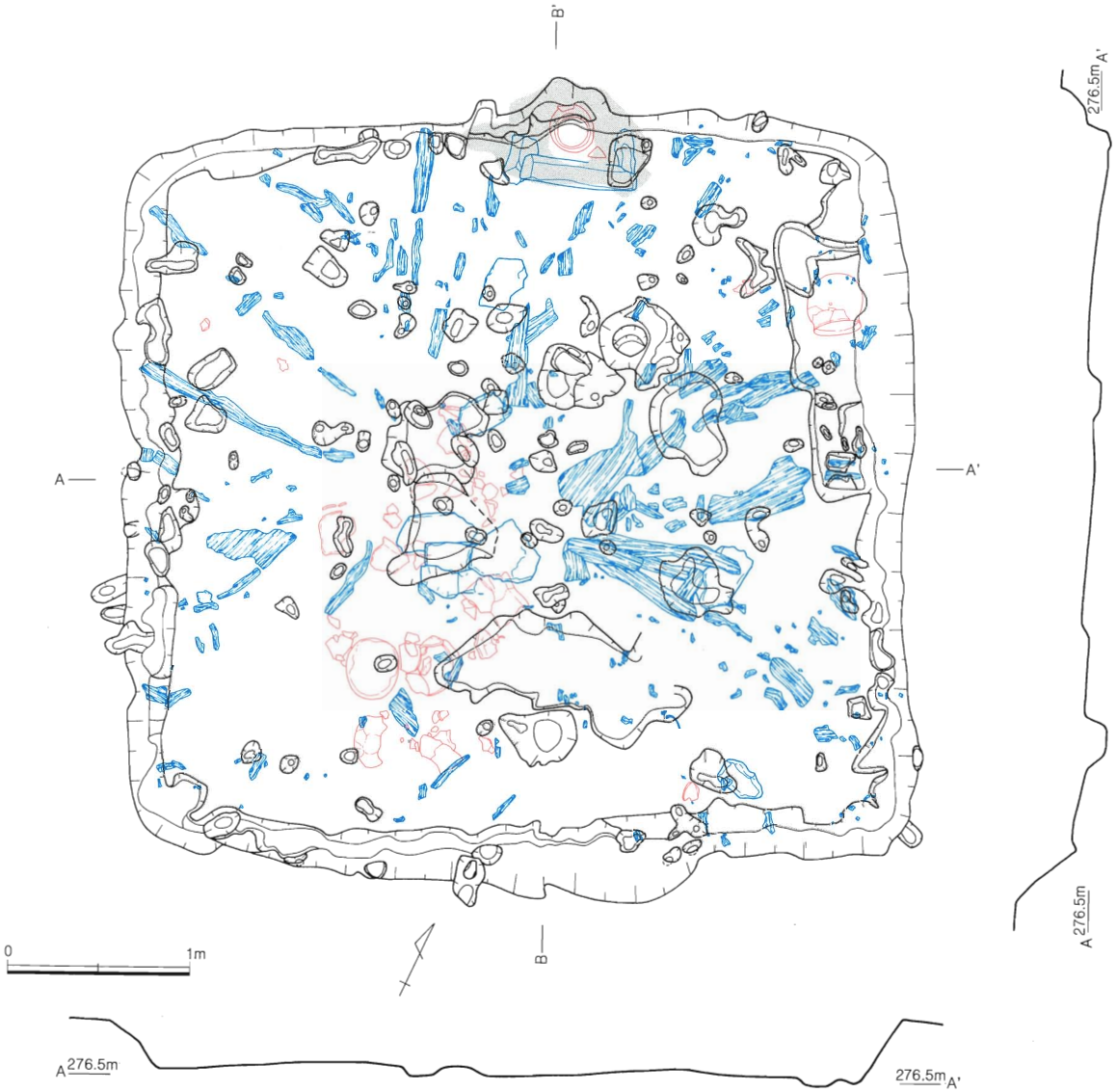
おり、原位置を表してはいないと思われるが、この竪穴建物の使用されていた時期とさほど離れていないと考えている。この遺構は弥生時代中期後半以降の竪穴建物跡と思われる。



第16図　SI12出土遺物実測図（S＝1／3）

Ⅱ区SI12（第15図）

SI12はⅡ区を神戸川に向けて下る小谷（谷地形）の左岸の平坦面に位置する。検出した段階で壁は全く残っておらず溝（周溝）とピットで竪穴建物跡と判断した。周溝は円く回っており円形の住居であったと考えられる。床面には柱穴と思われるピットと、中央ピットと思われる土坑が3穴検出された。柱穴と思われるピットも規則的な配置ではなかった。遺物はピットの覆土から、4分の3ほど残っている高坏の脚部が出土している。土器の上には礫が重なっていた。この出土状況が何を表しているのか不明である。またこの土器の残りの部分は表採されているのでSI12は遺構



第17図　SI04実測図（S＝1／40）

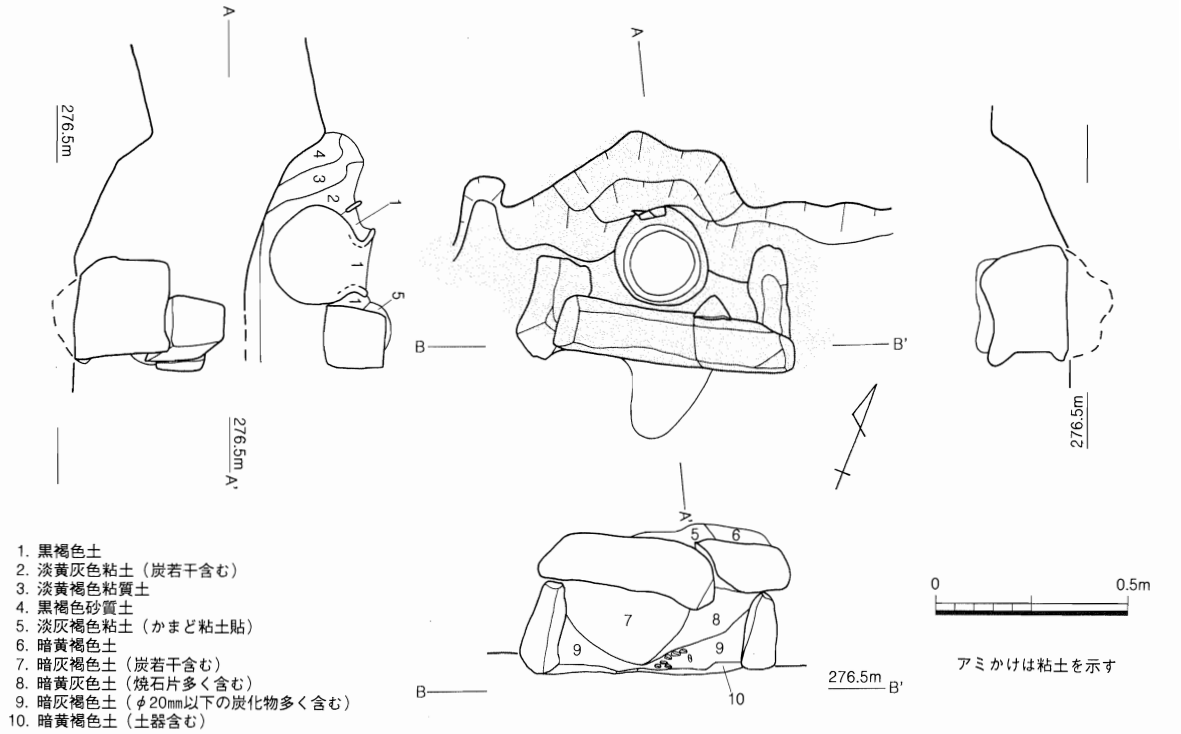
の上面を削平されていたものと考えられる。

出土遺物（第16図）　SI12内のピットから出土した高坏の脚部である。外面には凹線が施されていて内面は横方向に削っている。外面から内面に向けて穿孔が施されている。遺物の時期は松本編年のⅣ－２様式と思われる。したがってSI12は弥生時代中期後葉以降の竪穴建物跡と考えられる。

Ⅱ区SI04（第17～22図）

Ⅱ区の西寄りの平坦面に位置している。後述するSI05とSI06とは10mと24mしか離れていない。平面形は方形で北壁に竈がある。主軸は4.2mで他は4.3m、面積は18㎡であった。深さは30㎝前後で、上部はやや削平されていると思われる。床面からは規則的に並ぶ柱穴といったものは無いが、小ピットが検出されている。周溝は最大幅18㎝深さ４㎝で竈部分以外に回っている。北東壁際には極浅い堀込みが広がっているが入り口などの施設であるかは不明である。

この遺構には多量の土器と炭化物が出土している。土器などは後述するのでここでは炭化物（炭化材）について述べたい。SI04で出土した炭化材は四方の壁から中央に向けて放射状に倒れ込んでいる状況で出土している。壁際以外では炭化材は床面に接する状況で出土していた。ほとんどは丸



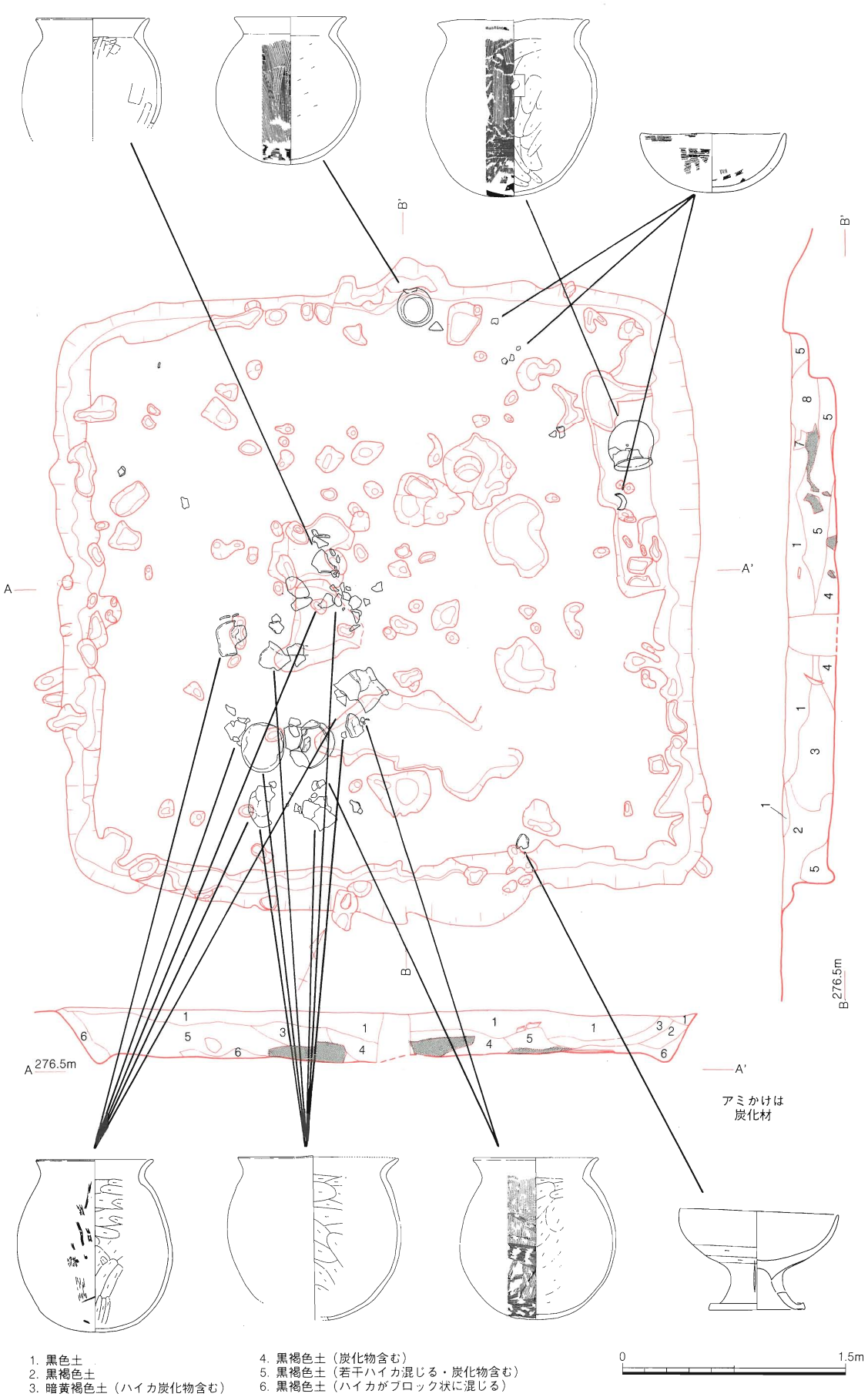
第18図　SI04竈実測図（S＝1／20）

太材で中央西寄りで出土した１点だけ板材であった。ピット内に埋まっていたものは無かった。したがって炭化材は主柱ではなくほとんどが垂木ではないかと考えている。小丸遺跡から出土した炭化材の樹種同定結果を第４章に掲載している。SI04は12点分析しておりノグルミが10点、コナラ属コナラ節とケヤキが各１点であった。ほとんどはノグルミであったが板材のNo.396はケヤキであった。また近接する丸太材（No.290）はコナラ属でその他の炭化材とは異なっており、板材とその周囲の木材は意図的に樹種を変えている可能性がある。

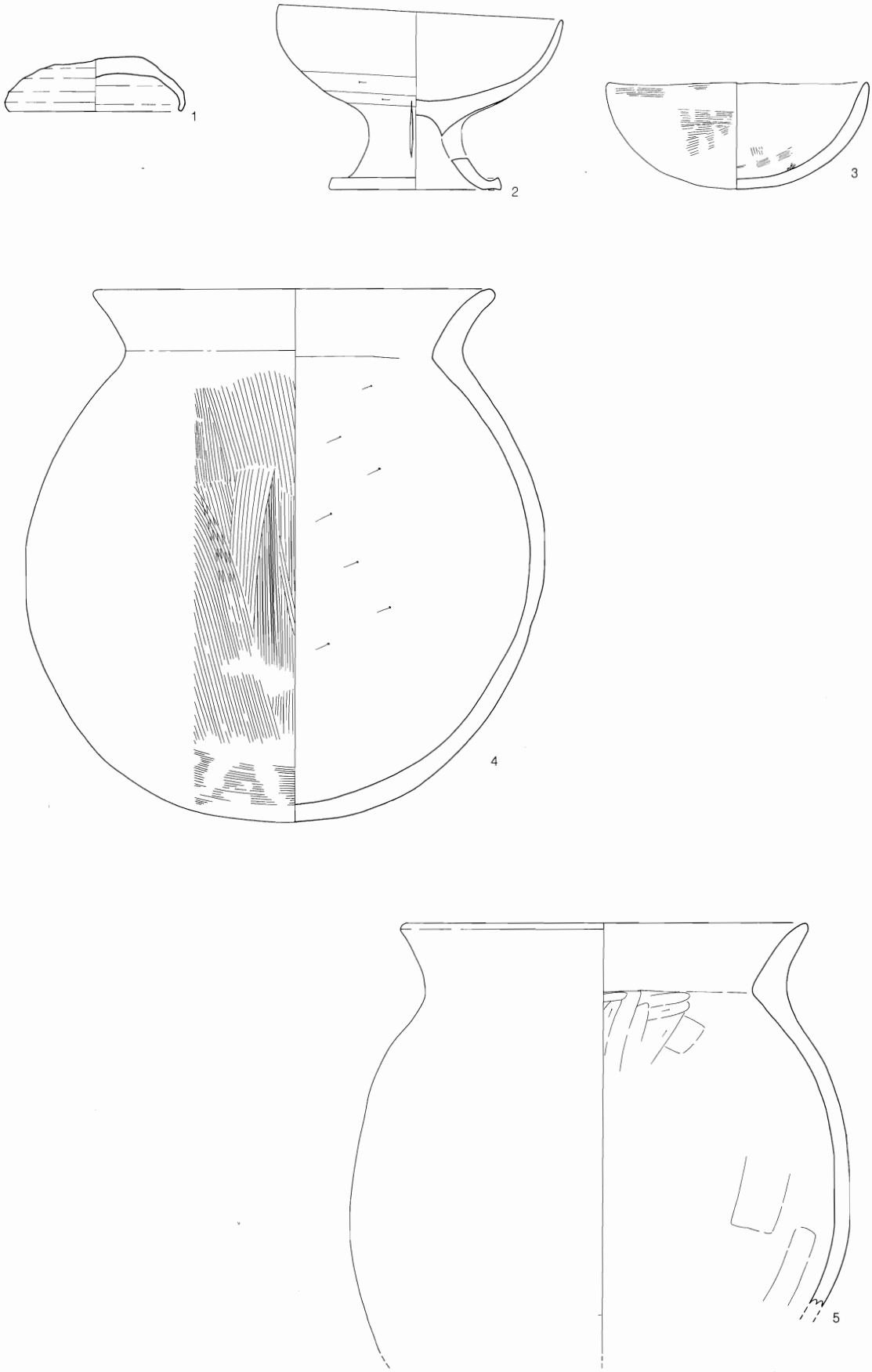
また写真図版16上のように壁の上端から倒れ込んでいる状況から見ると、垂木穴は壁のさらに上にあったが削平されて残っていないものと考えられる。また礫が床の中央部にまとまって出土している。礫を除去すると床面が若干被熱していた。礫には被熱の痕跡は見られなかったが炉のように使われていたのではないかと考えている。

竈の構造は板状の礫を両側に立てその上に柱状の礫が架けられていた。柱状の礫は花崗岩と思われたが赤く変色しており、長期間熱を受けていたものと思われる。これらの礫は粘土に覆われていた。焚き口から燃焼部の床は被熱しており、燃焼部の床から５cm上に土師器の甕（第20図４）が直立していた。壁には煙道が造られているが礫などはなかった。

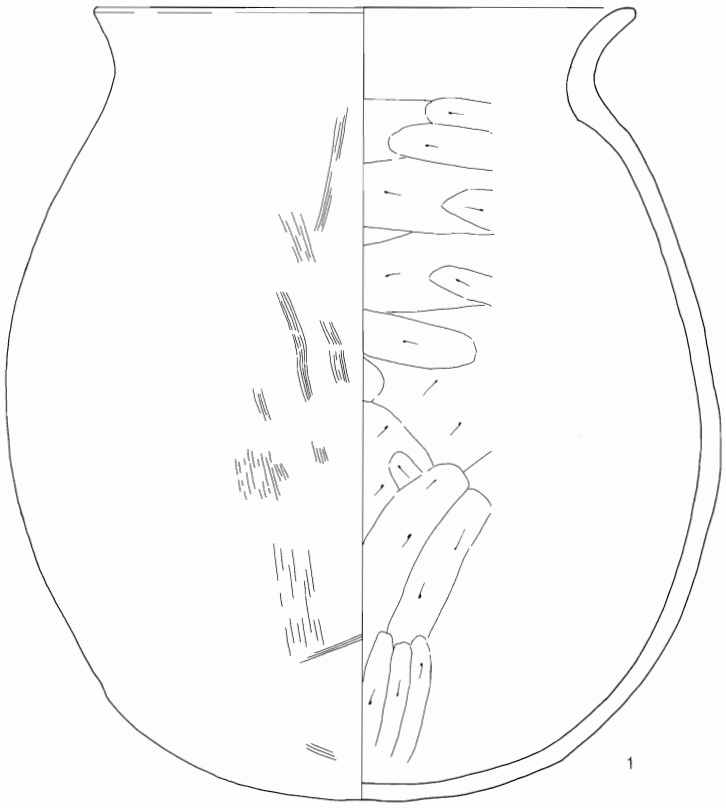
遺物出土状況（第19図）　この遺構からは須恵器と土師器、鉄器が出土している。検出した時点で土師器の小片はかなり出土しており、覆土上層にも多くの小片が混じっていたが、上層の遺物は小片であり原位置を保っていないと思われた。したがってここでは床面に接した、あるいはきわめて近い状況で出土し原位置を保っていると考えられるものを中心に図示している。これら原位置であろう遺物は極近くの破片同士で接合しほぼ完形になるものがほとんどである。出土した遺物は土師器の甕が多く、特に中央南寄りに３個体ほどまとまって出土している。また東壁の際には胴部に穿孔のある甕が転倒していた。

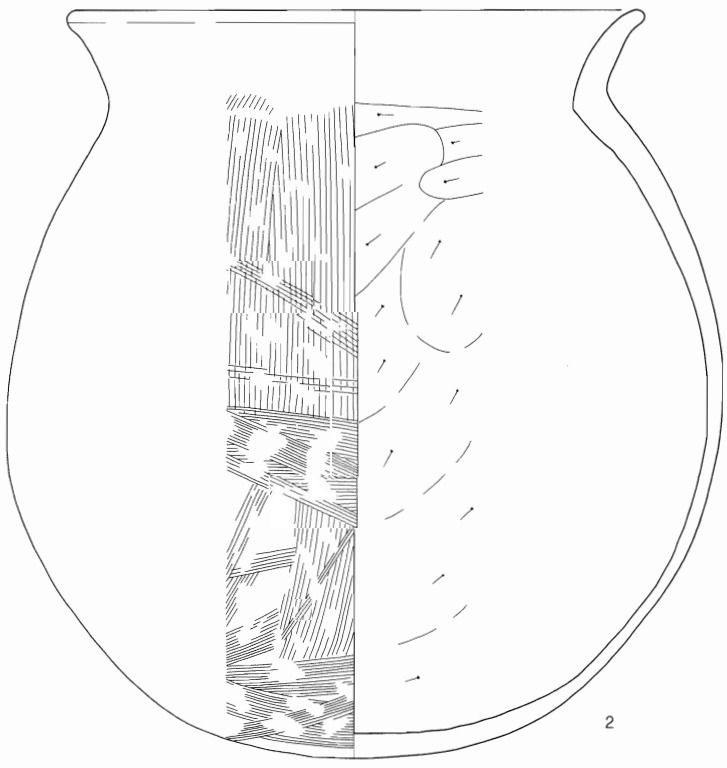


第19図　SI04遺物出土状況図（S＝1／40）

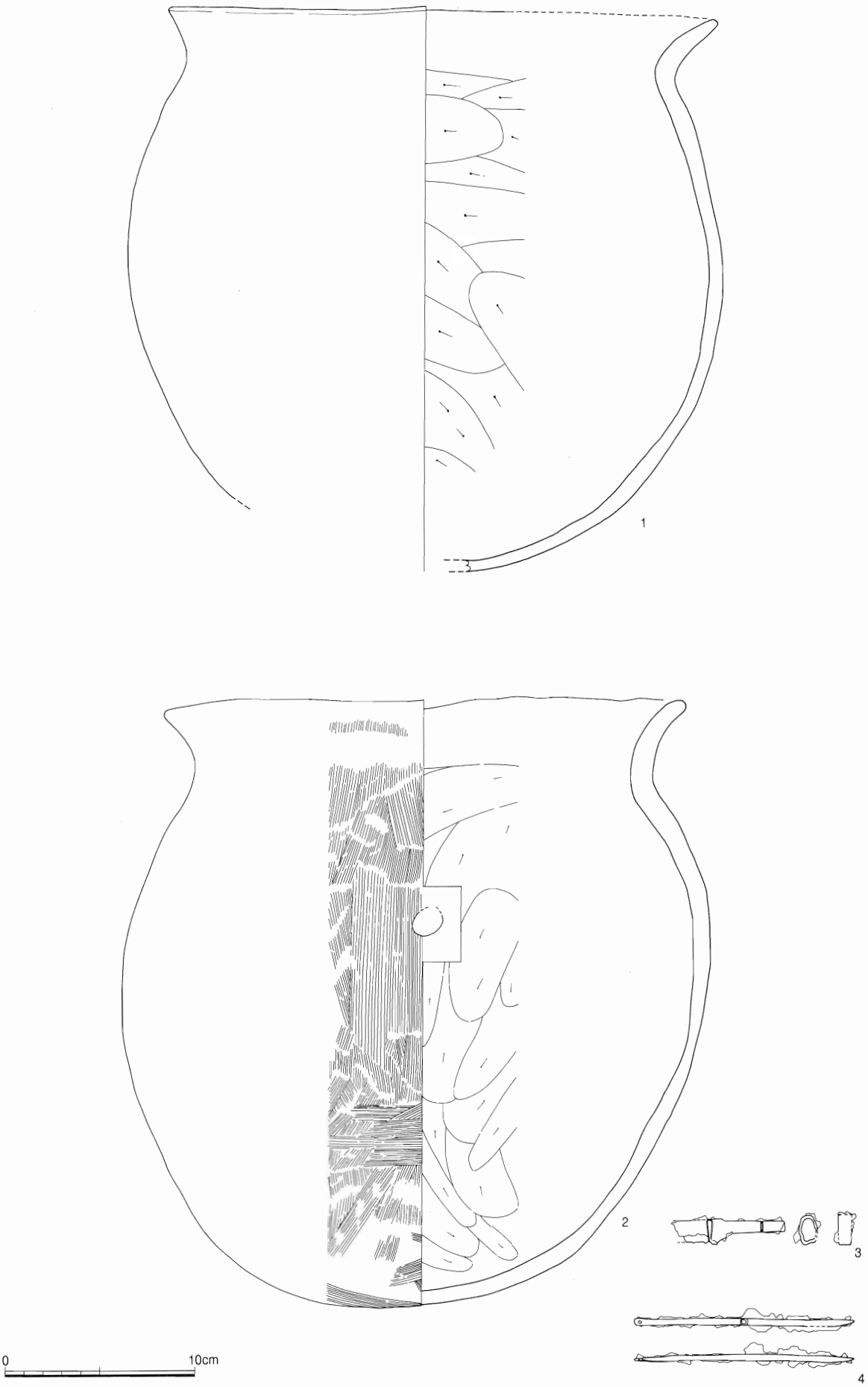


第20図　SI04出土遺物実測図（1）（S＝1／3）





第21図　SI04出土遺物実測図（2）（S＝1／3）



第22図　SI04出土遺物実測図（3）（S＝1／3）

以上のように、この竪穴建物跡には炭化材や完形に近い土器が数多く検出されているので焼失住居であると考えている。

出土遺物（第20～22図）　第20図１と２は須恵器で第20図３と４が鉄器である。その他は全て土師器である。第21図１の杯蓋は径が8.6cmで小形のもの、２は低脚の高杯で大谷編年出雲６期である。３は椀である。４以降の土師器は全て甕である。調整は外面上半はタテハケ、下半には横あるいは斜行ハケが多い。胴部内面はヘラケズリである。器形は胴部が丸形の第20図４や、第21図２、やや長胴気味の第21図１、大形の第22図１・２がある。２は胴部に穿孔が見られる。第22図３は鉄製の刀子である。はばきも共に出土している。４は鉄製の針である。長さが11.6cmもあり古墳から出土する鉄針よりかなり長い。通常の針とは用途が違うのかもしれない。今後の資料の増加に期待したい。出土した須恵器の年代から７世紀前半の竪穴建物跡と考えられる。

Ⅰ区SI05（第23～29図）

SI05はⅡ区の西側の平坦面に位置している。16m北にはSI06があり、10m南東にはSI04が建てられている。平面は長方形で北壁の中央に１号竈があり、南壁の西寄りに２号竈が造られている。主軸は4.4mで他は5.5m、面積は24㎡であった。深さは40cm前後残っているが、上部は削平されていると思われる。床面には２つの主柱穴とその間に掘られた浅い落ち込みがある。主柱穴は２穴とも断面が三角形で、土層の観察からは柱の痕跡は確認できなかった。また２号竈の前面も浅く窪んでいることが確認されている。周溝は確認されていない。四方の壁面には無数の小さな穴が斜めに掘られていた。垂木穴の可能性が考えられる。

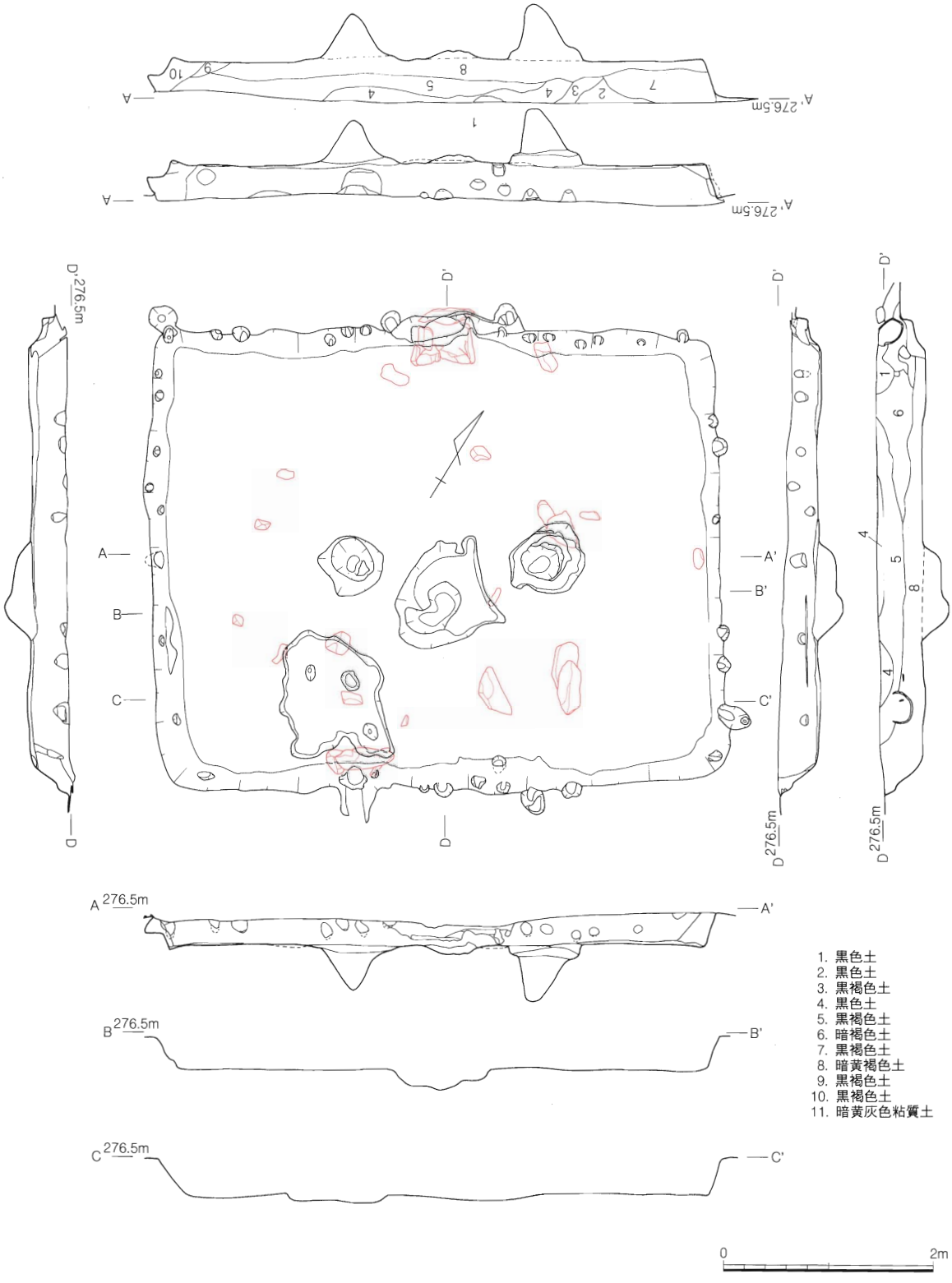
床の中央には直径40cm程の礫が浮いた状態で出土している。その他の直径50cm程度の礫はほとんどが床に接した状態で出土しているので、中央部から出土した礫は使用時の状況は示していないと思われるが、竪穴建物跡に関係したものと考えている。

通常の竪穴住居は竈が１基と考えられるがSI05には２基の竈が造り付けられている。１号竈は小丸遺跡で検出された古墳時代の竪穴建物跡で一般的に見られる北壁に造られた竈である。板状の礫を左右に立てその上に角柱の礫を架けていたようであるが中心で二つに割れている。内部からほぼ完形の土師器の甕が出土している。この甕は同時期の一般的な甕に比べると頸部が長く、やや長胴の印象を受ける。煙道は確認できなかったが壁の上方に据えられていた礫と壁との間が煙道であったことが考えられる。

２号竈は南壁に造られていた。長方形の礫を左右に立てその上に礫を据えている。左右に立てられた礫の大きさは異なるものの１号竈と基本的に同じ構造である。しかし内側から土器は出土しなかった。土圧のためであろうか若干傾いている。煙道と見られる溝が壁を掘り込んでいる。

遺物出土状況（第26図）　SI05からは須恵器と土師器、鉄器が出土していて出土位置にはまとまりが見られる。まず北壁の際、竈の西側には須恵器の杯身が２点まとまっている。竈の東側には須恵器の高杯や杯身、土師器の甕が原位置に近い状況で出土している。次に中央南側には土師器の甕や須恵器の高杯などが出土している。甕と高杯が天地を逆にして置かれているものもあった。これらの土器は竈から比較的近い位置にまとまっているように感じられた。土器の出土している床面には棚などの施設は造られていなかった。

この遺構でもSI04程ではないが炭化物が出土している。SI04では炭化材は中央に向けて放射状に倒れ込んでいる状況であったが、SI05も炭化材の出土数は少ないものの同じ傾向を示していると思



第23図　SI05実測図（S＝1／60）

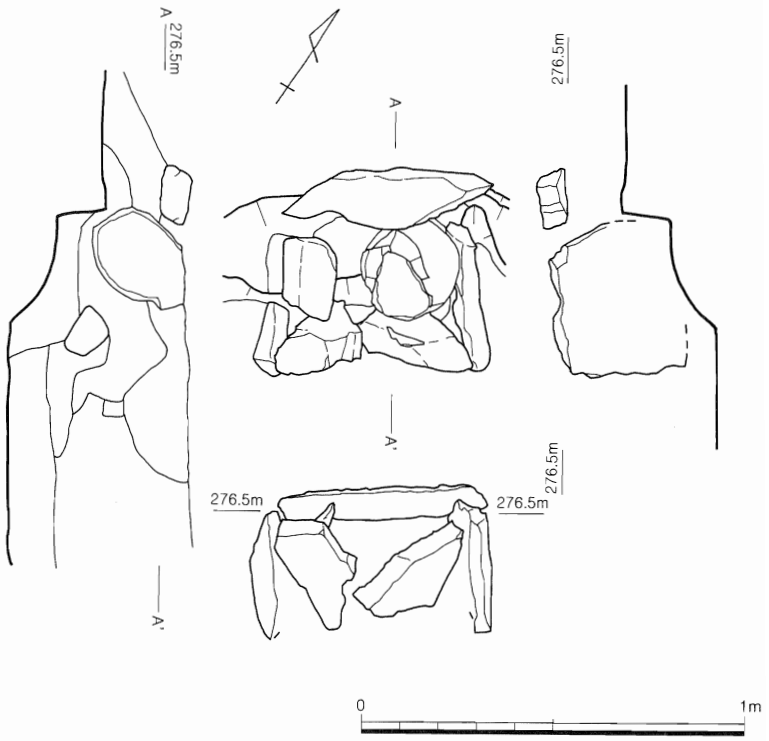
われる。壁面に見られる垂木穴や主柱穴などに直接関係しそうな炭化材は見られなかった。残りが悪いもののほとんどは丸太材である。残りの比較的良い2点の樹種同定を行った結果、ノグルミであることが判明した。

以上のように、この竪穴建物跡には炭化材や完形に近い土器が数多く検出されているので焼失住居であると考えている。

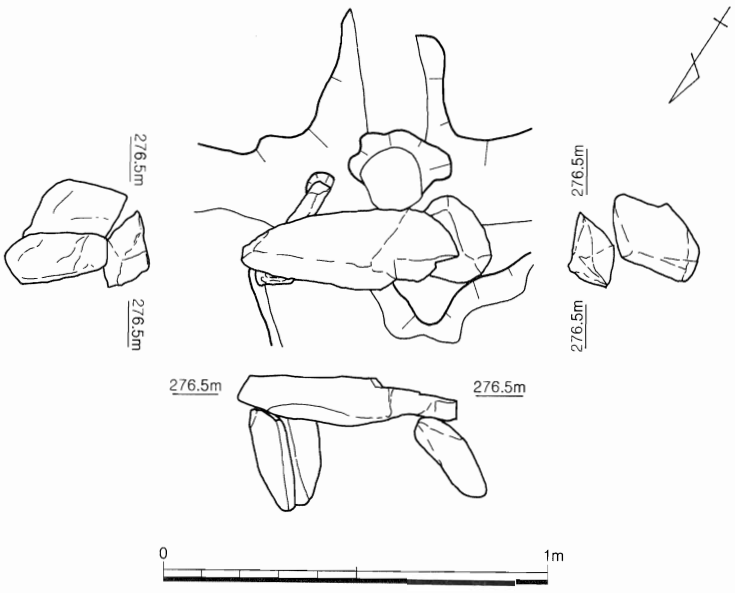
出土遺物（第27～29図）

第27図は全て須恵器で1～3が杯蓋で4～9が杯身、10～18は高杯である。杯蓋の口径は10.5cm前後で小形のものである。杯身も小形で杯蓋とセット関係にあると見られる。蓋と身にはヘラ記号を施されているものもある。なお小丸遺跡のヘラ記号はおおむね「×」である。

高杯は全て杯部の外面に沈線などを施さず、単純に立ち上がるものである。透かしは線状に退化したものと、円形のもの、透かしの無いものに分けられる。脚端部の外面も直立するものと内傾するもの、立ち上がらないものに分けられる。

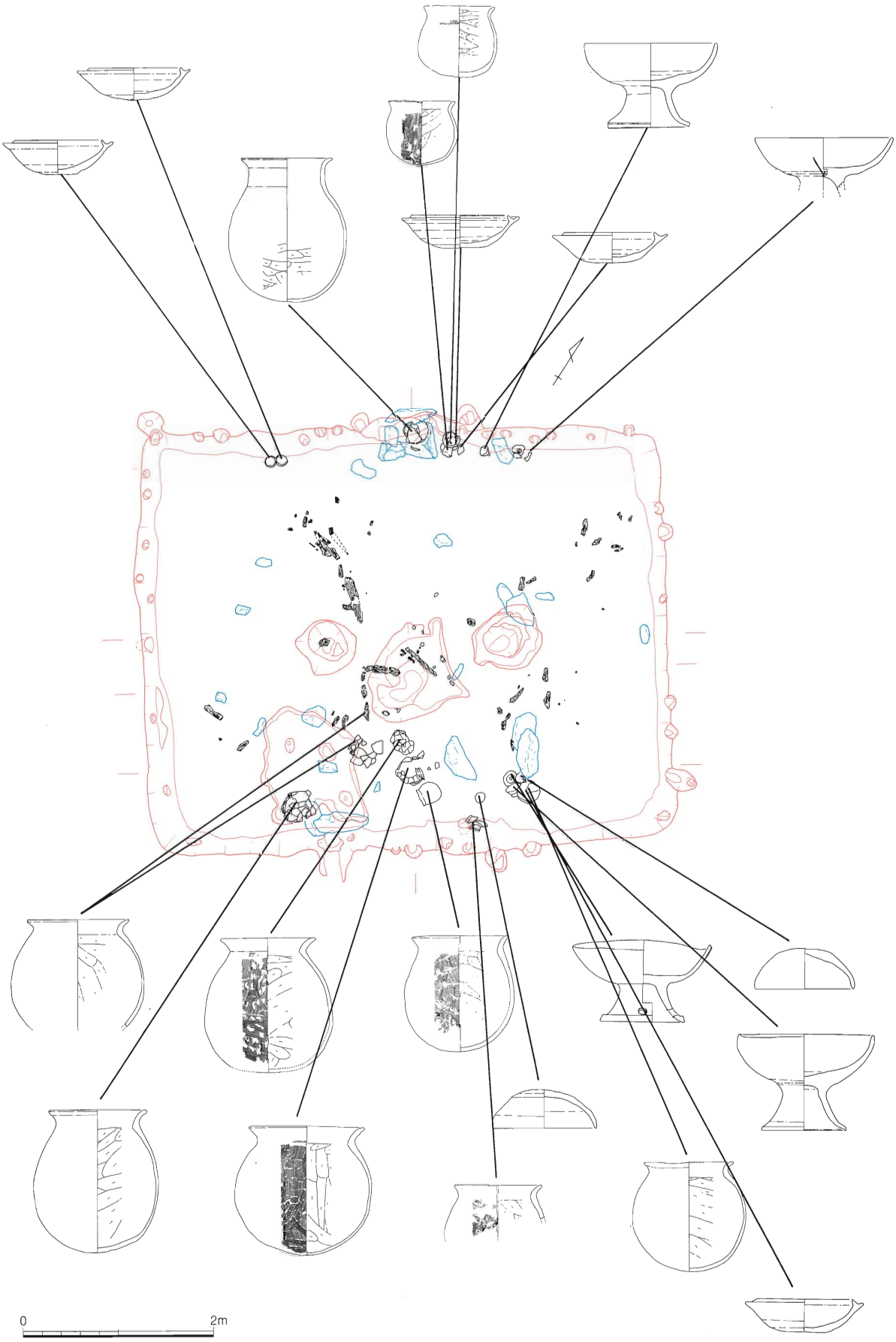


第24図　SI05 1号竈実測図（S＝1／20）

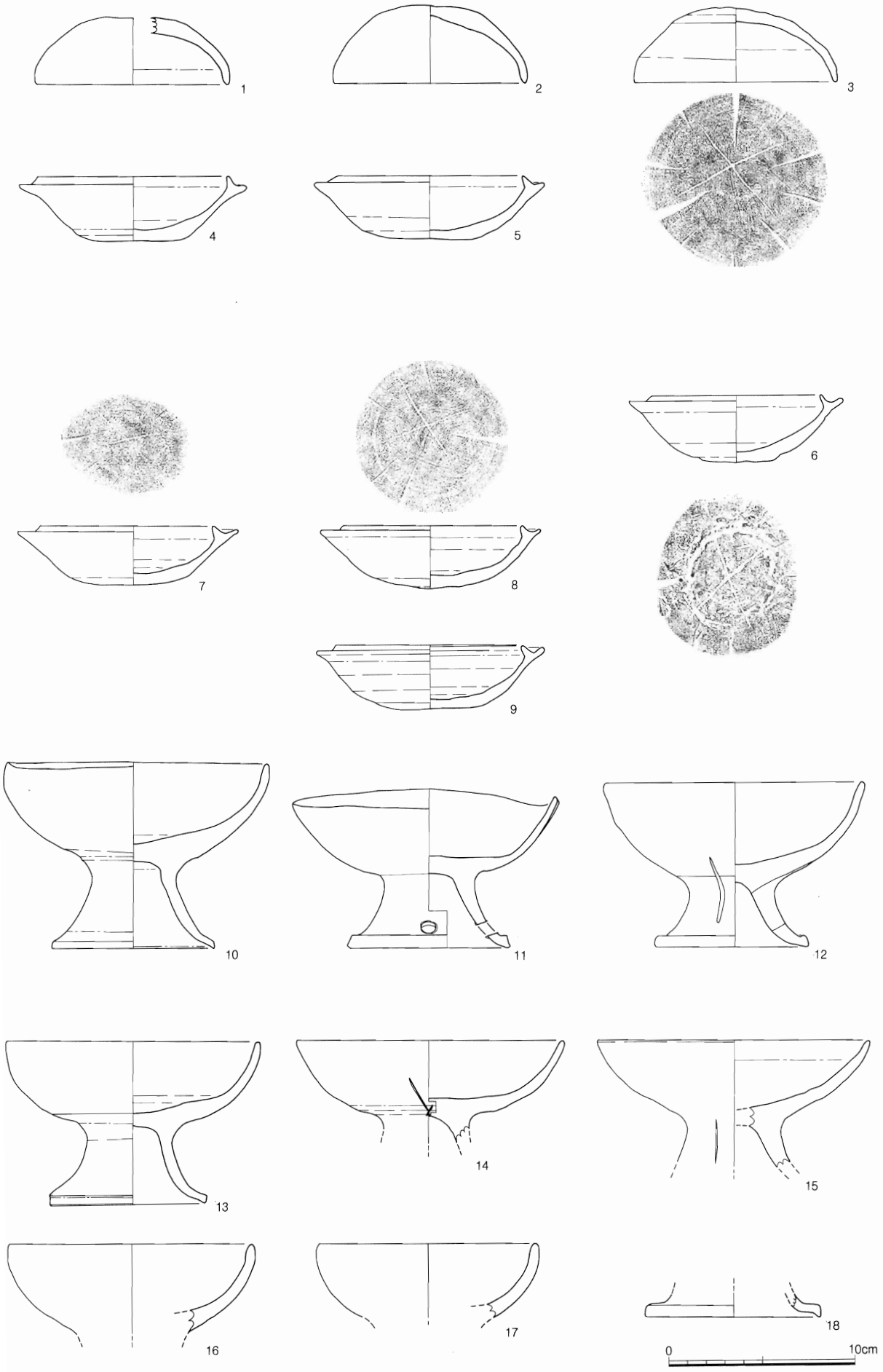


第25図　SI05 2号竈実測図（S＝1／20）

第28図と第29図の1～4は土師器の甕である。第28図1と2は小形の甕でその他は大形のである。小丸遺跡出土の土師器の甕は基本的には外面がハケメ、内面がヘラケズリだが、第29図4は外面下半にヘラケズリを施している。器形もやや長胴気味で頸部が長い。胎土も他のもの比べると白が強

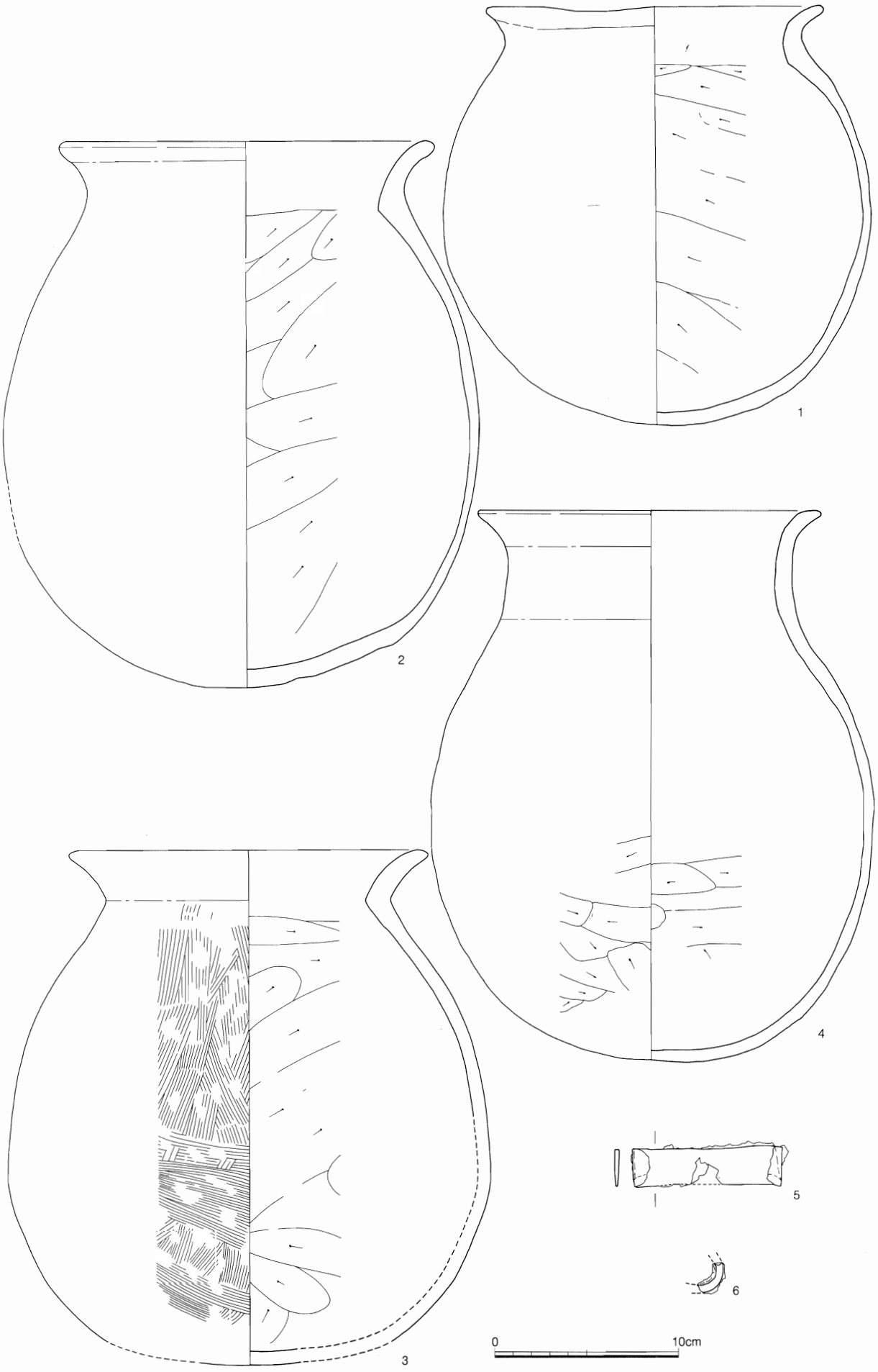


第26図　SI05遺物出土状況図（S＝1／60）

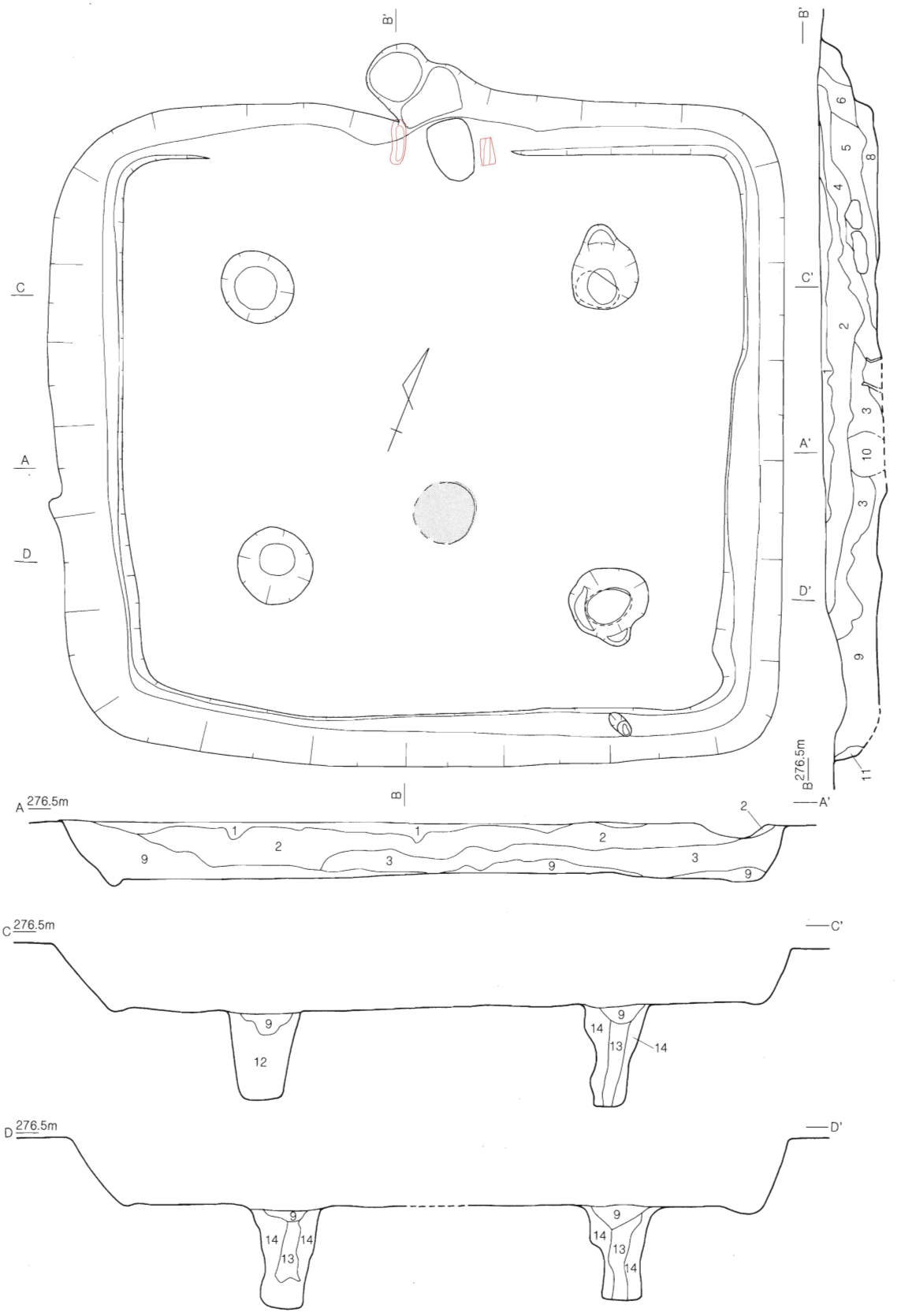


第27図　SI05出土遺物実測図（1）（S＝1／3）

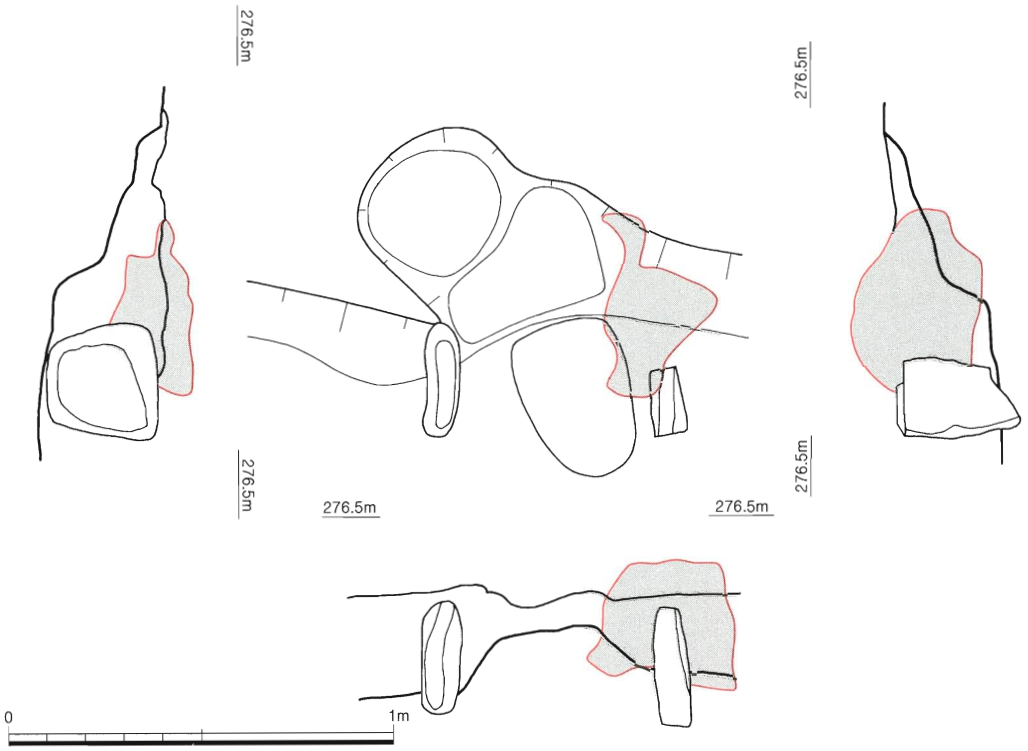
第28図　SI05出土遺物実測図（2）（S＝1／3）



第29図　SI05出土遺物実測図（3）（S＝1／3）



第30図　SI06実測図（S＝1／40）



第31図　SI06竈実測図（S＝1／20）

い。他地域からの影響も考えられる。

第29図５・６は鉄器である。５は穂摘具で、折り返しの刃部側がしっかりと押さえてあるものである。６は器種不明であるが、釣り針であろうか。

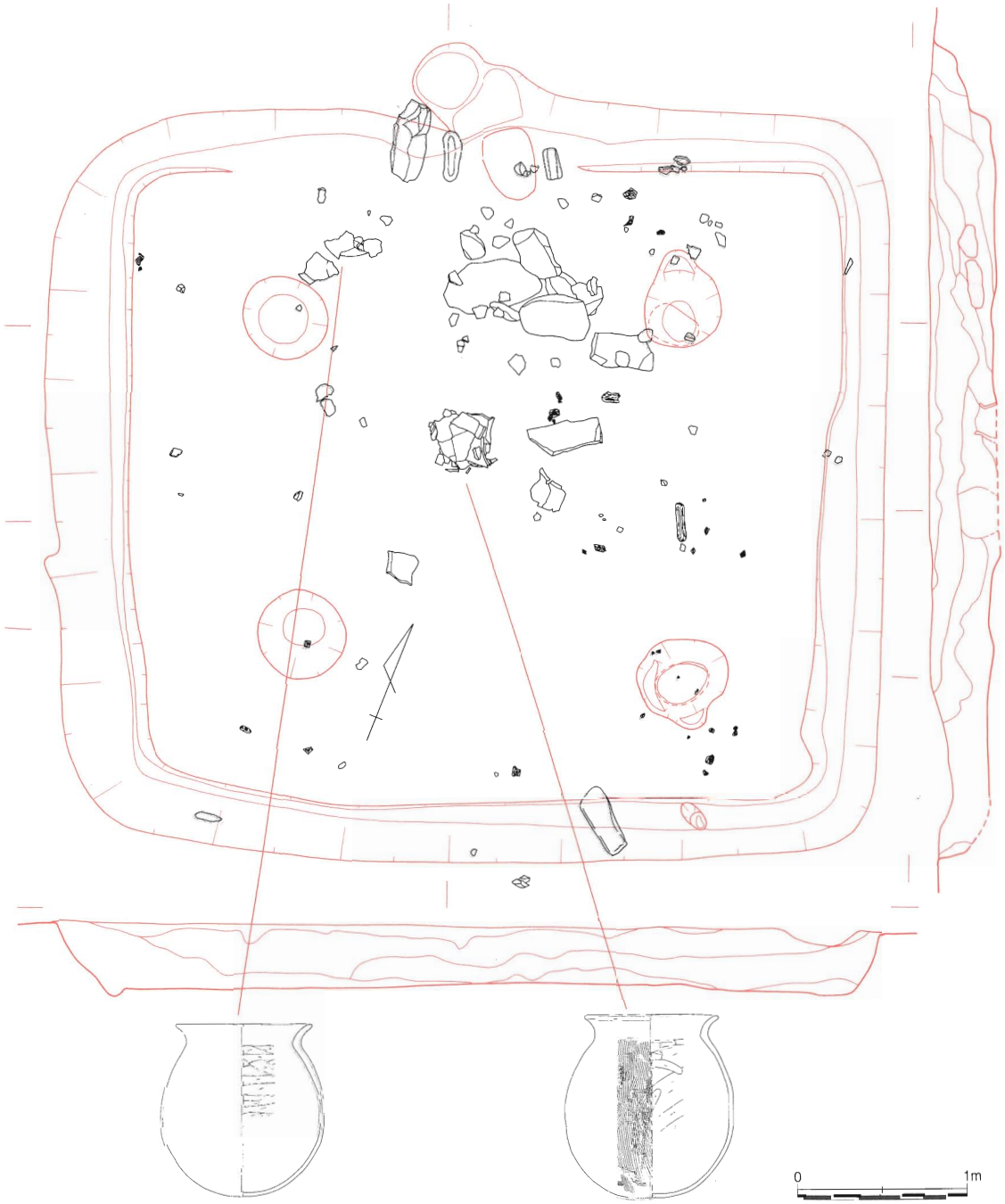
出土した須恵器から７世紀前半の竪穴建物跡と考えられる。

SI06（第30～33図）

SI06はⅡ区の西側の平坦面に位置し、南16mにはSI05が建てられている。平面形は方形で北壁の中央に竈があり一辺4.5～５mで面積は24㎡、深さは40㎝前後である。床面には深さが65㎝程度の主柱穴が４穴検出された。この深さは腕を伸ばして掘ることのできる限界であったと思われる。周溝は竈の周囲を除き掘られていた。床面は平坦である。竈は左右に板状の礫を立て粘土で覆っていたようである（第31図）。SI04の竈とは異なり左右の礫には何も架けられていないが、竈のすぐ左側には、被熱して赤く変色した柱状の礫が立てられていた。この礫は竈の焚き口に架けられていた礫と考えられるが、何らかの理由によりそこに立てかけられていたと考えられる。また竈内の床には焼土面が検出されている。煙道も造られていたが上部は削平されているようで、検出された限りでは煙道には礫など設置していなかったようである。煙道から西に広がるピット状の落ち込みは別の遺構と思われる。

出土遺物（第33図）　SI06で出土した遺物は２個の土師器の甕のみである。２つともほぼ完形であった。SI04や05の土師器の甕と器形や調整などほぼ同じである。

遺物出土状況（第32図）　竈近くと床面中央で遺物が出土している。土師器や礫、炭化材が出土しているが、須恵器や鉄器は無かった。土層の観察からは、建物が埋まってから遺物が掘り出された形跡はないので、SI06は元々遺物が少なかったものと考えられる。またSI04やSI05、後述のSI08のように炭化材も少なく焼失住居とは遺物の出土状況からは言えないが可能性は高い。

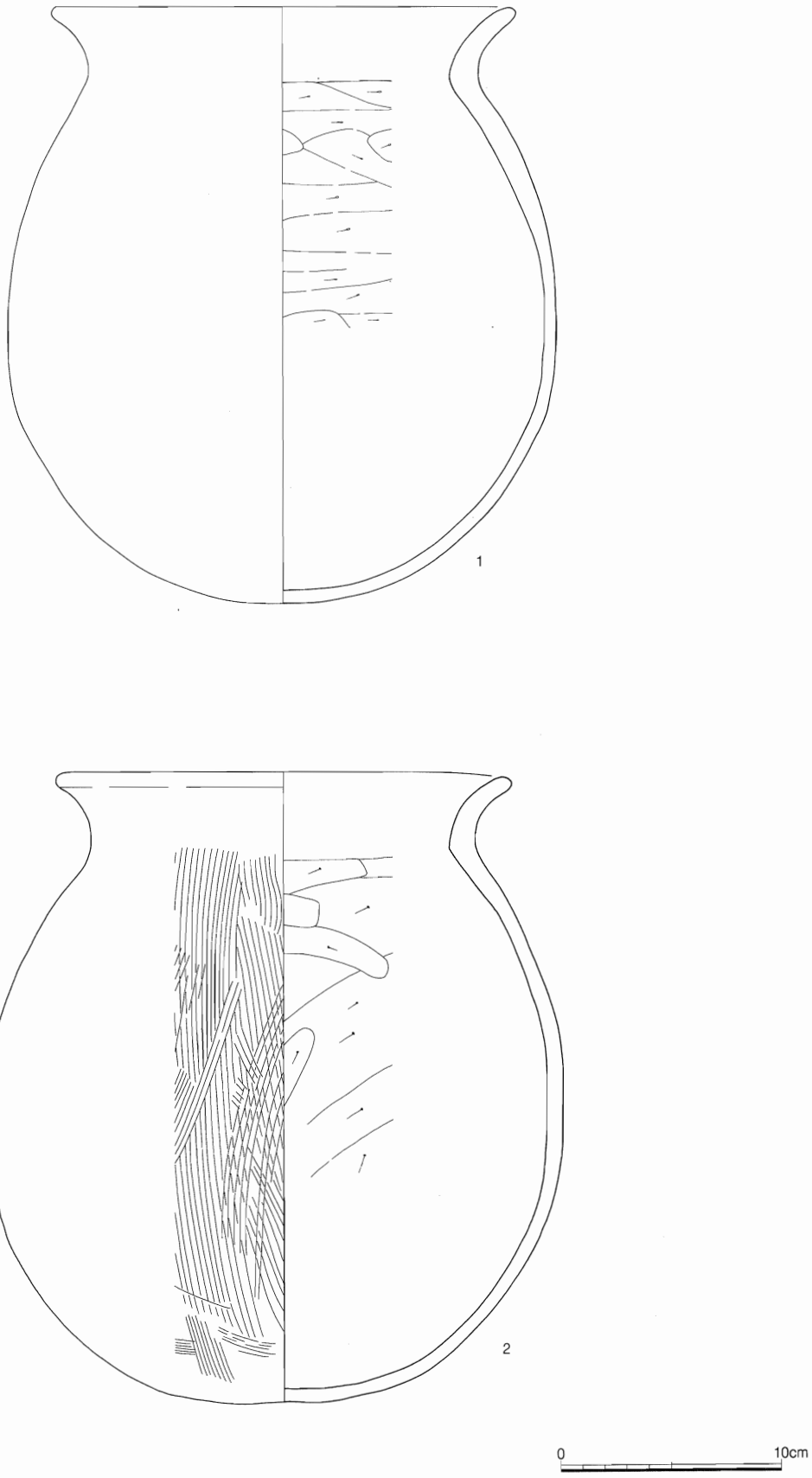


第32図　SI06遺物出土状況図（S＝1／40）

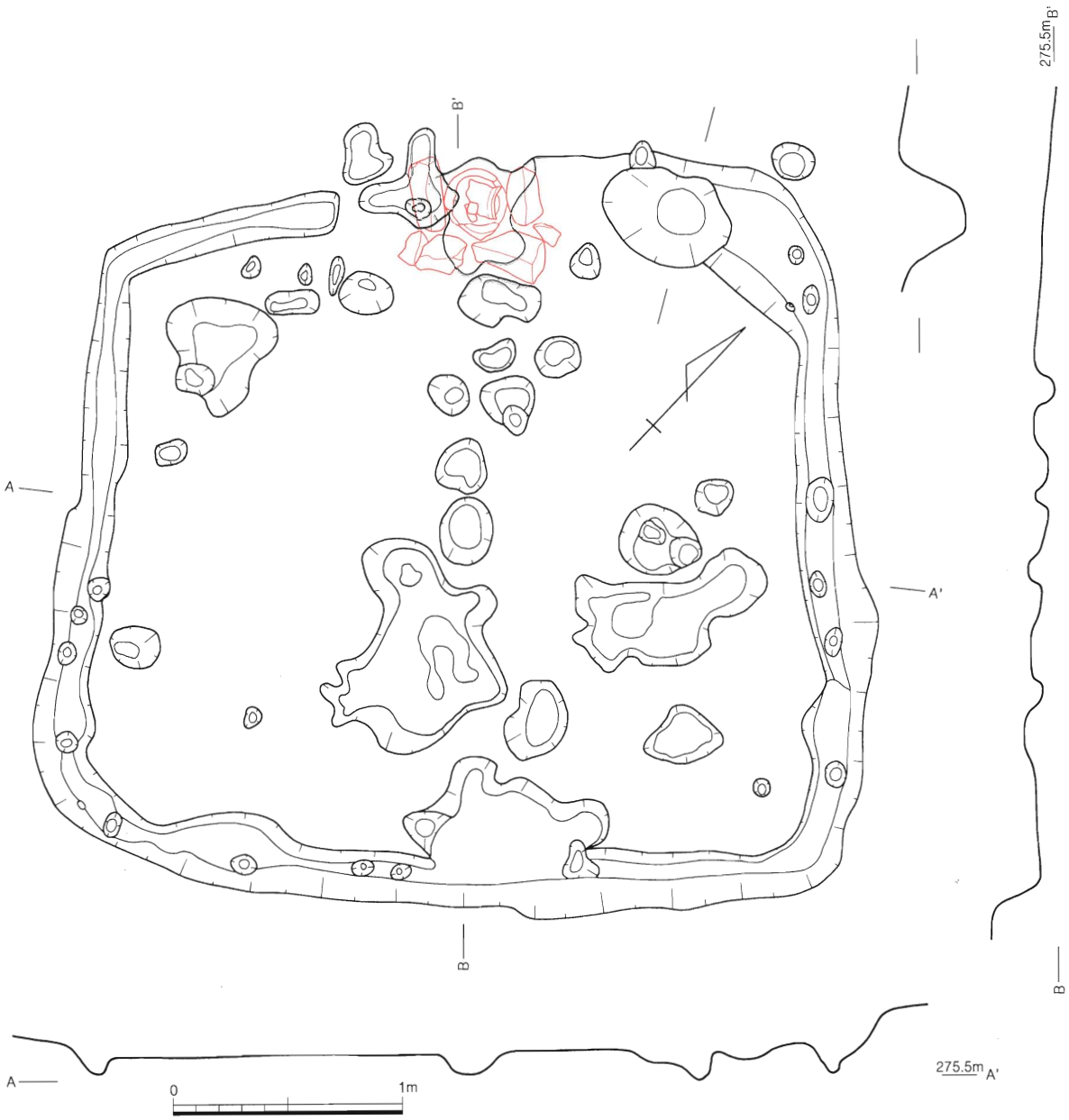
竪穴建物の形状や出土した土師器の甕からSI04やSI05と同じ７世紀前半の竪穴建物跡と考えられる。

SI08（第34～37図）

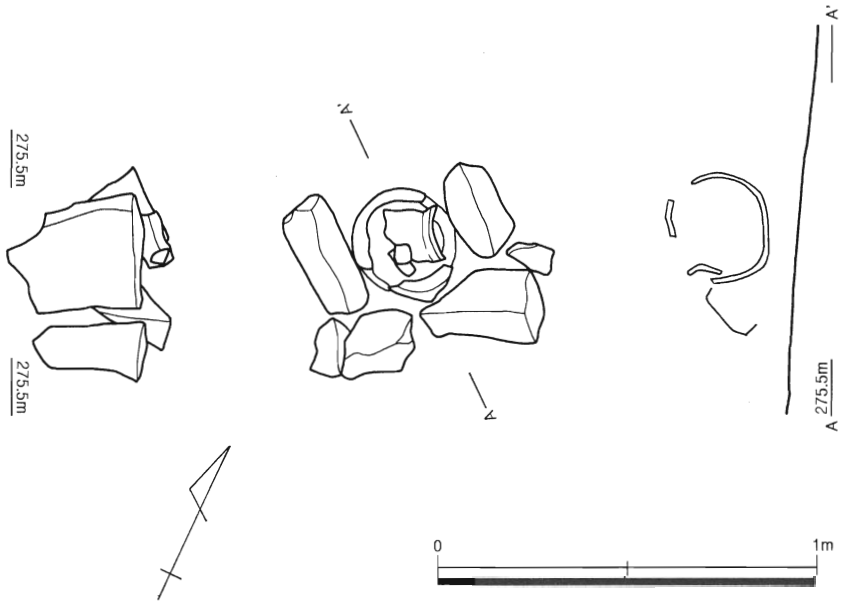
SI08はⅡ区の東側の谷地形の落ち際に位置しているため、竈の設置されている南西の壁面は一部確認できなかった。西８ｍにはSI09が、北西7.5ｍにはSI12が建てられていた。平面形は方形で北壁の中央に竈があり、一辺3.3と3.7ｍで面積は12㎡、最も残りの良かった南東壁の高さは最大32㎝残っていた。床面には浅いピットが何穴か確認されているが、主柱穴となるようなものはなかった。周溝は竈の周囲を除き掘られていて、周溝内にも小ピットが掘られていたところもあった。南東壁の際には浅い堀込みが広がっている。出入口などの可能性もあるがはっきりしていない。第35図のように竈は左右に板状の礫を立て、その上に柱状の礫を置き粘土で覆っている。竈内には完形の土



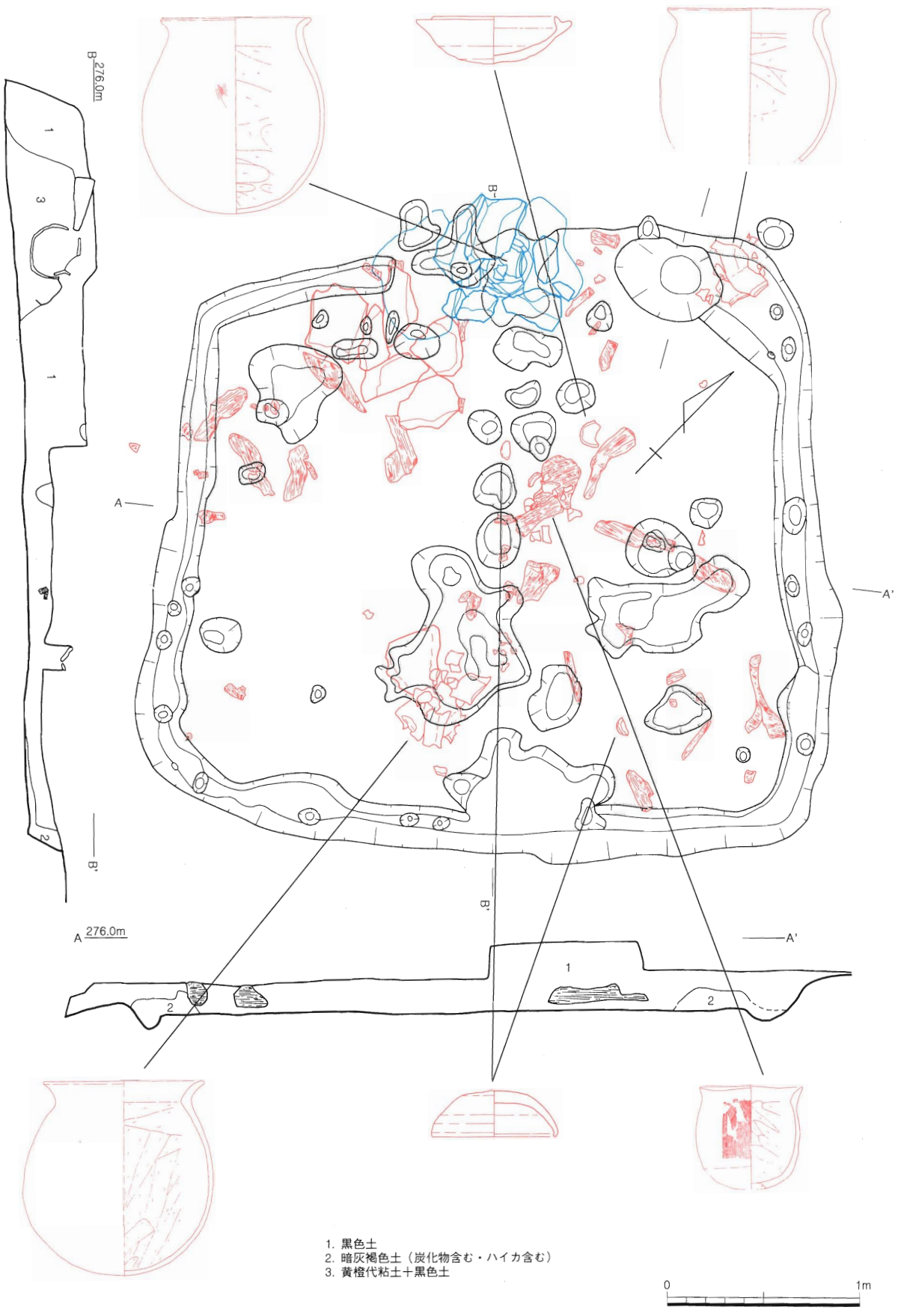
第33図　SI06出土遺物実測図（S＝1／3）



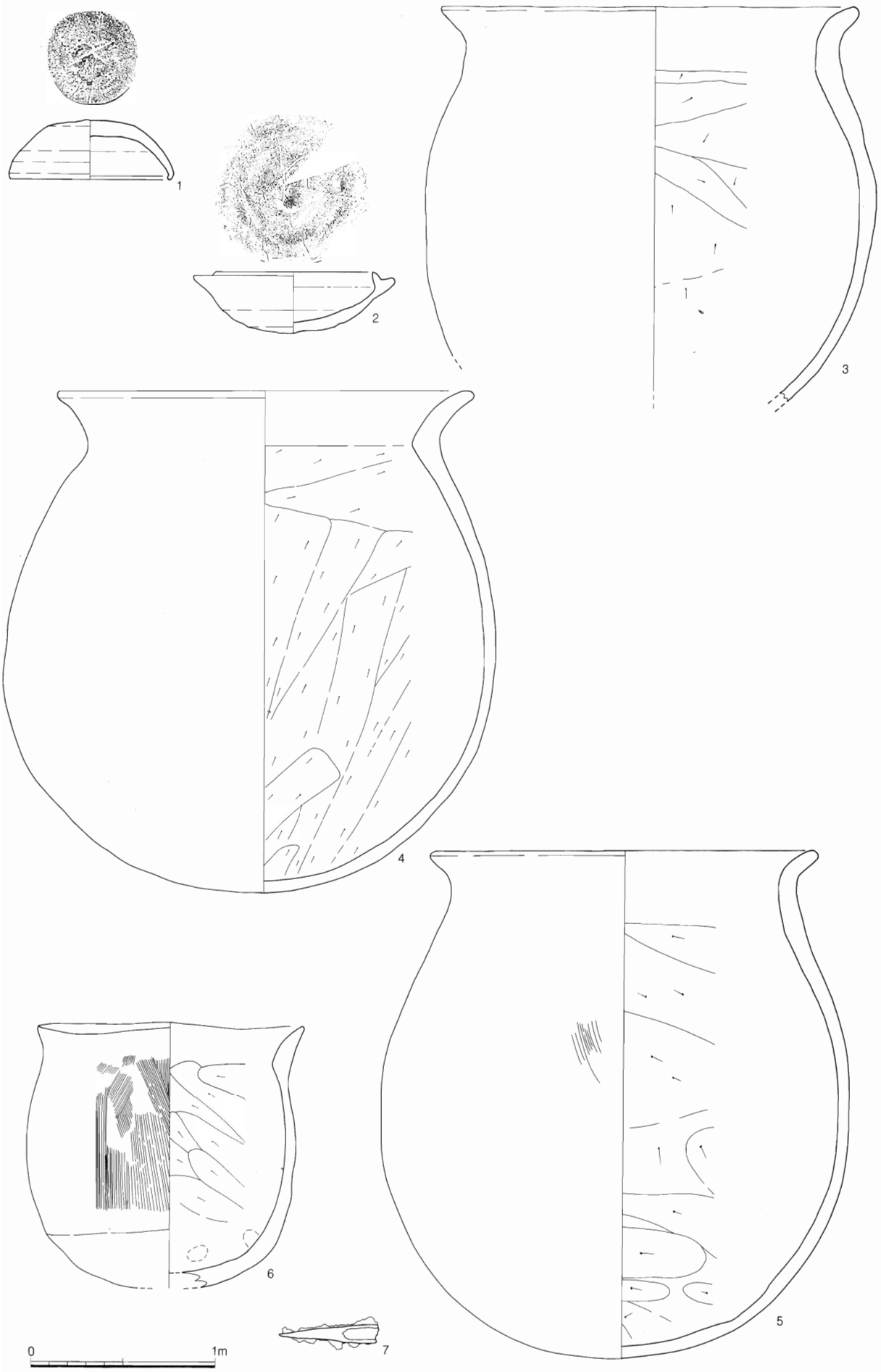
第34図　SI09出土遺物実測図（S＝1／30）



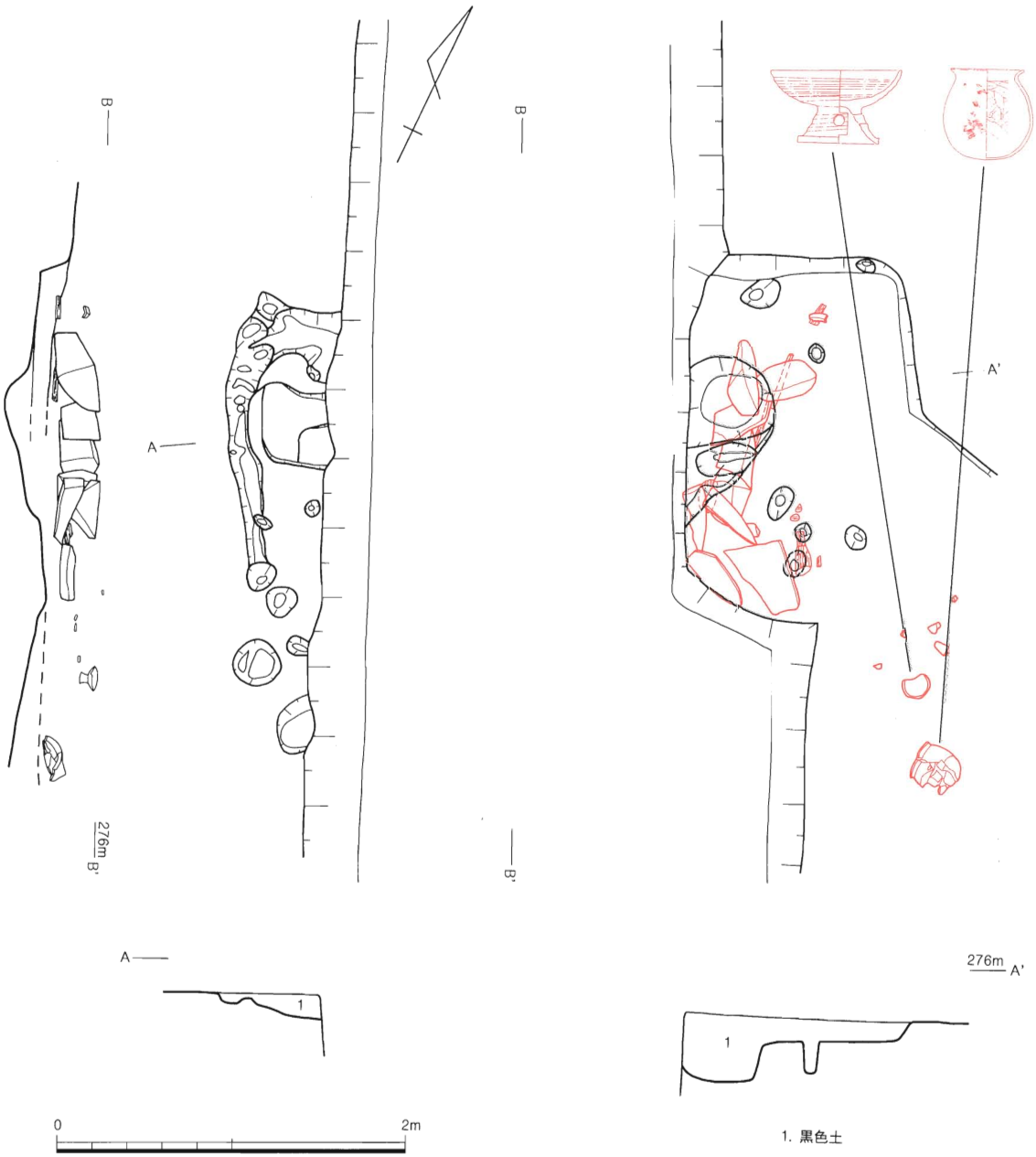
第35図　SI08竈実測図（S＝1／20）



第36図　SI08遺物出土状況図（S＝1／30）



第37図　SI08出土遺物実測図（S＝1／3）



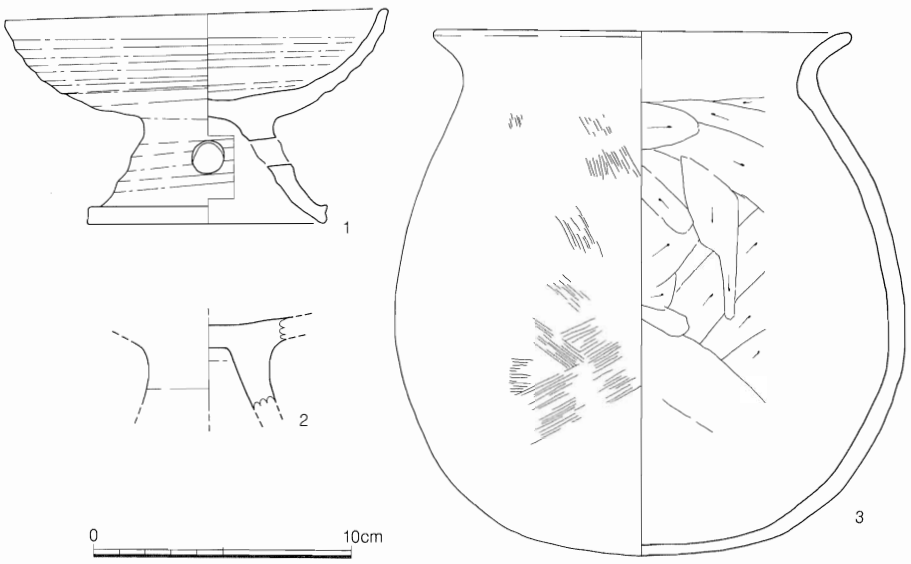
第38図　SI09実測図（S＝1／40）

師器の甕があった。煮炊きに使われたのか、竈の一部であったのかは不明である。いずれにしても何らかの用をなしていたものが放置されたと考えられる。

出土遺物（第37図）　SI08からは須恵器と土師器、鉄器、多量の炭化物、礫が出土している。第37図1と2は須恵器の杯の蓋と身である。蓋が身よりも若干径が小さく1と2は対ではない。両者には「×」がヘラ描きされている。3～6は土師器の甕である。5のみ小形の甕である。これらの土師器の甕は外面がハケメ、内面がヘラケズリで、SI04や05、06など小丸遺跡でよく出土する古墳時代後期の土師器の甕と器形や調整も同じである。

7は鉄器であるが器種は不明である。袋状に内部に空洞ができるように折り曲げられているようである。尖った先端は刃部にみえる。工具の一種と思われるがはっきりしたことは不明である。

遺物出土状況（第36図）　出土した遺物の内、大きな炭化物はほとんどが床面に接して出土してい



第39図　SI09出土遺物実測図（S＝1／3）

る。SI04程ではないが、かなり多くの炭化物が出土しており、これらは道具類が炭化したとも考えられず、また板材はなく全て丸太状になっている。したがってSI08から出土している炭化物は柱や垂木が炭化した「炭化材」と考えられる。また多量に炭化材が出土しているので、SI08は焼失住居ではないかと考えている。

炭化材はピットに関係するように出土しておらず、検出されたピットに立てられていた柱とは確認できなかった。また土師器のほとんどは床面に接した状態で出土した。建物内に堆積した土層からも建物が埋まってから掘り込まれた形跡はないと考えられるので出土した土師器のほとんどは原位置を保っているものと考えられる。しかし須恵器は全て床面から一定距離浮いた状態で出土している。これらも原位置であるのなら土師器とは異なった場所に置かれていたとも考えられる。礫は竈のすぐ南側にまとまって出土している。これらの礫の下から炭化材が出土しているので、この炭化材が垂木や柱かどうか不明であるが、材が炭化する以前は礫が材の上方か外側にあったものと考えられる。しかし用途は不明である。床面の南東側には土師器の甕と礫が隣接して出土している。何らかの関係があった可能性が考えられる。

SI08は出土した須恵器と土師器の甕、遺構の形状から７世紀前半の焼失した竪穴建物と考えられる。

SI09（第38図）

SI09は弥生時代中期後葉のSI12の南６ｍにあり、谷地形内に位置する。建物の中心部分を調査に伴うトレンチによって破壊してしまい、また建物が第１ハイカ層まで堀込まれていないため床面を把握することができなかったため建物全体を復元することはできなかった。

検出できたところから規模を推定すると、北壁は４ｍあり両隅は直角に曲がる方形あるいは長方形の竪穴建物ではないかと考えられる。小丸遺跡の当該期の竪穴建物はより北に近い壁面に竈を設置しているので、SI09の竈はトレンチによって破壊され検出できなかったものと考えられる。

SI04や06、08の竈には赤色化した柱状の礫が使用されていたが、これらとほぼ同じ形状で赤色化

した礫がその他の板状の礫と共に出土している。しかしトレンチに接しているので、トレンチ掘削時に竈が破壊され、礫も動いたものと考えられる。したがってこれらの礫は原位置を示していないと考えられる。

周溝は西壁の際に確認されているがトレンチの東側は確認されなかった。主柱穴となるピットは確認できなかったが、小さいピットはいくつか検出されている。

出土遺物（第39図）　遺物は第39図１・２の須恵器の高杯と３の土師器の甕である。このうち２はSI09の位置する谷地形から出土したもので遺構内から出土していない。１は円形の透かしをもつ高杯で杯部と脚部の外面には回転ナデによりかなり凹凸が作られている。脚端部はまっすぐ立ち上がる。３はSI04～08で出土したほとんどの土師器の甕と同じ調整（外面ハケメ・内面ヘラケズリ）で器形も同様である。

遺物の出土状況は１は推定される床面よりも浮いた状態で、３はほぼ床面に接した状態であったと考えられる。幸いこの２点はトレンチによって動かされていないようで、完形に近いことから原位置を保っている可能性がある。

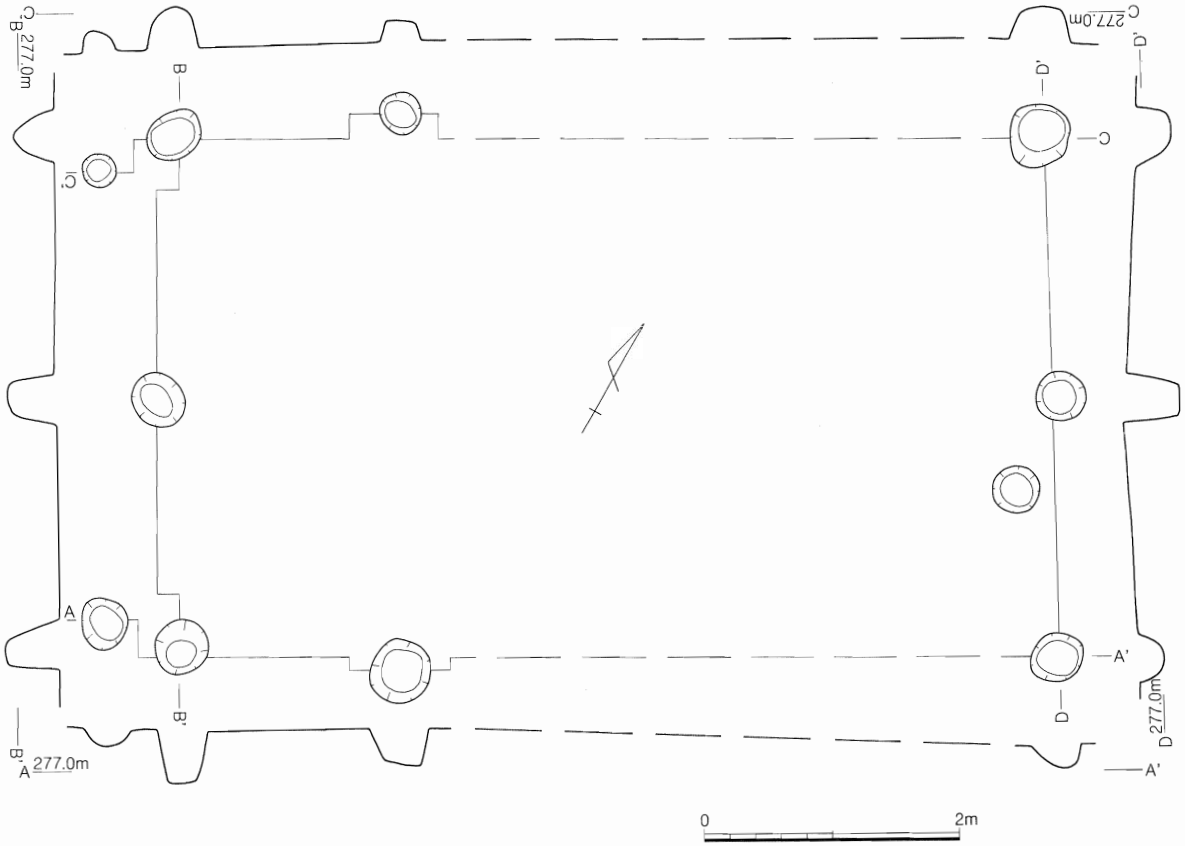
SI09の時期は破壊された部分が大きすぎるため遺構からは推定できず、また出土した遺物も数少ないため明確には言えないが、床面に近いと考えられる土師器の甕と、床面から浮いているが須恵器の高杯からおおよそSI04～08と同じ７世紀前半と考えられる。

表2　竪穴建物跡一覧

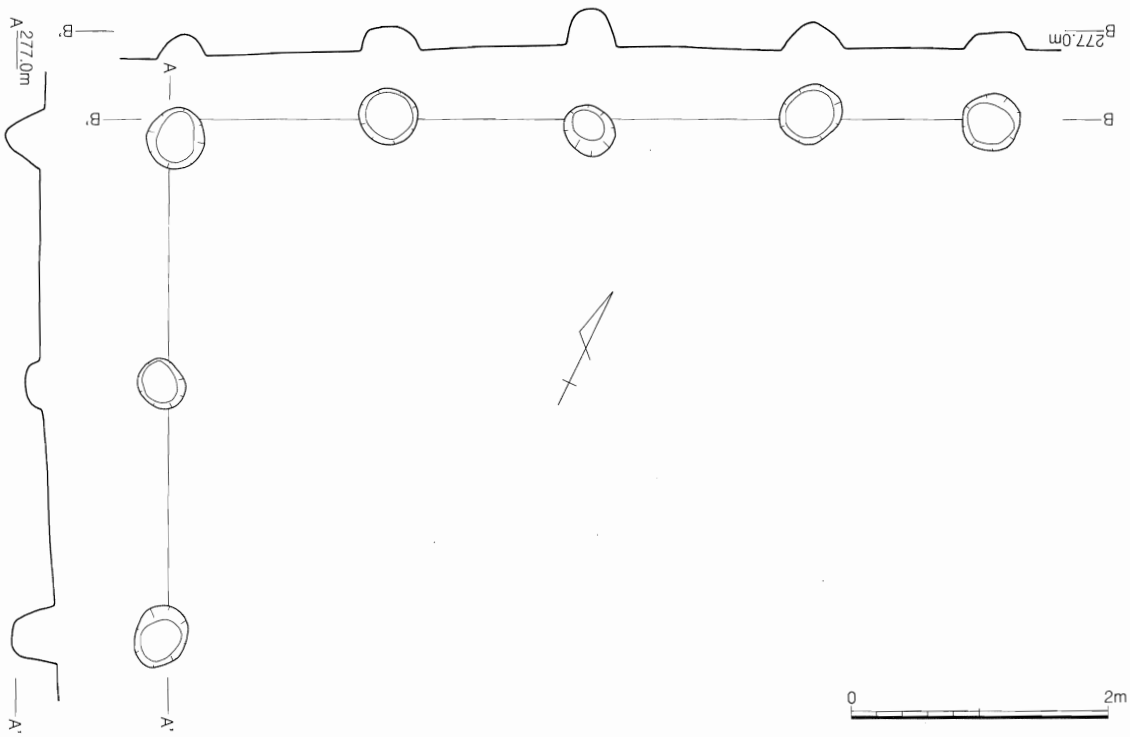
調査区	遺構名	規模（m）			形状	出土遺物	時期	備考
		長径（一辺）	短径	深さ				
Ⅰ区	SI01	3.2	(2.3)	0.35	方形	弥生土器	弥生時代中期	
Ⅱ区	SI04	4.3	4.2	0.3	方形	須恵器・土師器・鉄器・炭化物	古墳時代後期	焼失住居
Ⅱ区	SI05	5.5	4.4	0.4	方形	須恵器・土師器・鉄器・炭化物	古墳時代後期	焼失住居、かまど２基
Ⅱ区	SI06	5.0	4.5	0.4	方形	須恵器・土師器・炭化物	古墳時代後期	焼失住居？
Ⅳ区	SI07	3.1		0.3	円形	弥生土器	弥生時代中期	
Ⅱ区	SI08	3.7	3.3	0.3	方形	須恵器・土師器・鉄器・炭化物	古墳時代後期	焼失住居
Ⅱ区	SI12	3.7			円形	弥生土器	弥生時代中期	
Ⅱ区	SI09	4.0		0.16	方形	須恵器・土師器・炭化物	古墳時代後期	焼失住居？

Ⅱ区SB01（第40図）

Ⅱ区の南側の平坦面に位置している。攪乱によりはっきりしていないが桁行４間（6.9m）で梁間（4.2m）、面積はおよそ29㎡であったと思われる。柱間は桁行1.7mで梁間2.1mであった。この遺構の西側には隅柱に対応していると思われるピットがある。束柱の可能性もあるが若干離れていると思われる。出土遺物はなく時期は不明であるが、SI04とおおよそ建物の方向があっているので、



第40図　SB01実測図（S＝1／60）

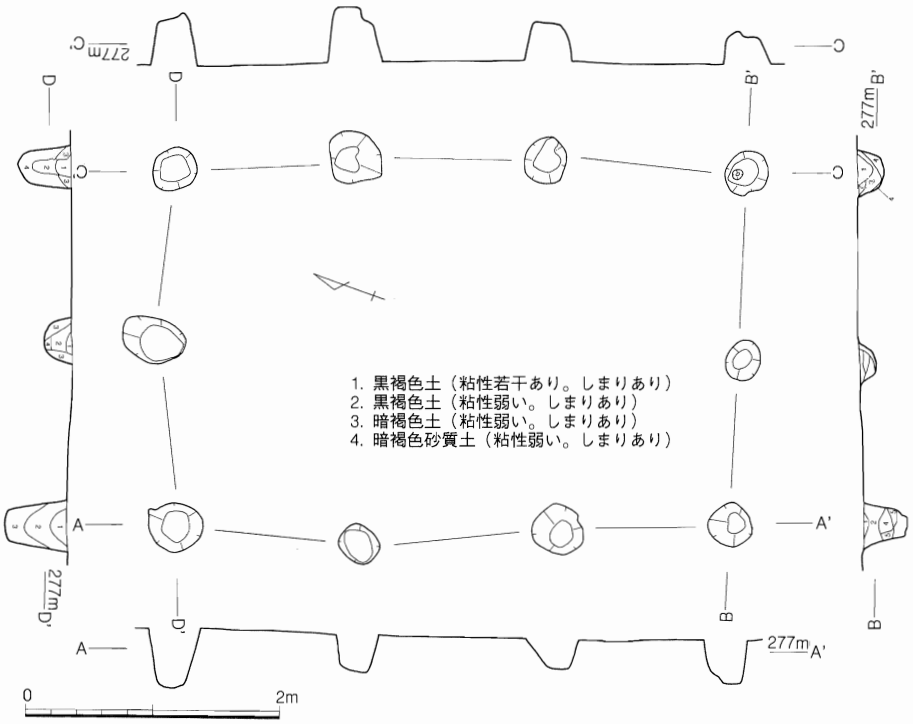


第41図　SB02実測図（S＝1／60）

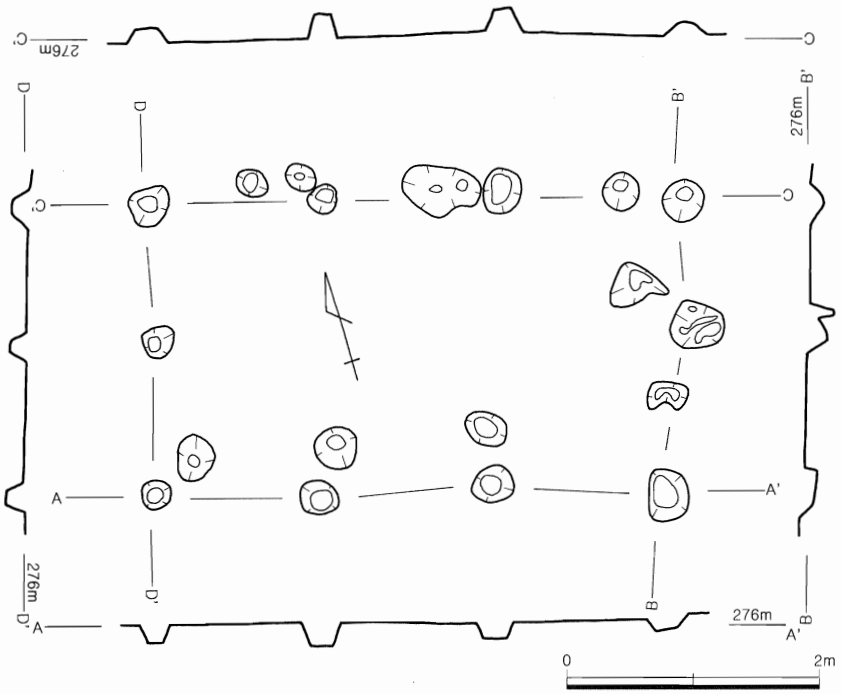
これらの遺構と関係のある古墳時代後期の掘立柱建物跡であると考えられる。

Ⅱ区SB02（第41図）

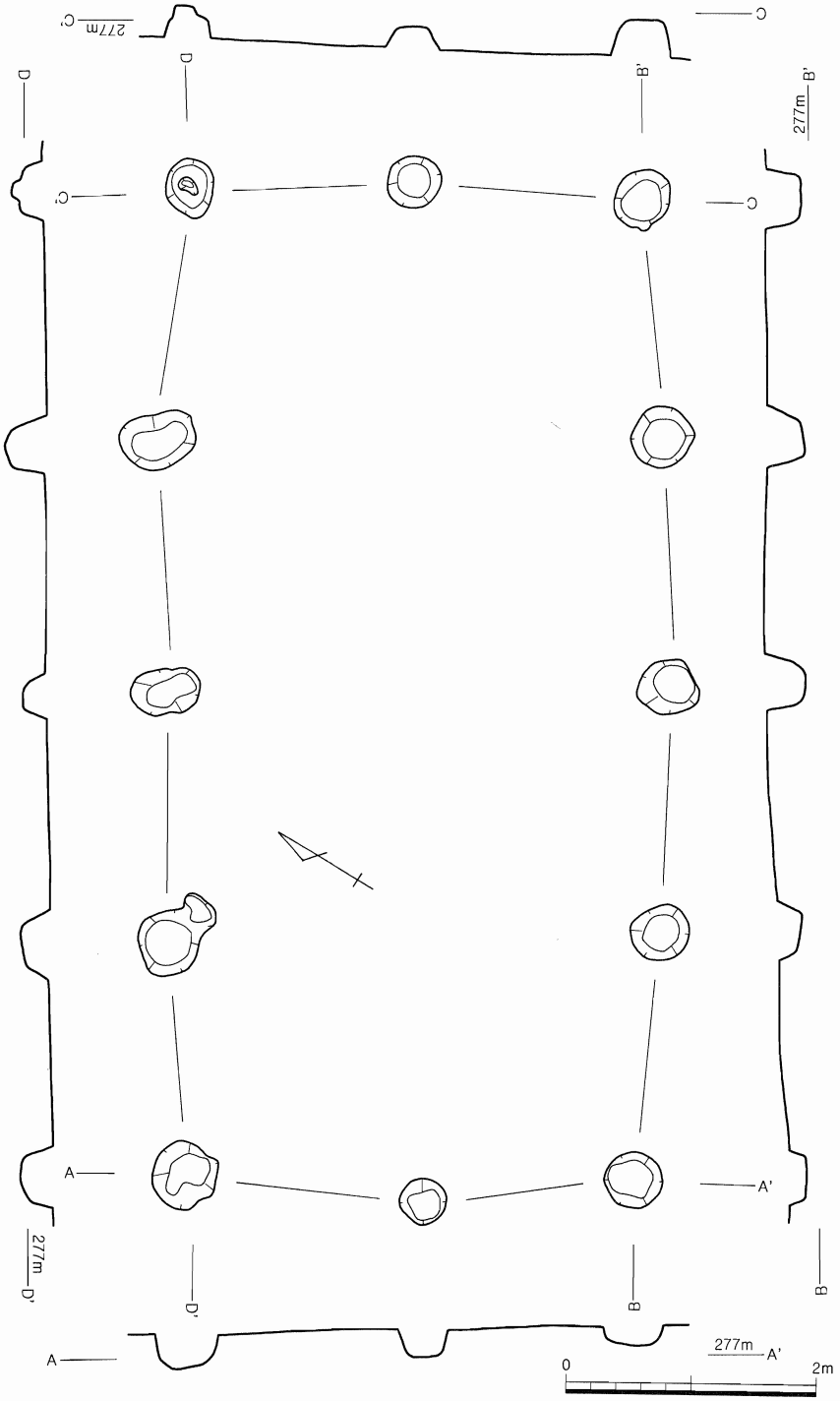
Ⅱ区の南側にありSB01のすぐ西側にある。SB01と同じく攪乱を受けており柱穴の半分以上は確認できなかった。検出できた分では桁行４間（6.5m）で梁間２間（4.0m）で、面積は26㎡であろうか。柱間は桁行1.5～1.7m、梁間２mであった。出土遺物はなく時期は不明であるが、建物の軸



第42図　SB03実測図（S＝1／60）



第43図　SB05実測図（S＝1／60）



第44図　SB04実測図（S＝1／60）

がＳＩ04とほぼ同じであり、SB01とも近いことから古墳時代後期の掘立柱建物跡であると考えられる。

Ⅱ区SB03（第42図）

Ⅱ区の南東部にありSB02の24ｍ北東側にあたる。SB01や02と違い建物の規模は小さい。長軸もSB01やSB02とは大きく異なっている。桁行３間（4.5ｍ）で梁間２間（2.8ｍ）、面積は12.6㎡である。柱間は桁行1.5ｍで梁間1.4ｍであった。柱穴は直線に並んでいない。隅柱は桁行、梁間ともに深く掘り込まれていた。柱穴の土層からは柱痕跡が見られるものもあった。柱穴から遺物は出土せず周辺からも関係するような遺物や遺構は確認されなかった。したがってこの遺構の時期は不明である。

Ⅳ区SB04（第44図）

Ⅳ区の東端にありSB02の西側９ｍに建て

表5　掘立柱建物跡一覧

調査区	遺構名	桁行（m）	梁間（m）	面積（㎡）	規　模	出土遺物	時　期	備　考
Ⅱ区	SB01	6.9	4.2	29	4間×？	なし	古時代後期か？	撹乱あり
Ⅱ区	SB02	6.5	4.0	26	4間×2間	なし	古時代後期か？	撹乱あり
Ⅱ区	SB03	4.5	2.8	12.6	3間×2間	なし		
Ⅳ区	SB04	7.9	3.6	28	4間×2間	なし	古時代後期か？	
Ⅱ区	SB05	4.2	2.3	9.6	3間×2間	なし		

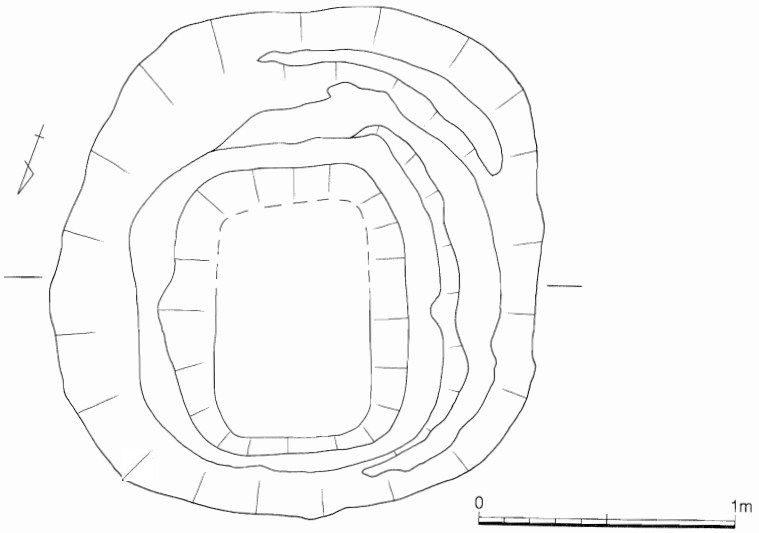
られている。桁行４間（7.9m）で梁間２間（3.6m）、面積は28㎡である。柱間は桁行２ｍで梁間1.8mであった。桁行両端の柱穴は直線に並んでいない。出土遺物はなく時期は不明である。

SB01やSB02と主軸をほぼ同じくしており北側に建てられているSI04～06との関係が考えられる。

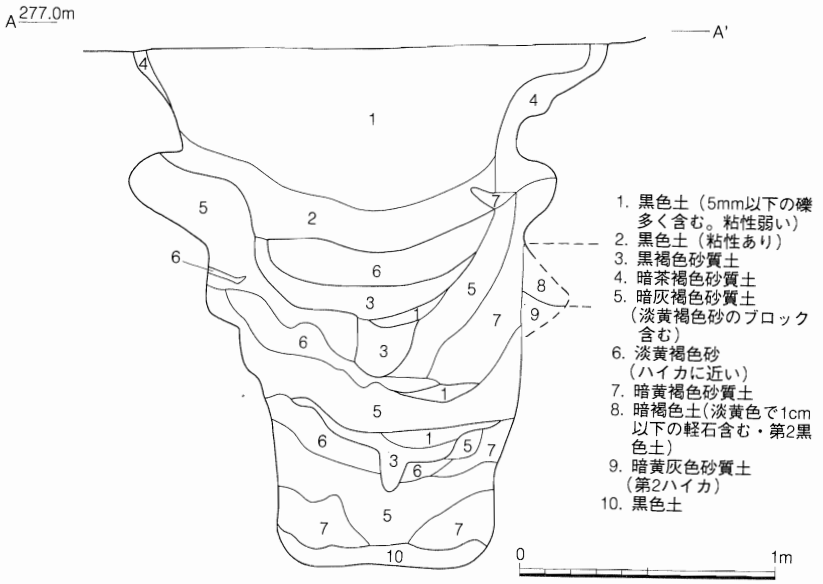
Ⅱ区SB05（第43図）

Ⅱ区の中央にあり、周囲にピットが無数に存在する中で検出された。桁行３間（4.2m）で梁間２間（2.3m）、面積は9.6㎡である。柱間は桁行1.4mで梁間1.2mであった。SB01・02・04とは面積や柱穴の大きさなど異なっているが、SB03とは他と比べるとまだ近いように思われる。SB03との関係が考えられるかもしれない。

SK02（第45図）



第45図　SK02平面図（S＝1／　）



第46図　SK02土層図（S＝1／30）

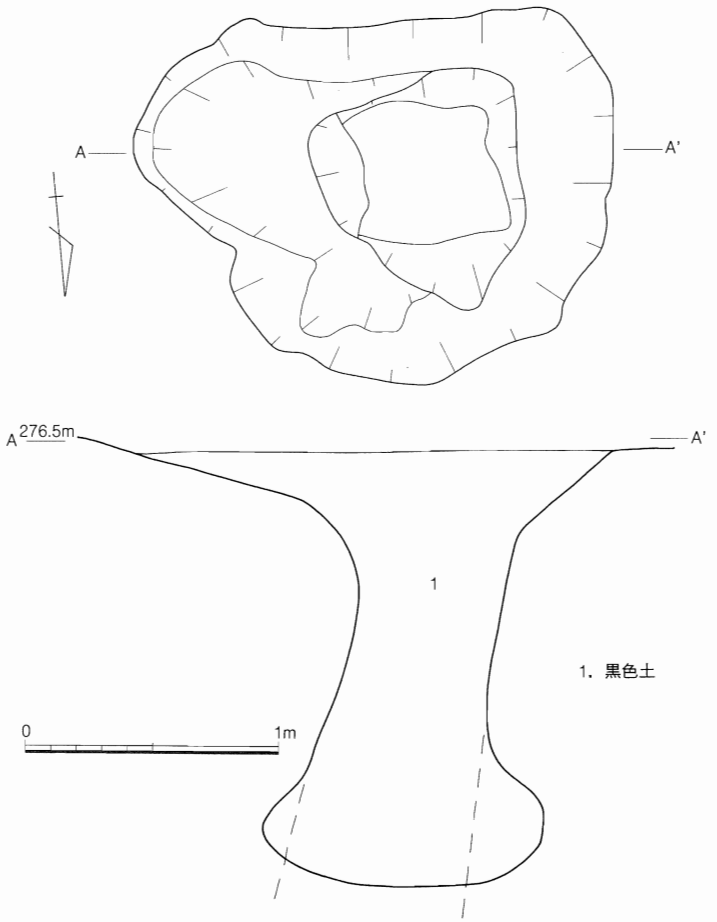
Ⅱ区の中央南側に位置している。平面は若干楕円形になっている。長軸は２ｍで短軸は1.8mである。深さは第１ハイカと第２黒色土、第２ハイカを堀り込んでおり２ｍとかなり深い。したがって崩落する危険があるため、調査は下半を半裁して底面を確認した状態で終えている。底面は平坦で隅が円い方形と思われる。上面は楕円形であったが風化等の作用により方形から楕円形になったのではないかと考えている。土層を見ると堀方の上半は凹凸が激しく、特に第１ハイカの大平山降下火山灰層は部分的に浸食が激しい部分が見られる。反対に下半には凹凸が無いので、掘られてまもなく埋まり始めたのではないかと考えている。土層には黒色土と、浸食により崩落したハイカ層が交互に堆積している状況が見られる。土層の中央下半には３層が部分的に落ち込んでおり、落とし穴の杭穴の可能性もある。底面に穴は確認されていない。出土遺物は無く時期は不明である。落とし穴の可能性が考えられるがはっきりしない。

SK03（第46図）

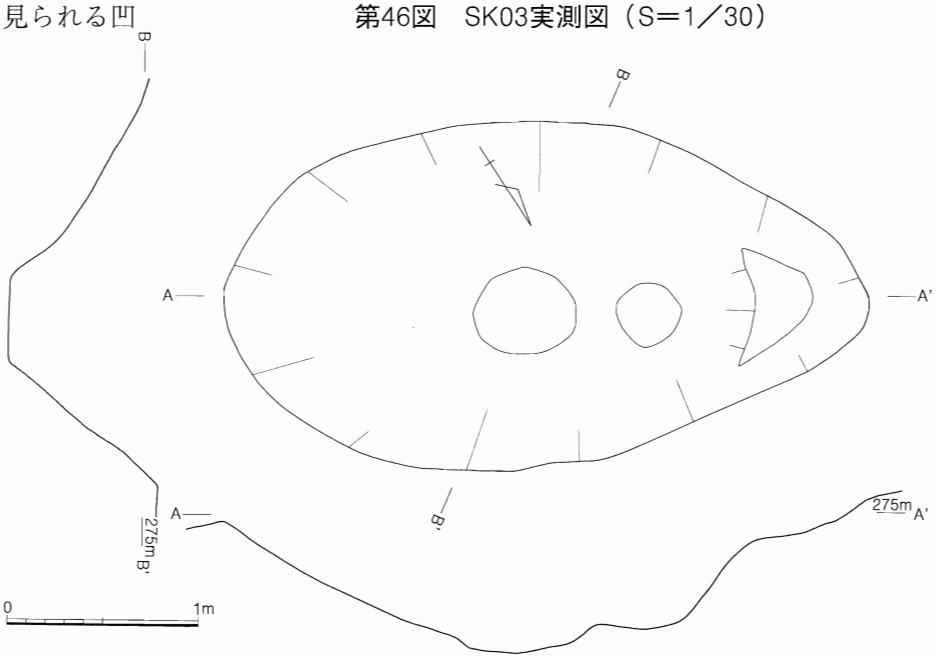
Ⅱ区のSI04とSI05の間にある土坑である。SK02と同じく第1ハイカを深く掘り込み、第2黒色土層までおよんでいる。土層の下部の広がりは第2黒色土を誤って掘りすぎたものである。狭いところは0.5mしか無く、これ以上の掘り下げは危険が伴うため底面の確認は行っていない。出土遺物はなく時期は不明である。性格は不明であるが落とし穴か貯蔵穴の可能性がある。

SK04（第47図）

Ⅱ区の北西に位置している土坑である。当初、風倒木痕の可能性が考えられたが、その他の風倒木痕よりかなり大きく、また堀方に風倒木痕と見られる凹凸がないため土坑とした。出土遺物はなく、時期も性格も不明である。



第46図　SK03実測図（S＝1／30）



第47図　SK04実測図（S＝1／40）

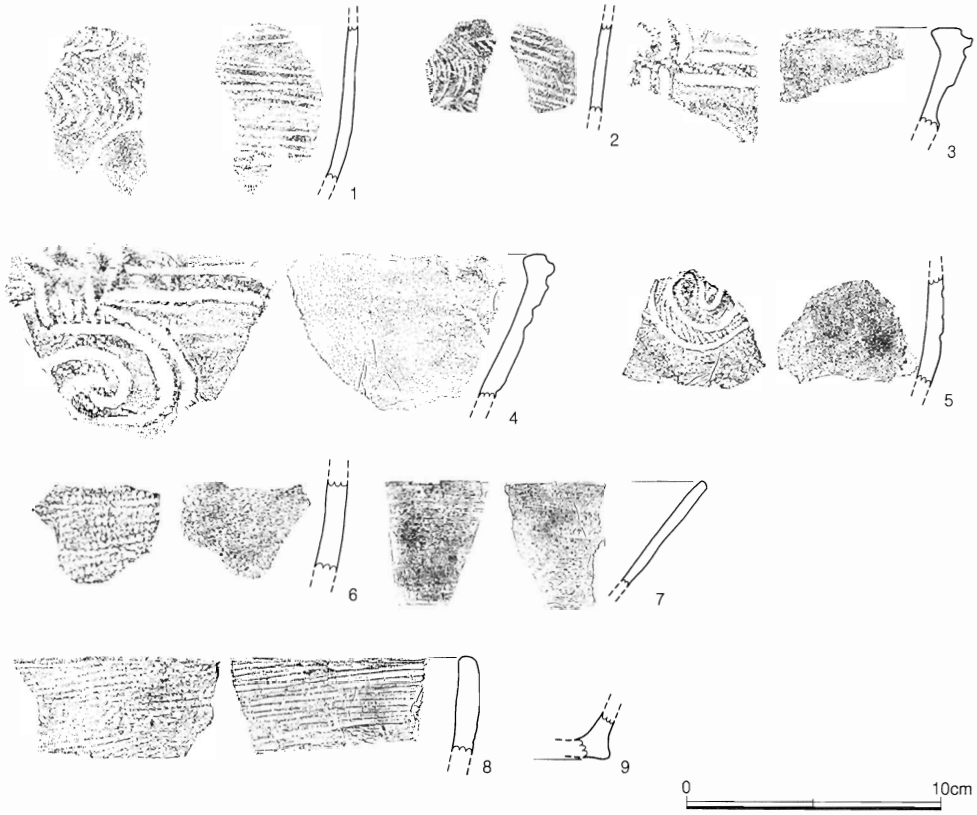
表7　土坑一覧

調査区	遺構名	規模（m）			形状	出土遺物	時期	備考
		長径(一辺)	短径	深さ				
Ⅰ区	SK01	1.2	0.9	0.2	楕円形？	縄文土器	縄文時代後期	第2黒色土層中
Ⅱ区	SK02	2.0	1.8	2.0	円形			第1ハイカ上面、落とし穴？
Ⅱ区	SK03	1.9	1.4	1.7	円形			第1ハイカ上面、落とし穴？
Ⅱ区	SK04	3.4	1.8	0.8	楕円形			第1ハイカ上面、風倒木痕

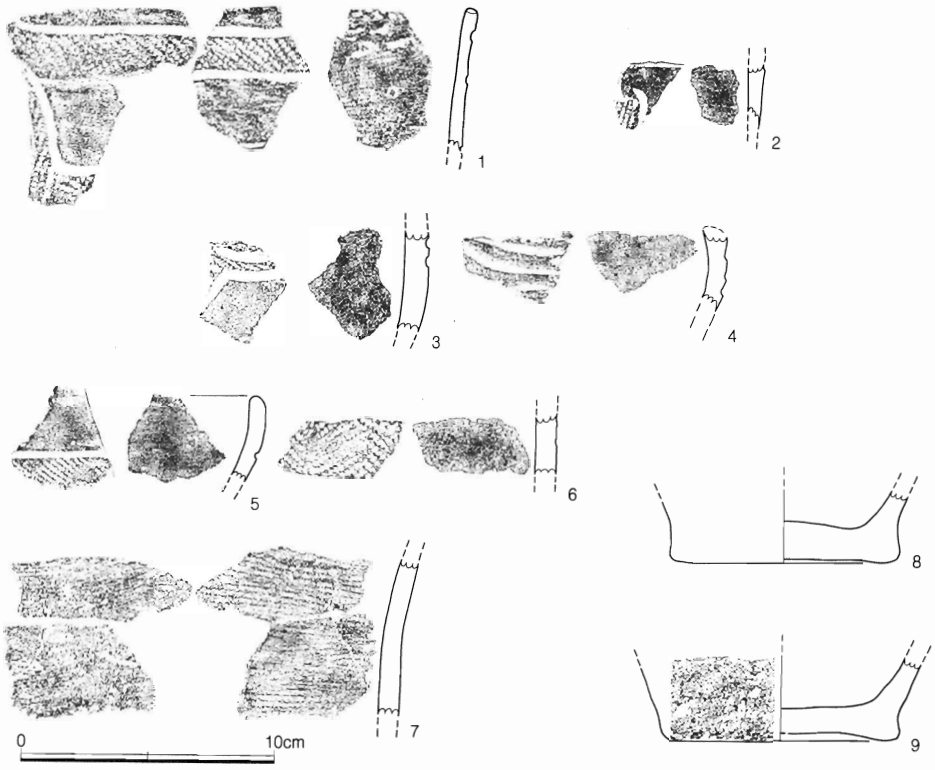
第６節　遺構外出土遺物（第48～65図）

第48図はⅠ区とⅢ区の第２黒色土と第３黒色土から出土した縄文土器である。１と２は羽島下層Ⅲ（磯ノ森）式に相当し、当遺跡で出土した最古の遺物である。外面には爪形文、内面には条痕が施されている。外面に縄文は見られない。３～４は中津式並行の深鉢である。５は３と４に比べ縄文帯と沈線の幅が狭いので福田ＫⅡ式に相当する。

第48図６・８は深鉢で、６は外面が縄文地、８は内外面とも条痕である。７は精製の浅鉢である。９は底部である。それぞれ出土した層は１と２は第３黒色土で、３～５は第２黒色土と考えられる。その他は不明である。



第48図　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／3）

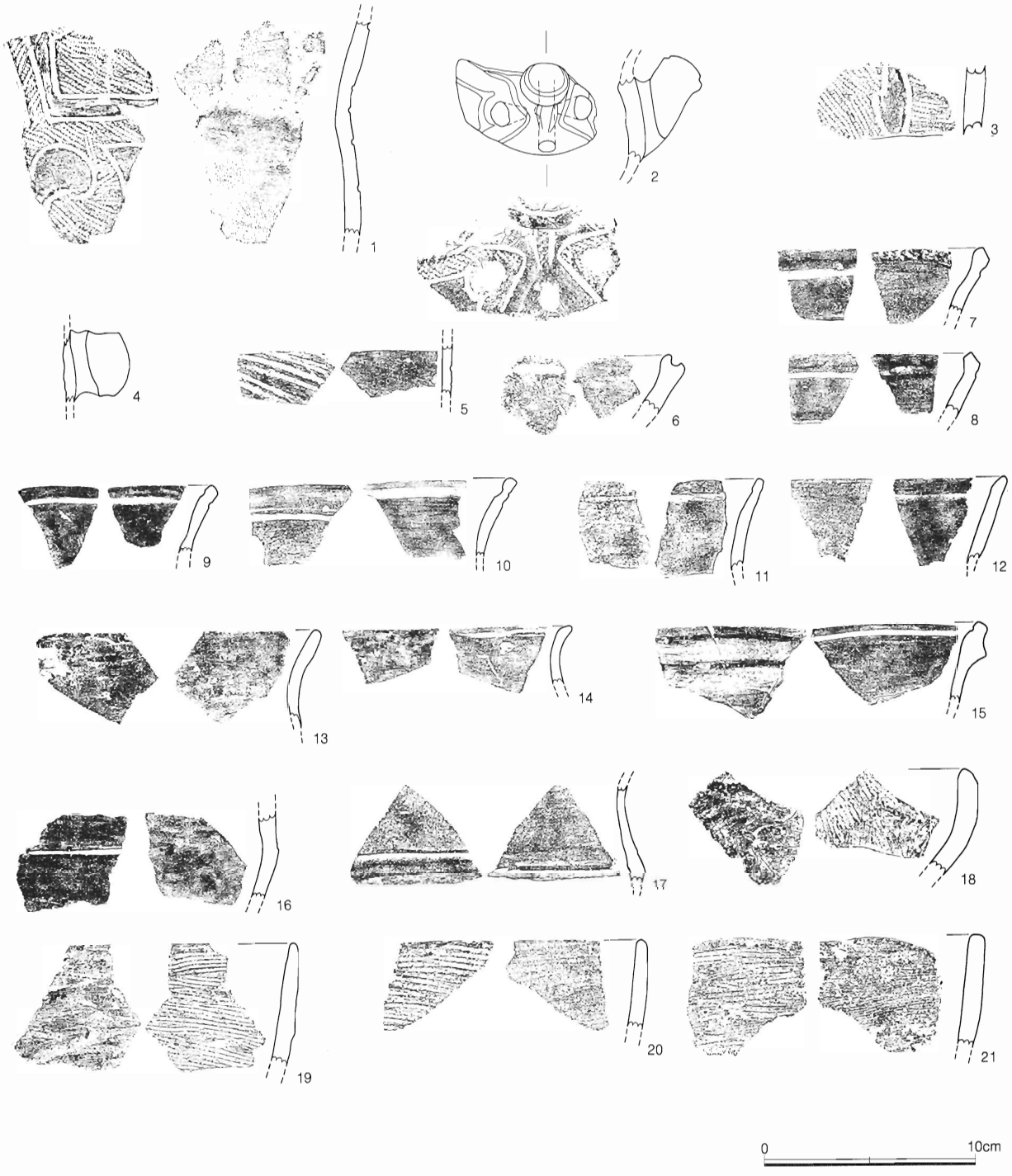


第49図　Ⅰ・Ⅲ区出土縄文土器実測図（2）（S＝1／3）

第49図はⅠ・Ⅲ区のトレンチ等から出土した遺物である。1は中津式並行の深鉢である。2と3、5も同じであろうか。4は縁帯文土器と思われるがはっきりしない。6は羽状縄文を外面にもつ深鉢片である。中期か前期の可能性がある。7は深鉢、8・9は底部である。1～3・5は第2黒色土の遺物で、6は第2か第3黒色土と考えられる。その他は不明である。

第50～52図はⅡ区のトレンチから出土した遺物である。このトレンチは削平や土砂の流入などで黒色土とハイカの互層が確認されず、様々な時期の遺物が一括して出土している。

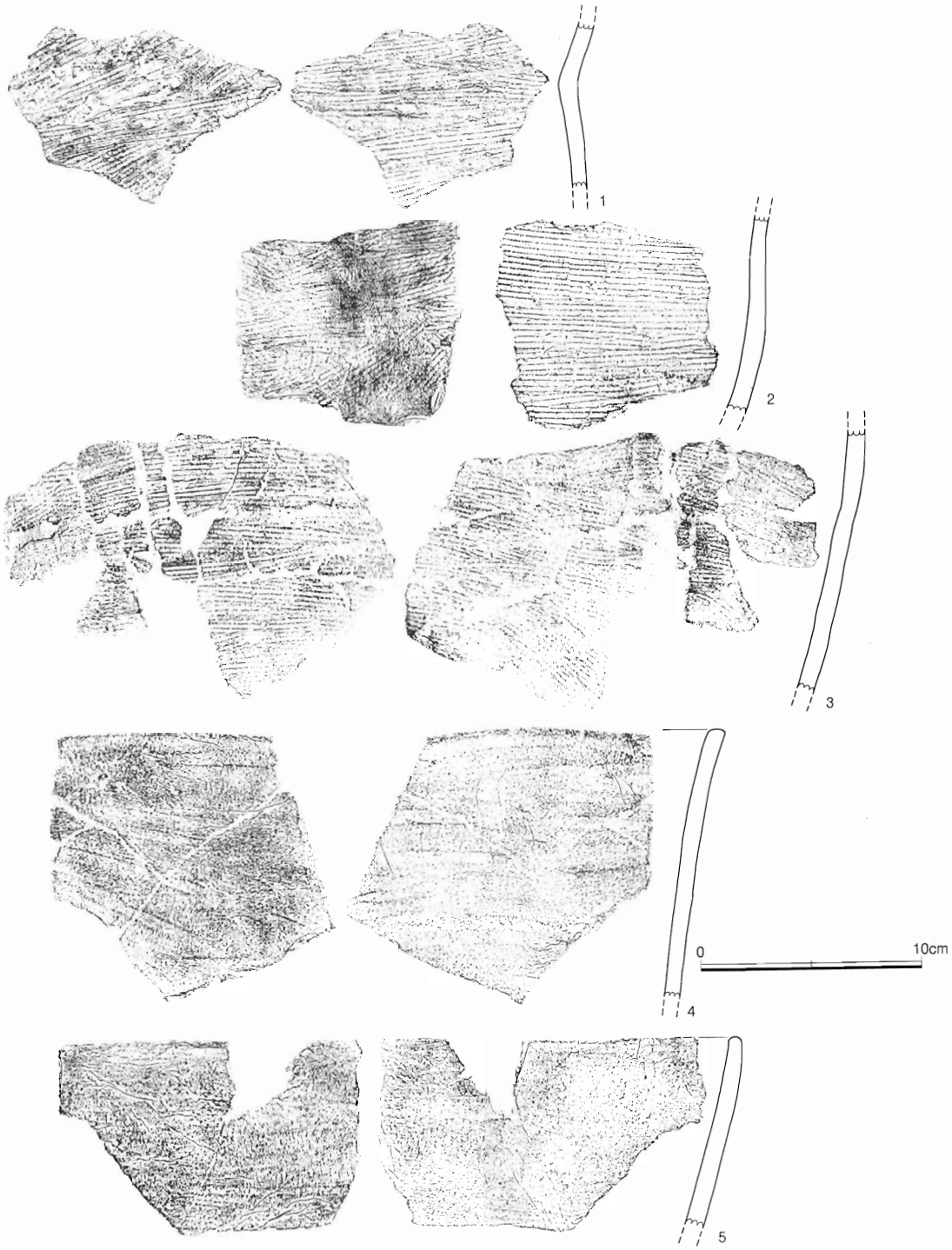
第50図1と3は中津式の深鉢、2は福田KⅡ式に相当する双耳壺である。4も双耳壺であるが時



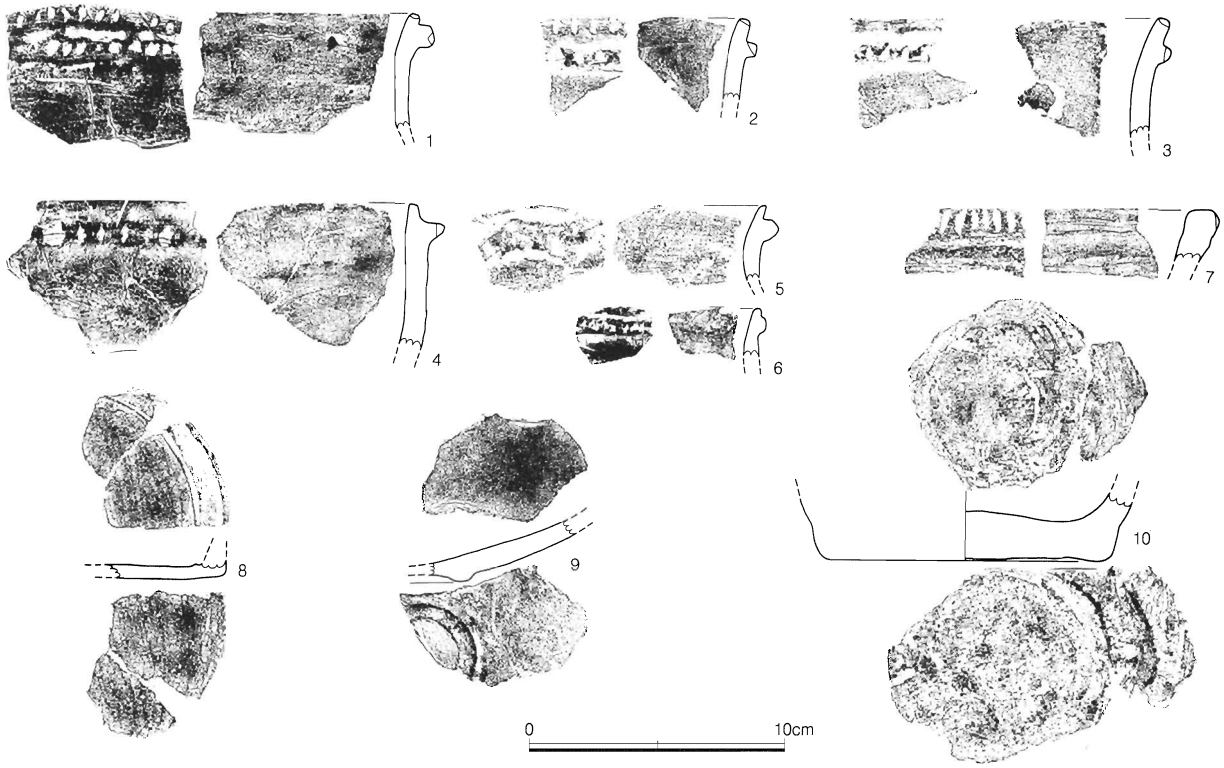
第50図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／3）

期は２より新しいと思われる。５は粗い条痕をもつ。６～17は浅鉢である。６は縁帯文土器で彦崎ＫⅠ・ＫⅡ式に並行すると考えられる。その他は晩期の精製浅鉢と思われる。７の口縁部内面は縄文に見えるが破断面である。18～21は時期不明の条痕地の深鉢である。18は波状口縁である。

第51図１～５は深鉢である。１は緩く「くの字」を描くように胴部がくびれている。２にもくびれが見られる。



第51図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（２）（S＝1／3）



第52図　Ⅱ区出土縄文土器実測図（3）（S＝1／3）

第52図１～６は突帯文土器である。１～３は突帯と口唇部に刻目をもつ。前池式に近いと思われる。４～６は口唇部に刻みが無く尖り気味で、突帯に刻みをもっている。沢田式に並行すると考えられる。７は口縁部に刻みをもつ。縁帯文土器に含まれるかもしれない。８～10は底部である。

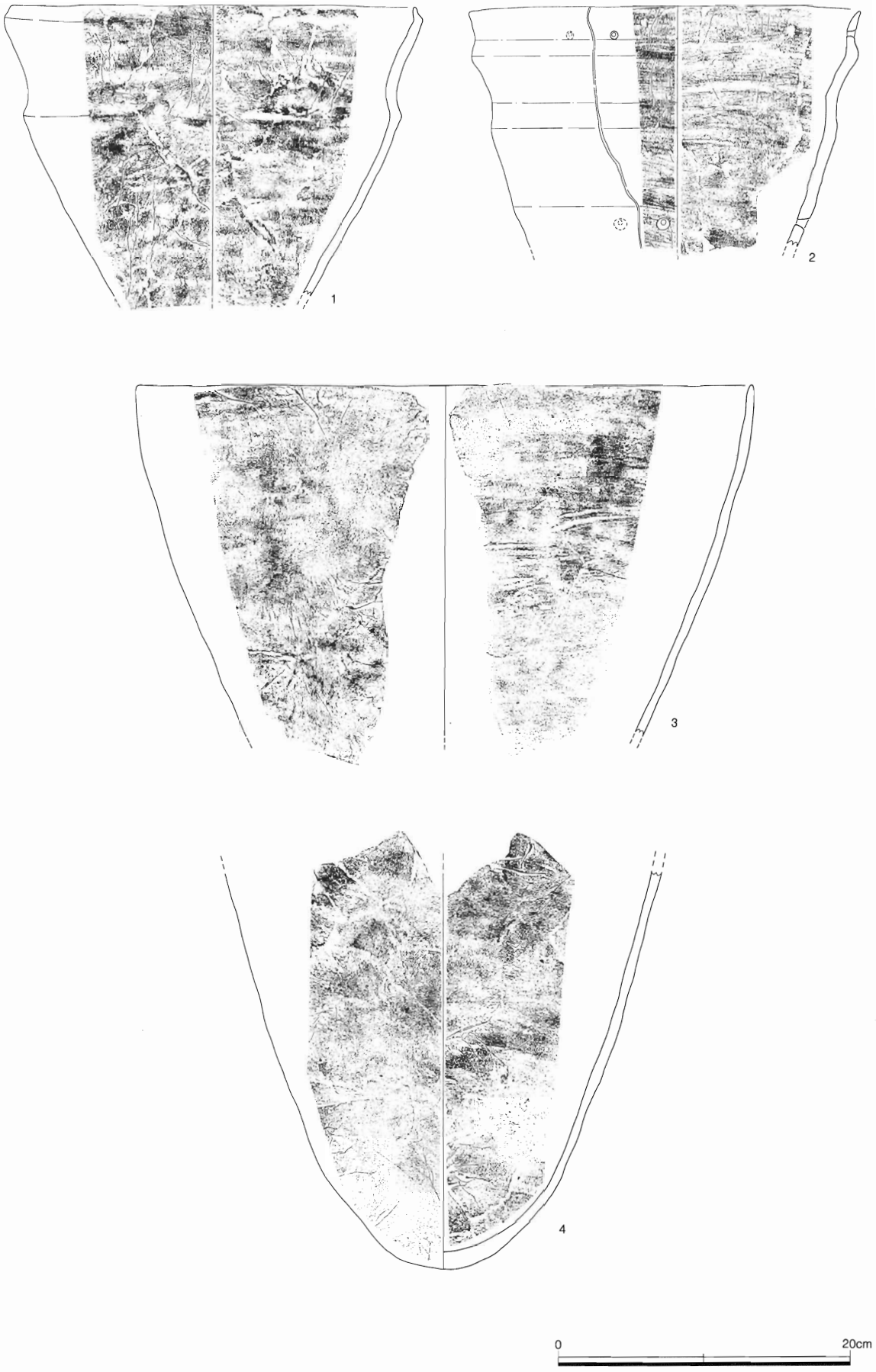
第53～55図はⅡ区とⅣ区の第１黒色土層から出土した縄文土器である。

第53図はⅡ区の谷地形の底面付近にまとまって出土した縄文土器である（図版47）。１は口縁が内傾し、胴部が２段に屈曲する器形である。外面の上半部には貝殻条痕が、下半部にはナデが見られる。２も２段に屈曲するが、口縁が外湾している。３と４は粗製の深鉢である。２が滋賀里Ⅰ式、１は滋賀里Ⅱ式に近いであろうか。３と４の深鉢は１や２と重なって出土しており、同時期のものかもしれない。

第54図１は磨消縄文の精製の浅鉢と思われる。２も精製で竹管文が施されている。３は波状口縁の外面に刻み目の入った突帯をもつ。器種と型式は不明である。４～７は外面に縄文をもつ。７は外面に沈線を施している。８と９は内面に沈線と縄文をもっている。11は口縁の外面に縄文をもち、厚みがある。10は精製土器で外面に沈線をもつ。12は格子目文による擬縄文であろう。５～９・11は四元式、12は彦崎Ｋ２式並行である。13～16は胴部に縄文をもつ一群である。四元式並行の浅鉢であろうか。17は器種が不明で、焼成前に穿孔された土器である。穿孔は等間隔に施されている。18と19は浅鉢であろうか。20と21は深鉢の口縁である。

第55図は１～23が突帯文土器で24～27が底部である、28は器種不明の土製品である。

１～３は刻み目を突帯ではなく胴部に直接施すもので、谷尻式並行と思われる。外面に条痕を施している。４と５は突帯が口縁近くに付き、刻み目が口唇部と突帯の双方に施されるものである。



第53図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（1）（S＝1／4）

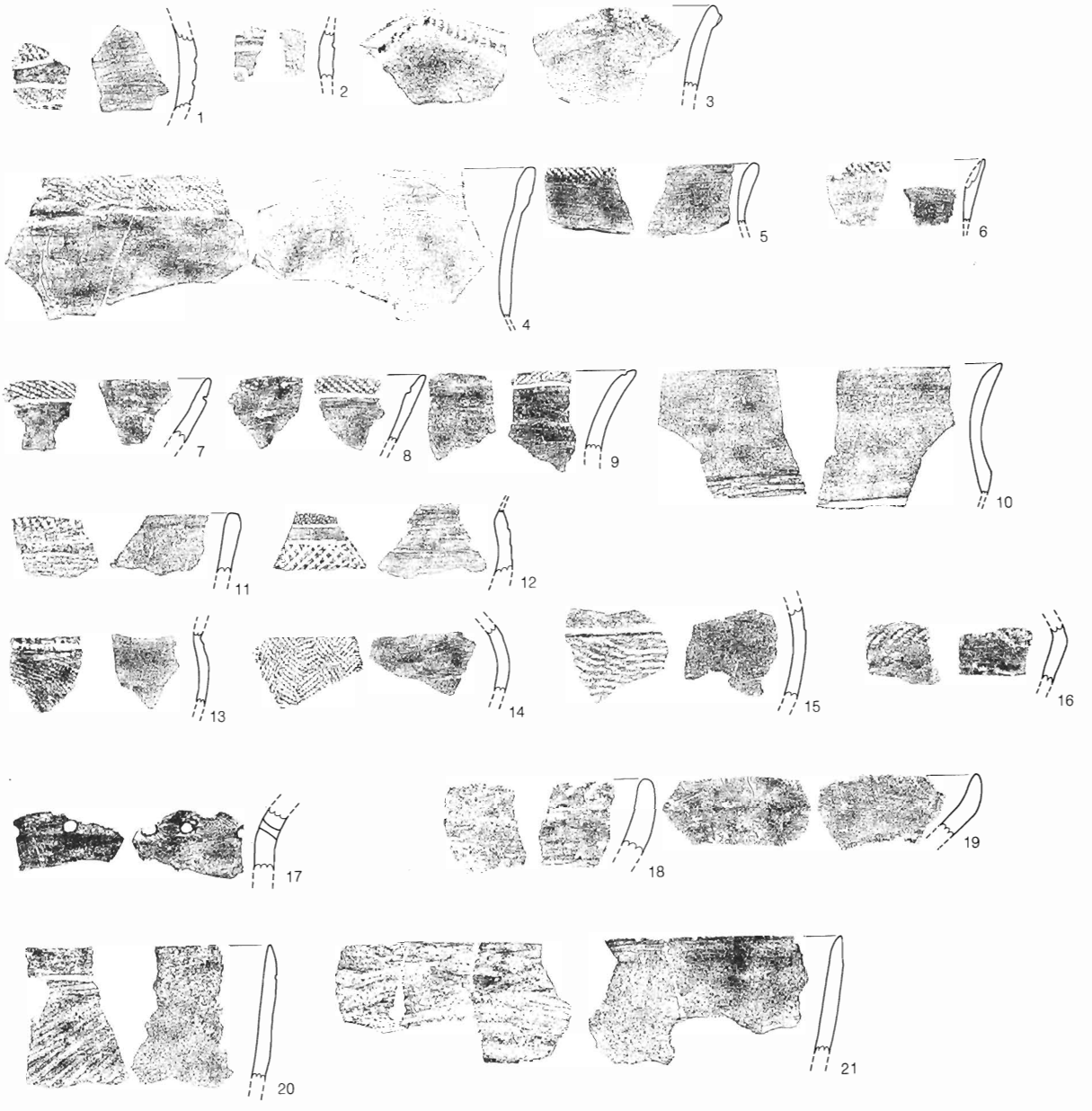
6～10は突帯が口縁近くにあり、口唇部には刻みが無く、突帯に刻みが施されるものである。11～17は突帯が口縁端部に接している一群である。この中でも11～14は刻みがあり、15～17は刻みがない。

18～23は頸部から胴部の破片で口縁と胴部に突帯の付く2条突帯と考えられる。18は頸部に斜めの沈線が施されている。底部には低い上げ底になる24や平底の25、低い高台の付く26と27がある。28は破損しており形状は不明で。器種も分からない。沈線状の窪みも見られるので何らかの土製品であると考えられる。4と5は前池式並行で、18～23は沢田式並行であろう。

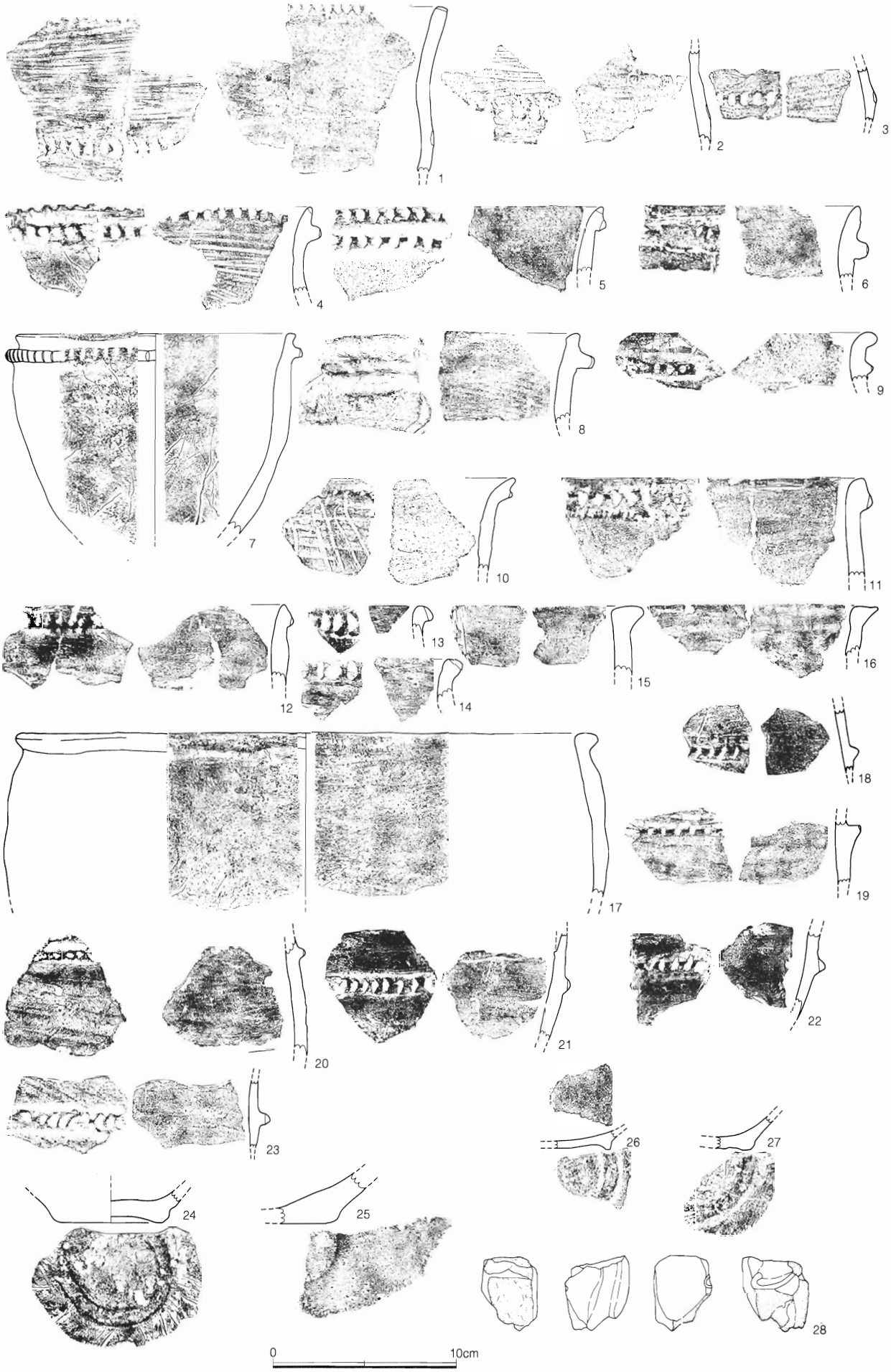
第56～61図はⅡ区とⅣ区から出土した弥生土器である。

第56図と第57図は前期の土器で、第58図が底部である。第59図と第60図は中期の土器、第61図は後期の土器である。

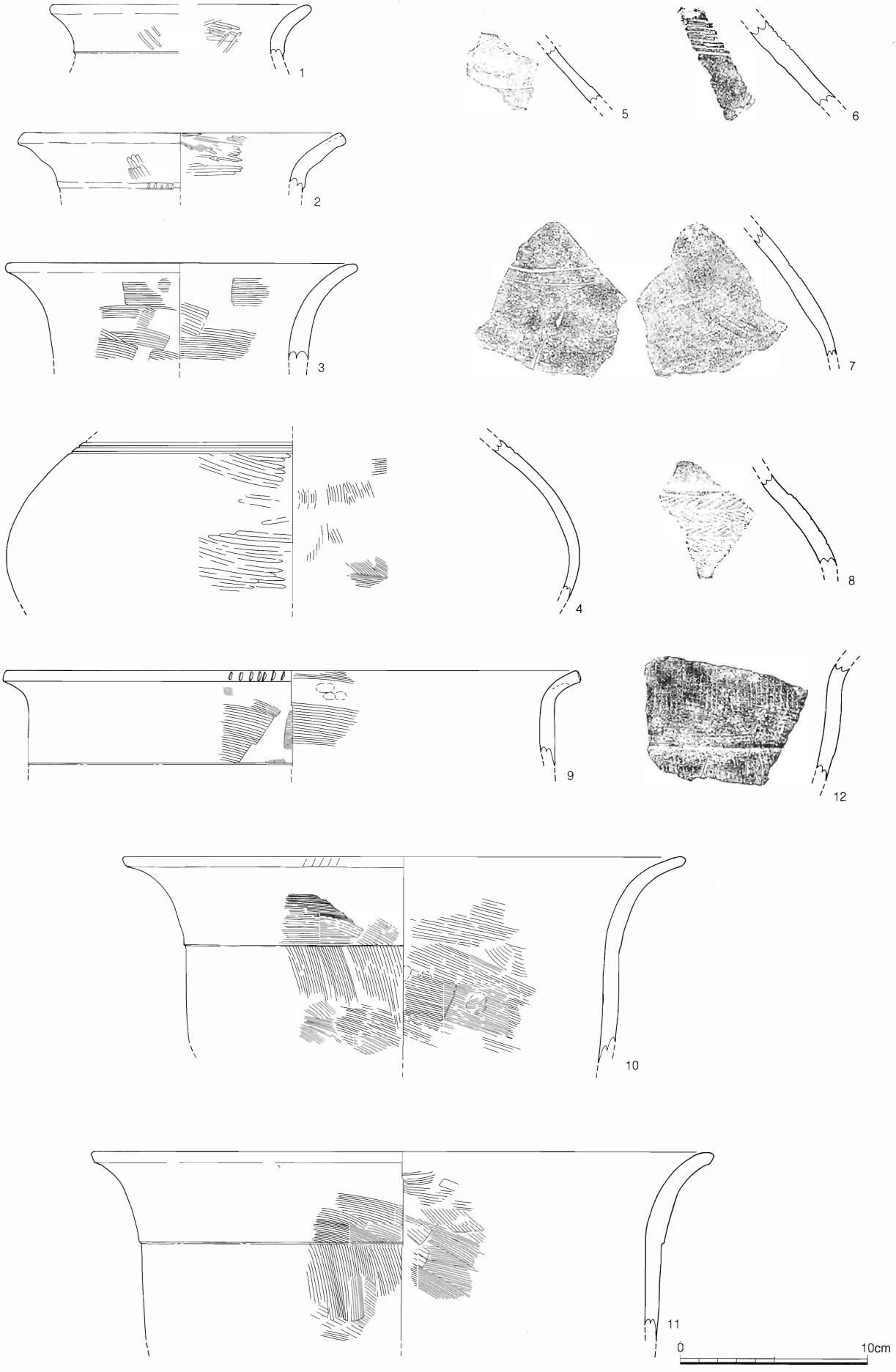
第56図1・2・4～8は壺である。全て内外面にミガキによる調整を行っている。1・2・4・



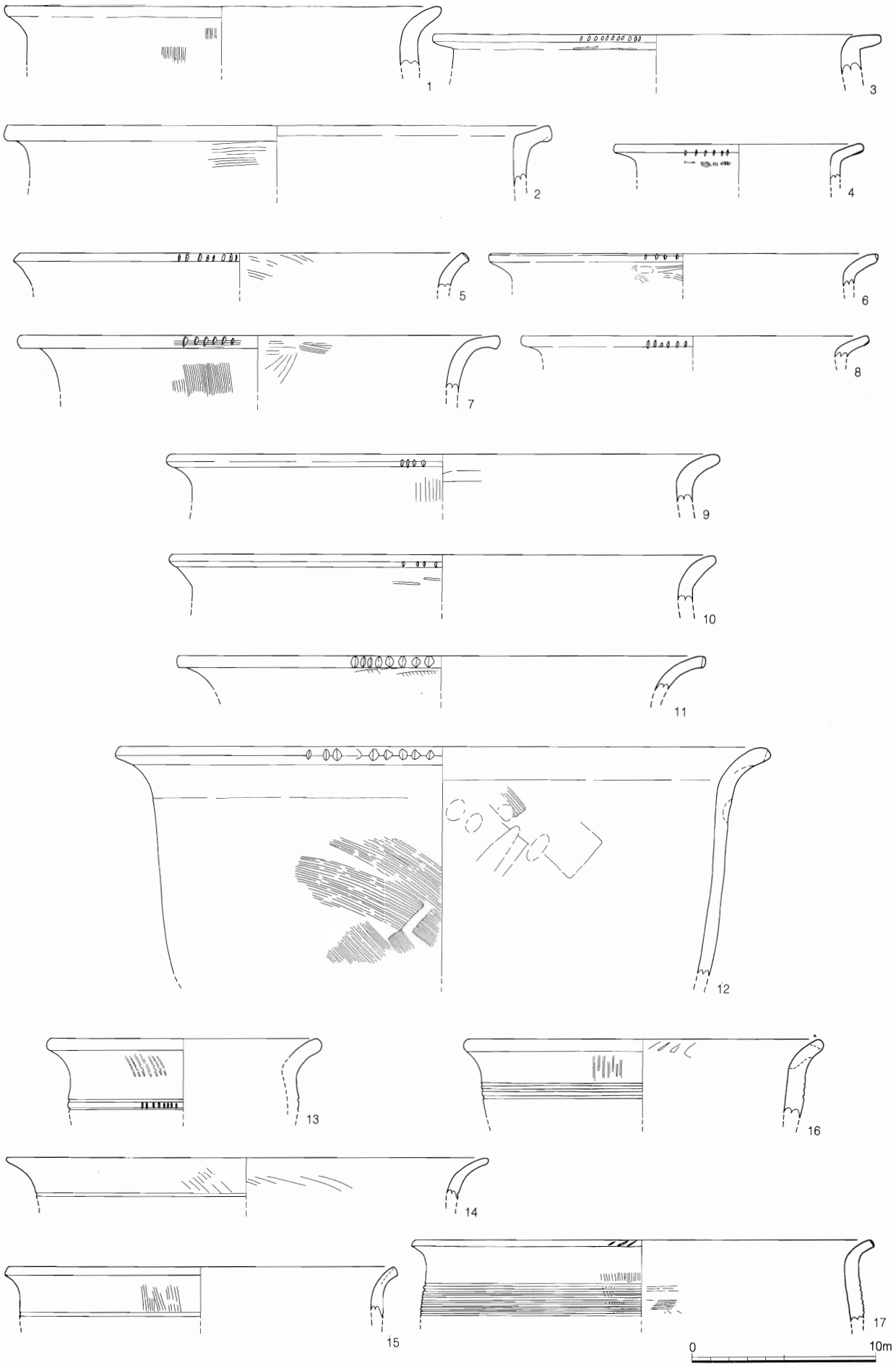
第54図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（2）（S＝1／3）



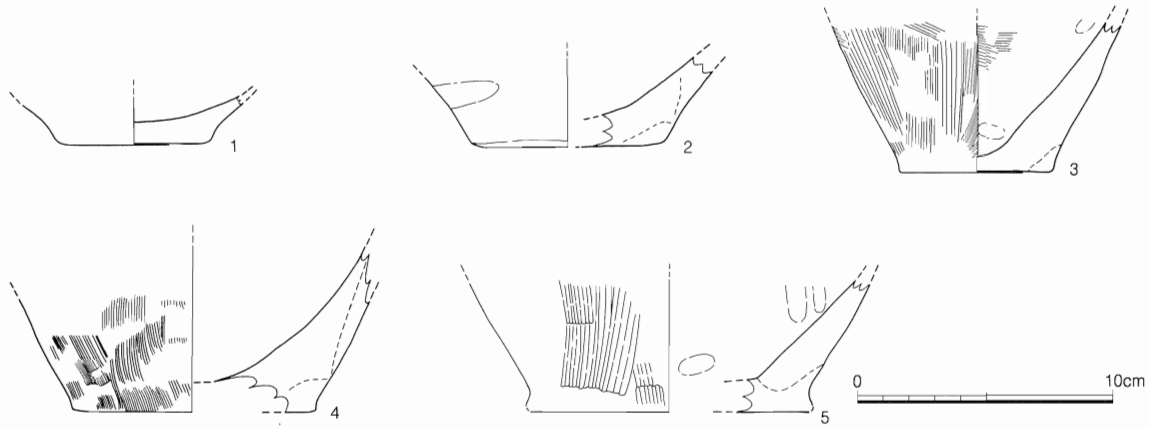
第55図　Ⅱ・Ⅳ区出土縄文土器実測図（3）（S＝1／3）



第56図　弥生土器実測図（1）（S＝1／3）



第57図　弥生土器実測図（2）（S＝1／3）



第58図　弥生土器実測図（3）（S＝1／3）

5・8は削出突帯である。8は貝殻腹縁による有軸羽状文を施している。6・7はヘラ描直線文を施している。第56図3・9～第57図17まで甕である。内外面がハケ調整のものがほとんどである。全体が残っているものが少なく器形がはっきりしないものが多いが、胴部が直線的にすぼまるものと張り出すものがある。口縁部には刻みがあるものと無いものがある。第56図10・11は頸部に段を設けている。16と17はヘラ描直線文を施している。この中で最も古い時期のものは第56図8で松本編年Ⅰ－1様式かⅠ－2様式と考えられる。前期のうち最も新しいⅠ－4様式は第56図6や第57図17がある。

第58図は全て底部である。全て平底で5は端部が張り出している。

第59図1～5は壺である。1は円形浮文を、2と3は波状文、4は無軸羽状文を口縁内面に施す。羽状文は非常に鋭く切り込まれており鉄器によるものではないかと考えている。4は頸部に9条の凹線文を施している。5は4と同一個体と思われる壺の胴部で、列点文を軸に羽状文を施している。第59図6～第60図5までは甕である。第59図6・7は口縁が強く外傾している。第59図9～第60図2・4・5は口縁端部に凹線を施している。第60図3は凹線は見られないが2や4に近いと考えられる。

第60図6は鉢と思われる。7～14は高杯である。杯稜部に角を持たないものは凹線を施さず、持つものは凹線を施している。15は無軸羽状文を施しているが器種も時期も不明である。16と17は突帯文を張り付けている。鉢かもしれない。18は中期の甕の胴部を転用した有孔土製品である。

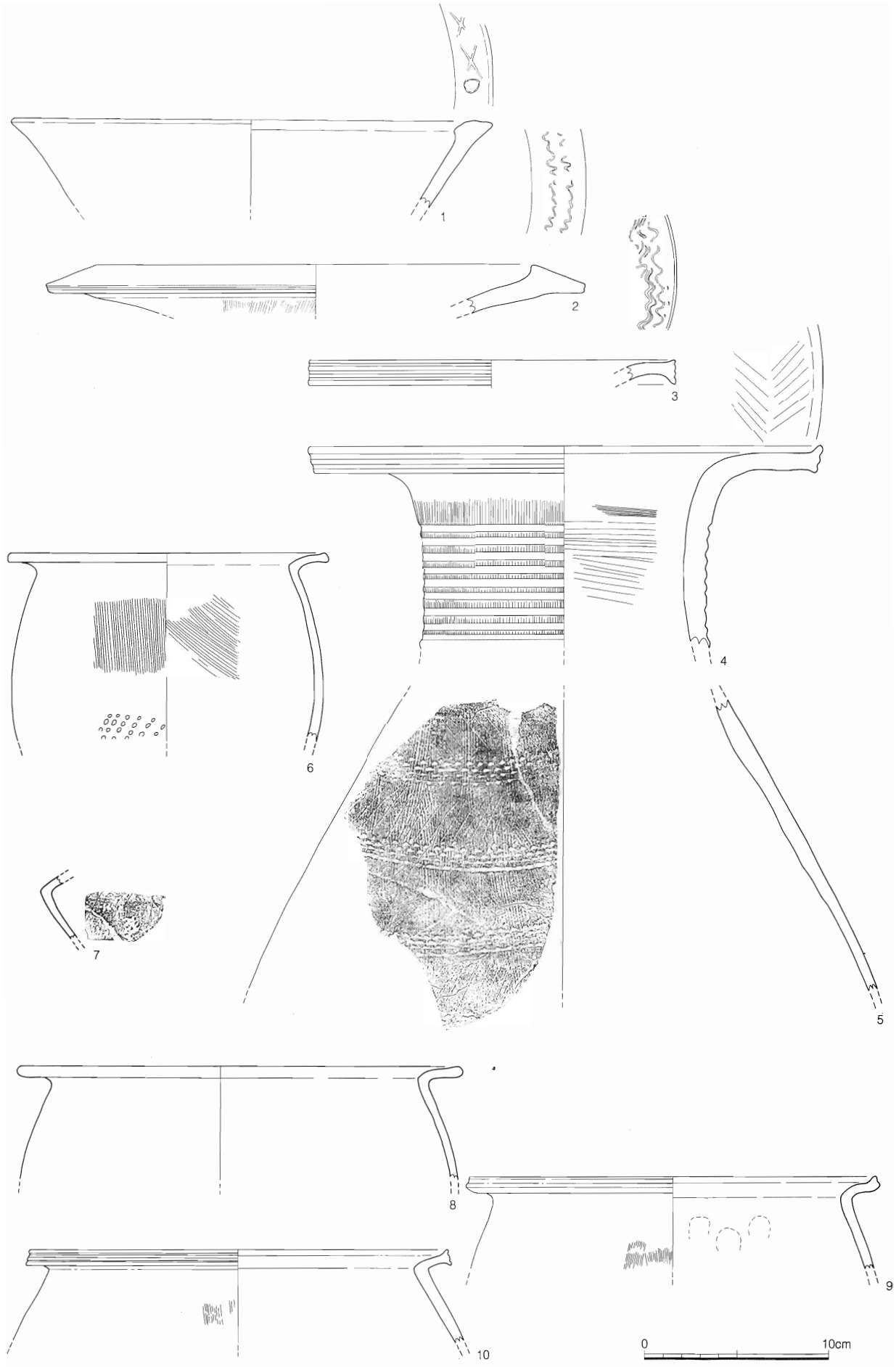
弥生時代中期の土器は松本編年のⅡ様式は見られず、第59図6・8などのⅢ－1様式から第59図4・5や第60図2や9のⅣ－2様式まで見られる。

第61図1は後期の壺で、2は甕である。1はⅤ－1様式、2はⅤ－4様式と思われる。

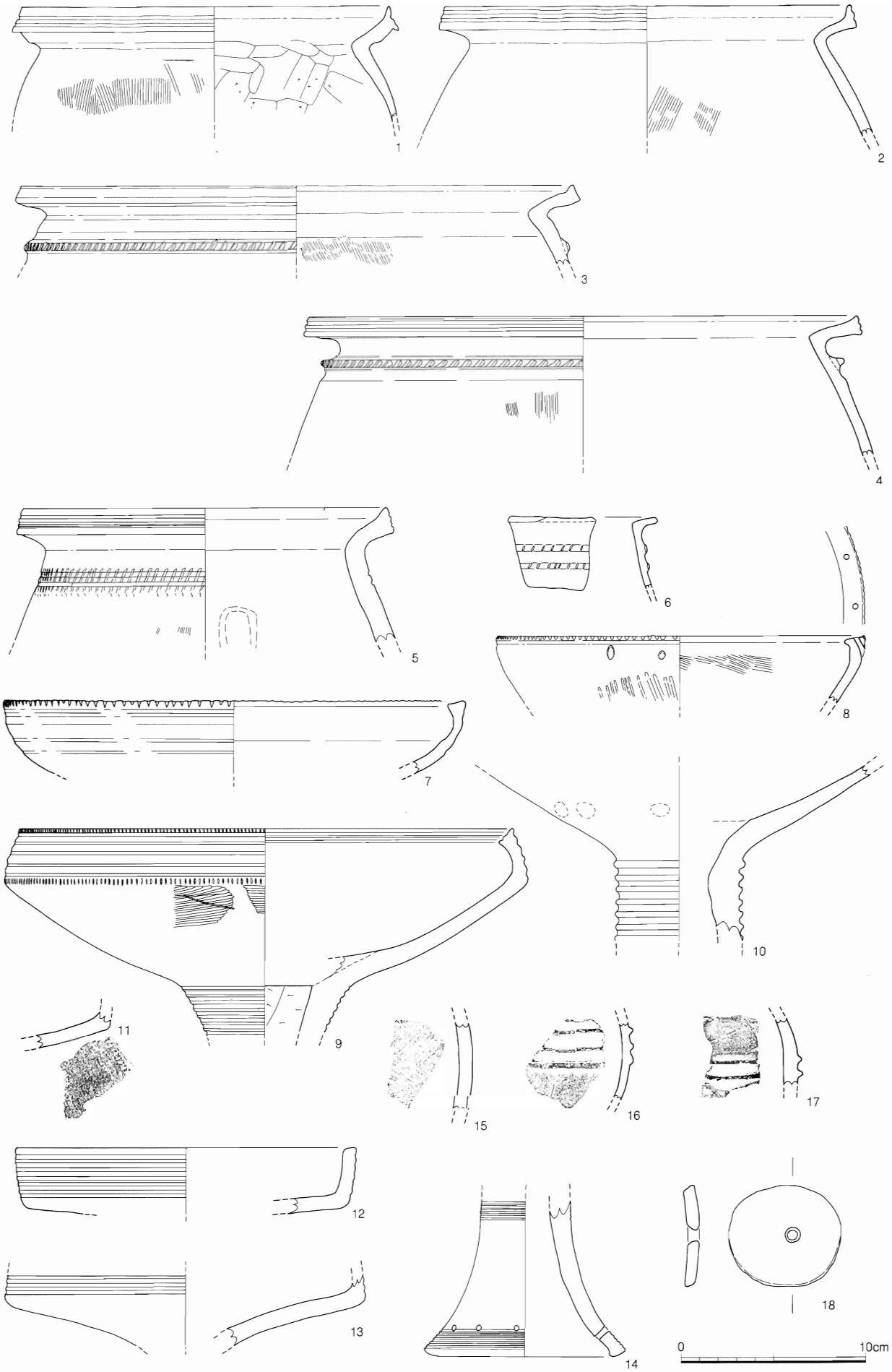
第62図1は人面土器である。縄文土器か弥生土器か判断できず時期は不明である。内外面はナデにより調整されている。中空の土器の外面に鼻を貼り付けている。鼻孔は刺突具により開けられているが、広く開けられてはいない。目は人面土器自体が小片であるため左眼の下部が残るのみである。焼成前に穿孔あるいは口縁状に作られているが、目頭が若干立ち上がっているのが確認される。上まぶたの表現の有無は確認できない。鼻の右側には指頭圧痕状に窪みが見られる。位置的には耳の表現あるいは耳の付け根あたりの表現かもしれない。鼻と指頭圧痕状の窪みの間の一見目のようにも見える部分は調査時の傷である。内面は外面と同じ曲面に形作られている。

2は胎土や指頭圧痕状の窪み、器壁の厚みから1と同一個体と考えている破片である。仮定ではあるが1と同一個体であるなら、右耳にあたる可能性はある。しかし推測の域は出ない。

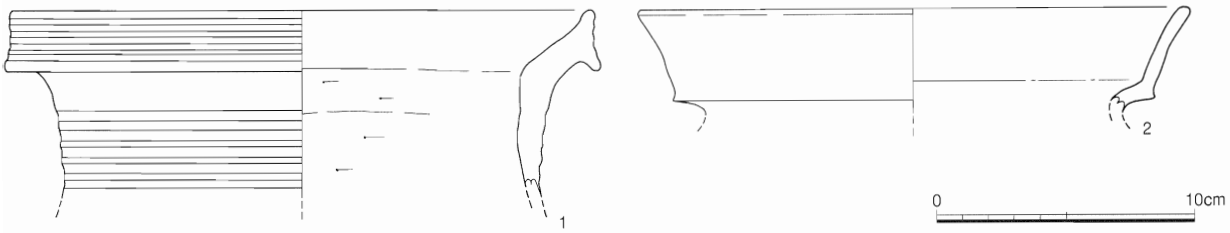
第63図はⅡ・Ⅳ区の第1黒色土層から出土した須恵器と土師器である。両者は先述の建物跡から



第59図　弥生土器実測図（4）（S＝1／3）



第60図　弥生土器実測図（5）（S＝1／3）



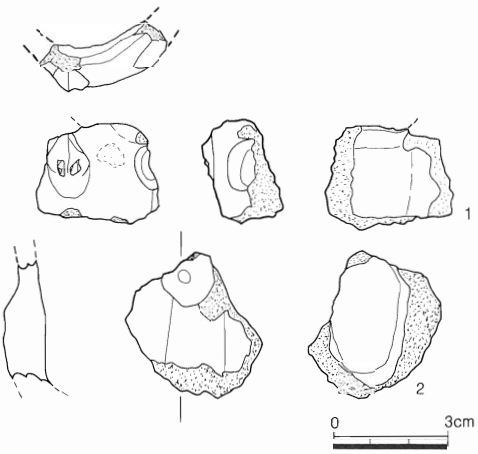
第61図　弥生土器実測図（6）（S＝1／3）

出土した須恵器と土師器には確認されなかった時期のものを中心に図化している。

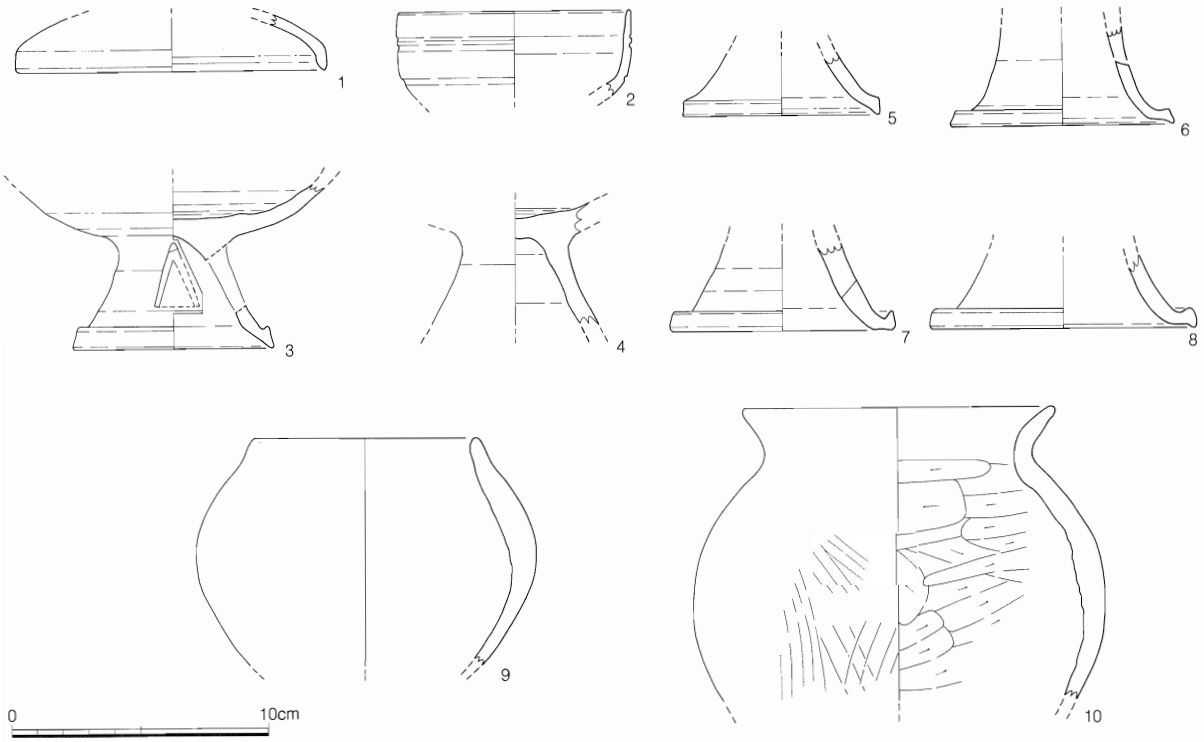
第63図１～８は須恵器で１は杯蓋であるが、傾きが違っており器高はもっと低くなる。２は長脚無蓋高杯である。３と４は高杯である。5～8は高杯の脚端部であろう。８・９は土師器で８は無頸壺、９は甕である。１は大谷編年の出雲７期で３は出雲４期であろう。

第64図１と２は中世土師器の皿であろうか。２の底部には回転糸切り痕が見られる。

第65図には石器をまとめて掲載している。１は削器、２は楔形石器である。３は磨製石包丁の一部あろう。



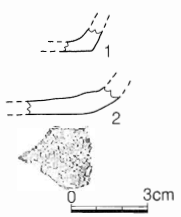
第62図　人面土器実測図（S＝1／2）



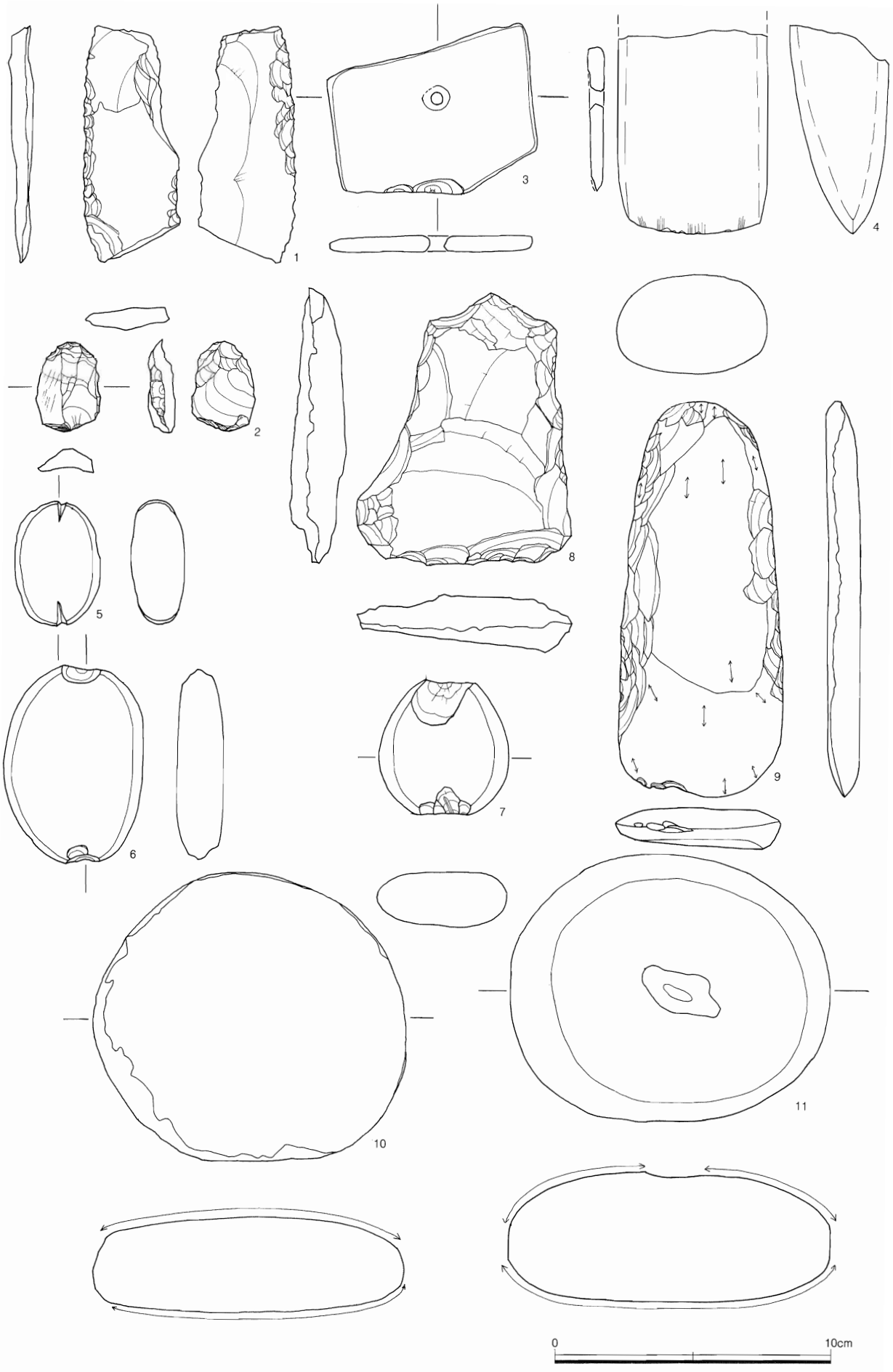
第63図　土師器・須恵器実測図（S＝1／3）

４は磨製石斧、5～7は石錘である。８は打製石斧で、９は両側縁が研磨されていない磨製石斧である。10は側縁全周に打撃痕を持つ磨石である。11は凹石である。

３と９は調査以前に表採されていたもので、７は第２黒色土層中からの出土である。



第64図
中世土師器実測図（S＝1／3）



第65図　石器実測図（S＝1／2）

第４章　自然科学的分析

第１節　小丸遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

２．試　　料

試料は、小丸遺跡において検出されたSI04、SI05、SI08、SI09の各遺構より出土した炭化材25点である。

３．方　　法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結　　果

結果は表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ノグルミ　*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.　クルミ科　　カラー図版８

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では角張った小道管が、複合して斜線状に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞が接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞と方形細胞からなる異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が見られる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～５細胞幅である。小道管の内壁にらせん肥厚が見られる。

以上の形質よりノグルミに同定される。ノグルミは、本州（東海地方以西）、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径60cmぐらいである。現在では建築、器具、経木、薪炭、マッチ軸木などに用いられる。

コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　　カラー図版９（上）

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科　　カラー図版9（中）

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいるものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靭で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

ミズキ属　*Cornus*　ウコギ科　　カラー図版9（下）

横 断 面：小型の道管が、単独あるいは2個放射方向に複合して、ややまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、2～4細胞幅ぐらいで紡錘形の多列のものからなる。

以上の形質よりミズキ属に同定される。ミズキ属には、ミズキ、クマノミズキ、ヤマボウシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。材は建築、器具、彫刻、旋作、薪炭などに用いられる。

5．所　見

同定の結果、SI04より出土した炭化材はノグルミ10、コナラ属コナラ節、ケヤキ各1、SI05より出土した炭化材はノグルミ、SI08より出土した炭化材はノグルミ9、ミズキ属1、SI10より出土した炭化材はノグルミであった。多く出土しているノグルミは温帯下部の暖温帯に分布し、山地に自生する落葉高木である。コナラ属コナラ節、ケヤキ、ミズキ属も温帯に分布する落葉広葉樹で、どの樹種も本遺跡の周辺地域にも普通に分布していたと考えられる。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表8　小丸遺跡における樹種同定結果

遺構名	No.		結果（和名／学名）
SI04	238	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	239	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	240	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	249	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	251	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	263	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	290	コナラ属コナラ節	*Quercus* sect. *Prinus*
SI04	339	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	354	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	389	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI04	396	ケヤキ	*Zelkova serrata* Makino
SI04	397	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI05	461	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI05	466	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	19	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	21	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	22	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	24	ミズキ属	*Cornus*
SI08	25	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	26	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	27	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	29	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	30	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI08	37	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.
SI09	1層－6	ノグルミ	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.

第２節　小丸遺跡の住居址(SI04, 05, 06)のかまどの地磁気年代

島根大学総合理工学部　時枝克安　山室雅義

１．地磁気年代測定法の仕組

地磁気の要素には強度、および、伏角と偏角で表される方向があるが、それらはすべて変動している。これらの変動には、変化速度の速いものから遅いものまで様々な成分が含まれているが、10年以上経過して初めて変化したことが分かるような緩慢な変動を地磁気永年変化と呼んでいる。ここで用いる地磁気年代法で時計の働きをするのは、地磁気の方向の永年変化であり、過去の地磁気の方向と年代の関係を表す変動曲線を利用して、地磁気の方向から年代を読みとろうとする。しかし、ある焼土が焼けた年代を知るためには、焼けたときの地磁気の方向が何かに記録されており、それを測定できなくては目的を果たせない。焼けたときの地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録され、保存されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の熱残留磁気の測定によって、焼土の被熱時の地磁気の方向を求め、次に、焼土のある地域の地磁気永年変化曲線上で、求めた方向に近い点を決定し、その点の年代目盛りを読みとることになる。

土壌、粘土、砂、岩石等が地磁気のなかで焼けると、これらは熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の担い手は、これらに含有される磁鉄鉱等の磁性粒子であり、熱残留磁気の方向は、焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも、磁性粒子のキュリー温度（磁鉄鉱では575℃）以上に再加熱されないかぎり、物理・化学的攪乱に対して非常に安定であり、数万年以上時間が経過しても変化しない。焼土がキュリー温度以上に再加熱されたときには、それまで保持されていた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、再加熱時の地磁気の方向を向いた新しい残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気の方向を熱残留磁気の方向として正しく記憶していることになる。それゆえ、年代既知の焼土の熱残留磁気を利用して、過去の地磁気の方向が時間とともにどのように変化したかをあらかじめ測定してグラフを作成しておけば、このグラフを時計の目盛りとして、焼土の最終焼成年代を推定できることになる。この時計では地磁気の方向が〝針〟に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の〝針の位置〟を記憶していることになる。日本では、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線が広岡によってかなり詳しく測定されているので、ここで説明した方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代法の詳細については広岡、および、中島等による解説[1,2)]が参考になる。

２．地磁気年代測定法の問題点

第一に地磁気の地域差が問題となる。地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所の標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違する場合がある。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土のある地域の標準曲線を使用しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方向を比較する必要がある。今までの中国地域の調査では、西南日本の標準曲線から求めた地磁気年代は、ほとんどの場合、遺物の考古学年代と整合する。したがって、中国地域では、西南日本の標準曲線を使用して地磁気年代を決定しても問題はない。

第二に土器編年の影響の問題がある。地磁気年代測定法は地磁気変動という物理現象を利用しているので、地磁気年代は土器編年に左右されないと思われがちであるが、実際には、地磁気年代と土器編年の間には密接な関係がある。すなわち、少数の年代定点を除くと、標準曲線上のほとんどの年代目盛りは土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、年代定点に近い地磁気年代には問題がないが、年代定点から遠く離れた地磁気年代は土器編年の影響を強く受けており、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代も訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代はこのような相互依存から独立できるが、現状では年代定点が少数なのでやむをえない。しかし、地磁気年代測定法は、地磁気を媒介とする対比のおかげで、焼土跡に遺物がない場合でも有効である点、相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の優れた性格をもっている。

3．遺構と試料

小丸遺跡（島根県飯石郡志津見）の3つの住居址（SI04,05,06）から出土したかまどから地磁気年代を推定するための定方位試料を採取した。住居址SI04のかまどには完形の土師器の壺が埋められており、住居址の中央部には2つの焼土面が認められた。かまども焼土面も焼成度が低い。住居址SI05では2ケのかまどが検出されたが、試料を採取したのは1号かまどのみである。このかまどは石組みを有し、かまどの床面には被熱による赤変が鮮明に認められた。住居址SI06のかまどにも両側の壁の一部に石材が使用されており、焼土の焼成度は低い。試料の採取状況と焼土の状態を表1にまとめる。これらの住居址の年代は、出土した土師器と須恵器から6C末～7C前半と推定されている。定方位試料の採取法としては、整形した焼土塊に樹脂製ケース（24×24×24㎜）を被せて隙間を石膏で充填し、ケース上面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定する仕方をとっている。

表9　年代測定用の定方位試料採取状況

住居址	試料採取場所と個数	焼土の状態
SI04	かまど床(8)，かまど壁(16)　合計(32) 住居址中央の2焼土面(8)	低焼成度
SI05	1号かまど床面(13)　合計(13)	鮮明な赤変あり
SI06	かまど床(18)，かまど壁(13)　合計(31)	低焼成度

4．測定結果

試料の自然残留磁気をスピナー磁力計(Schonstedt社 Model SSM-1A)で測定した。自然残留磁気の方向と強度の測定結果を見ると、住居址SI04かまどと住居址SI06かまどでは、低焼成度を反映して、双方とも残留磁気の方向（図1）が大きく分散しており、残留磁気の強度（図2）は大半の試料（80%以上）について10-5emu.gという焼土としては弱いレベルを示す。一方、比較的よく焼けて鮮明な赤変を示す住居址SI05 1号かまどでは、3ケの試料を除いて、残留磁気の方向がよく揃い、残留磁気の強度は住居址SI04とSI06のかまどに比べて一桁強く、試料の92%が10^{-4}emu／g

のレベルにある。

自然残留磁気の方向のまとまりを改善するために交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度を適当な設定値から零になるまで滑らかに減少させて、抗磁力が磁場の設定値よりも弱い磁気成分を消去する方法である。住居址SI04かまどについては2ケの試料について交流消磁(10mT)を行った結果、残留磁気の方向はかえって分散が大きくなった。データのまとまりのよい住居址SI05 1号かまどについては、全ての試料について、交流消磁(10mT)を行ったが、方向のまとまりはかえって劣化した。住居址SI06かまどでは、3ケの試料について交流消磁(10, 20, 30mT)を行ったが、残留磁気の方向のまとまりは改善されなかった。結局、住居址SI04と住居址SI06のかまどについては、集中するデータがないので、地磁気年代を推定することができない。住居址SI05 1号かまどについては、自然残留磁気の揃ったデータからさらに集中のよいもの（図3の小円内）を選択して、これらの平均方向を計算すると次の結果を得る。

住居址SI05 1号かまどの自然残留磁気の平均方向

Im(度)	Dm(度E)	k	α 95(度)	n／N
46.10	3.88	1405	1.48	8／13

Im：平均伏角　k：Fisherの信頼度係数　　n／N：採用試料数／採取試料数
Dm：平均偏角　α 95：95%誤差角

5．小丸遺跡の住居址SI05の1号かまどの地磁気年代

図3は小丸遺跡の住居址SI05の1号かまどの残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線[3)]である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向に近い点を永年変化曲線上に求めて、その点の年代を読みとる。地磁気永年変化曲線の重なり合いのために、2つの年代値（AD1380頃、AD1750頃）が可能となるが、18世紀の年代は考えられないので、AD1380±15を選択する

小丸遺跡の住居址SI05の1号かまどの地磁気年代

AD1120±50

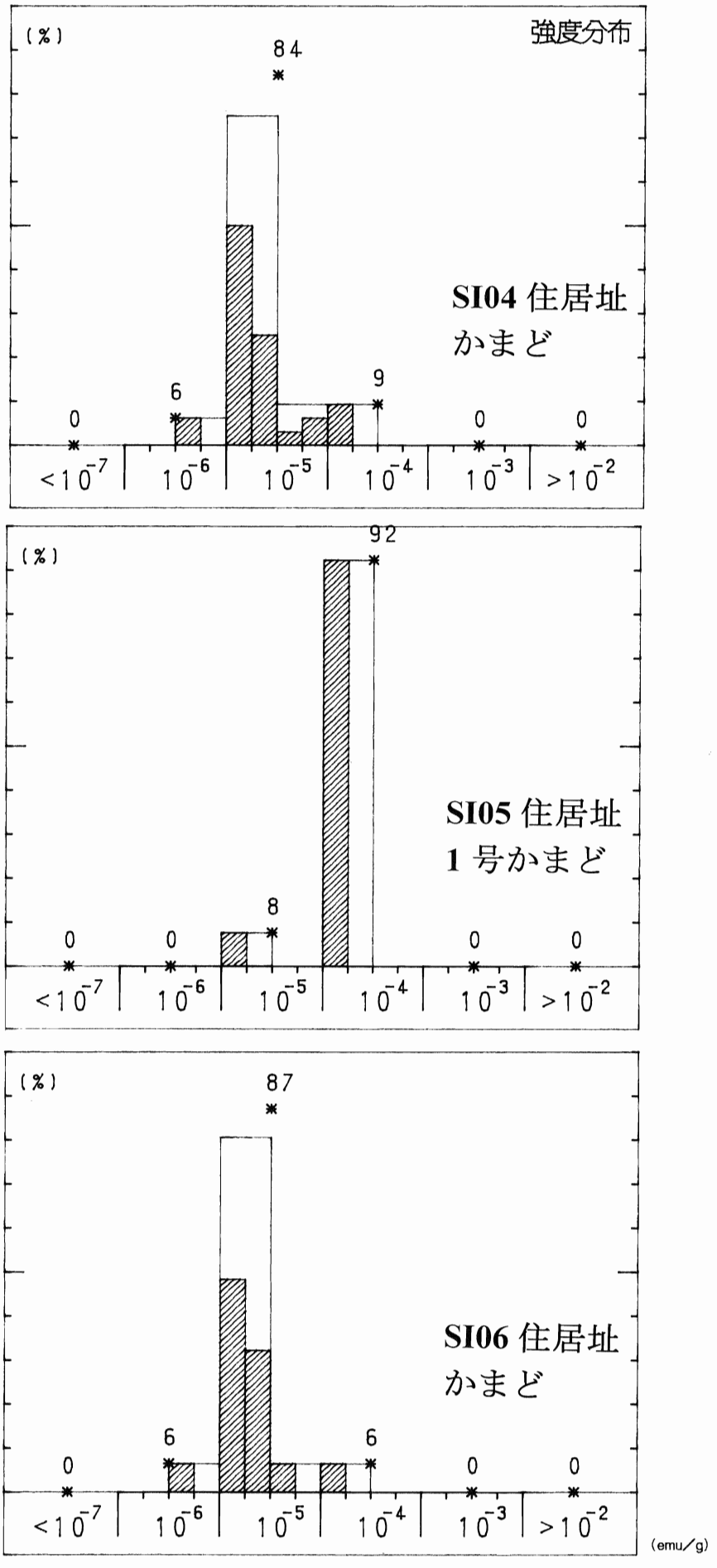
6．考　　察

土器年代は6C末～7C前半であるのに対して、地磁気年代はAD1120±50となった。両年代の大幅な相違をどのように説明するかが問題となる。図3の波線の領域は6C末～7C前半の地磁気の方向の分布範囲を示している。したがって、7C頃の地磁気の方向は小丸遺跡の住居址SI05のかまどの自然残留磁気の方向から、角度にして15度以上も大きく隔たっていることになる。この相違の物理的原因として通常考えられるものには、①地盤の傾き②後世における加熱③落雷による2次残留磁気の獲得が挙げられる。また、④6C末～7C前半の遺物が後世に持ち込まれた場合にも、地磁気年代と土器年代の差を説明できる。しかし、地盤は安定しており、大きく傾いた形跡は認められていない。また、AD1120の年代には、須恵器時代から500年以上も経過しているので、住居址とかま

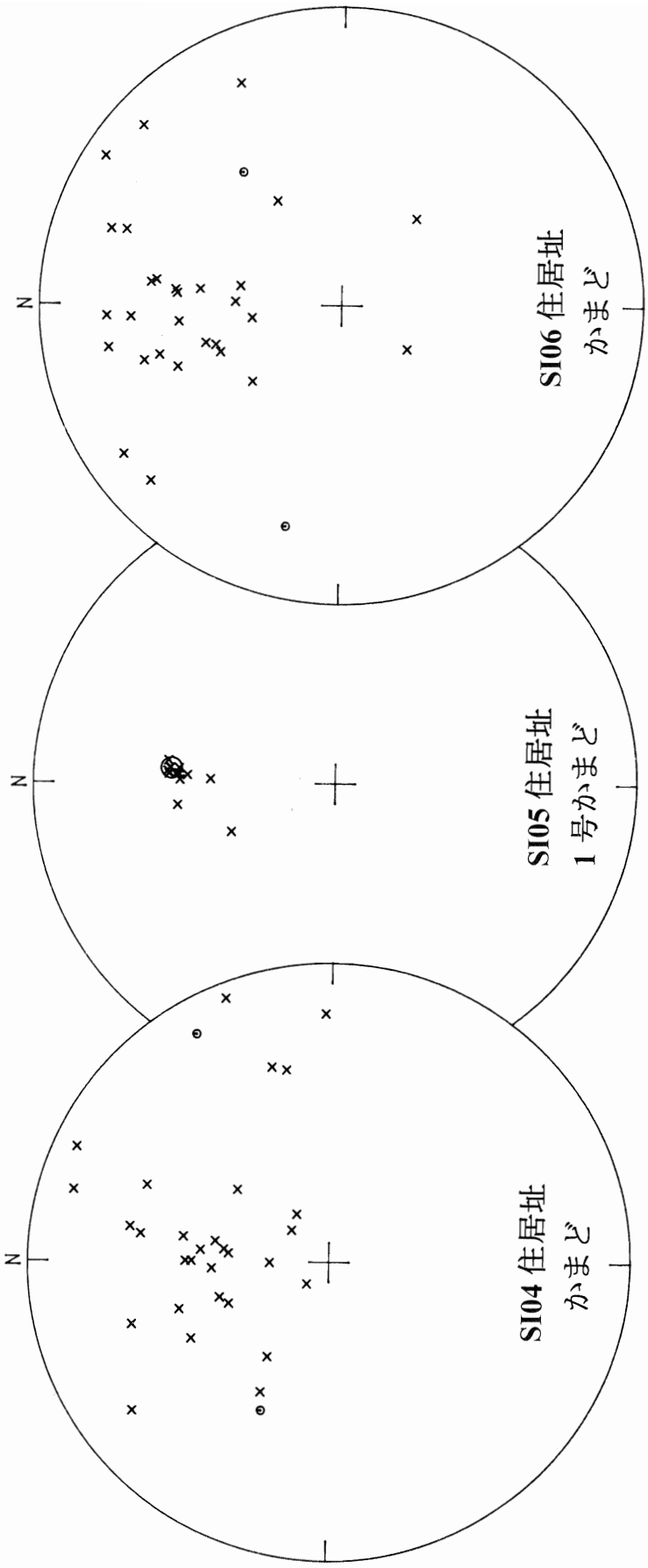
どが地表に現れているとは考え難く、人工的な再加熱の可能性はほとんどない。また、落雷による影響に目を向けると、焼土の近辺に落雷があった場合、落雷による鉛直方向の大電流が周囲に水平方向の強い磁場を発生させ、焼土の残留磁気を水平方向に偏らせる。このような残留磁気に対して交流消磁を行うと、雷による水平方向の2次的磁化成分が除去されるので、交流消磁の前には残留磁気の伏角は浅く、交流消磁後には次第に深くなるのが通常である。しかし、小丸遺跡の住居址SI05の1号かまどでは、残留磁気の伏角は最初から深く、交流消磁(10mT)の結果、逆に伏角が浅くなった。したがって、落雷が原因ではない。一方、③の状況は形式的な仮説としては考えられても、現実の歴史では異常な事態である。結局、焼土の状況から見て、ここで挙げた①～④が原因であるとは考えられず、小丸遺跡SI05かまどの土器年代（6C末～7C前半）と地磁気年代（AD1120±50）の大幅な相違を合理的に説明できない。この問題の解明は今後の課題となって残る。

最後に、試料採取時にお世話になった島根県埋蔵文化財センター伊藤智氏と伊藤徳広氏に感謝いたします。

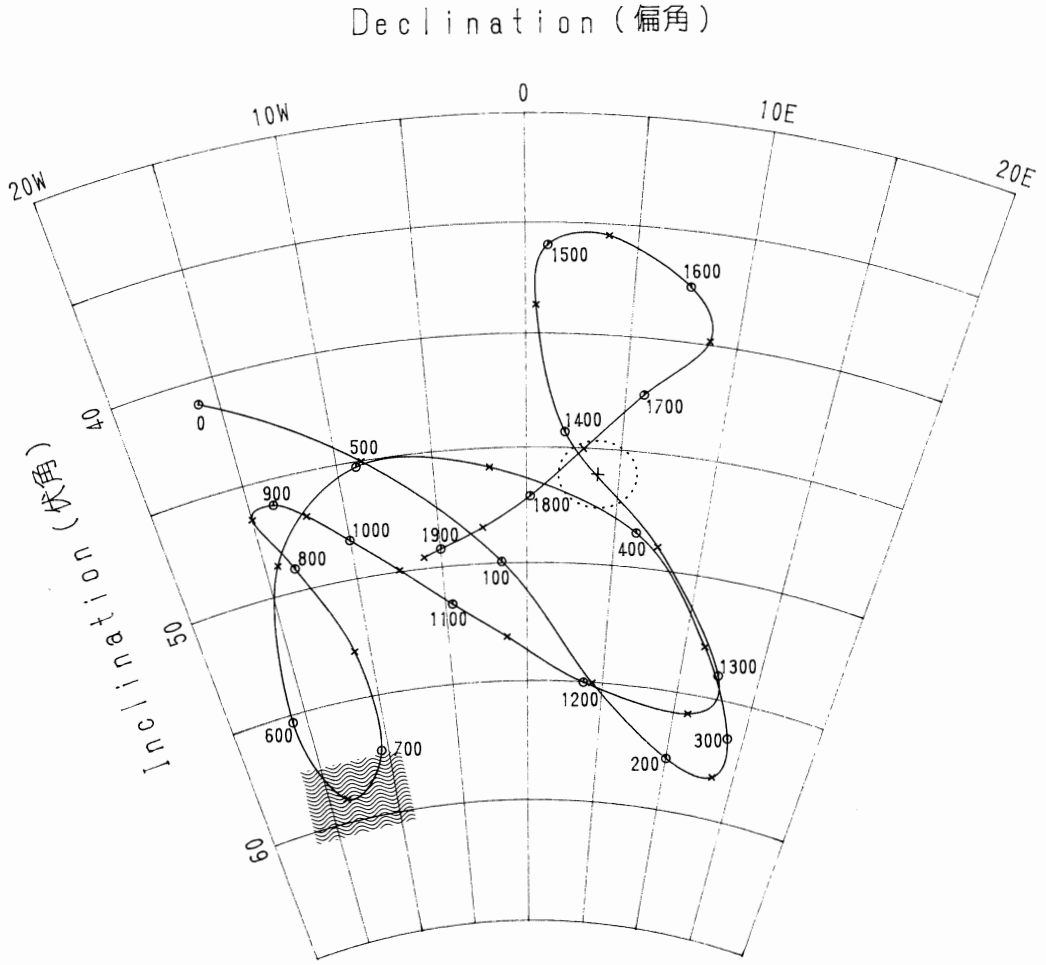
註(1)広岡公夫(1995)　「考古資料分析法」、考古学ライブラリー、65、
田口勇、斉藤努編、ニュー・サイエンス社、100-101
(2)中島正志、夏原信義　「考古地磁気年代推定法」考古学ライブラリー9
ニュー・サイエンス社
(3)広岡公夫(1978)　考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向
第4紀研究　15、200-203



第66図　小丸遺跡の住居址（SI04, 05, 06）のかまどの自然残留磁気の強度



第67図　小丸遺跡の住居址（SI04, 05, 06）のかまどの自然残留磁気の方向



（波線で示された領域は７C頃の地磁気の方向の分布範囲を示している。）

第68図　小丸遺跡の住居址（SI05１号かまど）の残留磁気の平均方向（十印）と誤差の範囲（点線の楕円）および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

第5章　ま　と　め

これまで小丸遺跡の発掘調査の成果を述べてきたが、ここでは得られた成果を時代ごとに整理し、若干の考察を加えてまとめとしたい。

第1節　縄文時代の小丸遺跡

小丸遺跡で出土した最も古い縄文土器は爪形文を有する「北白川下層Ⅲ（磯ノ森）式」である。これは第3黒色土層から出土しているが、その他にまとまった遺物の出土はない。また遺構も検出されていないので集落ではなかったと思われる。

第2黒色土層からは土器と屋外炉や土坑、ピットが検出されている。出土した土器は中津式から彦崎Ｋ1式の縁帯文系土器が出土している。

第1黒色土層からは後期の四元式から晩期の突帯文土器の終わりまでの土器が出土している。しかし第1黒色土層及び第1ハイカ層上面に縄文時代の明確な遺構は確認できていない。Ⅱ区には出土遺物もなく時期が不明なSK02やSK03、多数のピットが確認されている。これらの中に縄文時代の遺構がある可能性も考えられる。

遺跡全体から縄文土器が出土しているので縄文時代の建物跡などがあったのかも知れないが、調査の不備か、以前に削平されてしまったのか不明である。ただSK02は現在の地形で遺跡内でも高い位置に造られている。検出された時点で段々畑により20cmほど削平されていた。このことからさらに激しく削平を受けて低くなった地点は遺構が残らなかったものと考えられる。

以上、小丸遺跡の縄文時代は前期に土器が確認されるが、中期は全くの空白となり、後期から晩期の最後まで集落とまでは言えないが、何らかの生活の舞台となっていたことが判明した。

第2節　弥生時代の小丸遺跡

弥生時代には遺物としては前期から後期までの土器が出土し、遺構は中期後半の竪穴建物跡が3棟確認されている。

出土した土器は前期と中期が多く、後期は非常に少なかった。前期はⅠ－1様式あるいはⅠ－2様式からⅠ－4様式までである。中心はⅠ－2様式とⅠ－3様式である。中期はⅡ様式が無く、Ⅲ様式が若干あるものの中心は遺構が確認されているⅣ－2様式である。

検出された竪穴建物跡はSI01が方形であるのに対し、SI07は隅丸方形に近く、SI12は円形であった。3棟に時期差があるのか出土遺物が少なく判断できないが、中期後半の竪穴建物の形状の多様性がみられる資料である。

第3節　古墳時代の小丸遺跡

古墳時代は後期の遺物と遺構がほとんどである。特に竪穴建物跡は検出された5棟から出土した遺物は7世紀初頭から前半という一時期に収まり、なおかつその内3棟が焼失住居と見られること、他の2棟も焼失している可能性があるなど一括資料の可能性がある良好な資料である。

竪穴建物跡のうちSI05は須恵器の高杯を多く持っており、また石組みの造り付け竈を2基持って

いた。1号竈内から出土した土師器の甕は頸部が長く他地域の影響が考えられ、その他の竪穴建物跡に比べると様相が若干異なっていた。

第４節　その後の小丸遺跡

古墳時代以降は主だった遺構や遺物は確認されなかった。Ⅰ区には近世に属すると考えられるSD02～06が検出されたが、集落に伴ったものではなく畑地か田地に関係したものではないだろうか。いずれにしても小丸遺跡を人々が住空間として活用していたのは古墳時代後期までで、その後は畑地か田地として利用されていたのではないかと考えている。

第13図には風倒木痕が何か所か図示してある。小丸遺跡からは古墳時代の建物跡の北西方向からまとまって検出されている。防風林の可能性も考え調査を行った。覆土に土師器の細片が混じっているものもあったが、木の倒れた時期は不明である。表土層によく見られた近世以降の陶磁器などは含まれていなかった。風倒木痕の形状と土層の観察から木を倒した風は谷筋に沿って西から吹いたと思われる。

第５節　焼失した建物について

小丸遺跡では出土遺物の時期が同じ5棟の古墳時代後期の竪穴建物跡のうち、3棟は焼失しており、2棟は焼失した建物の可能性があると考えられる。同一様式の遺物が出土しているからと言って並立した建物とは限らないが、ここでは焼失した原因と建物の構造について若干の考察を行ってみたい。

焼失した原因については①失火②焼却③放火の3点が挙げられる。

①は生活している中で何らかの不注意により火災を起こしてしまったもので建物には竈もあるので可能性はある。しかしSI04やSI05は隣接しているので延焼する可能性はあろうが、SI08は離れた位置に建てられており燃え移ったと考えるにはかなりの火災であったと思われる。山火事などが考えられるかもしれない。

②は建物（集落）を廃棄する段階で焼却したと考えるものである。建物を廃棄する際の祭祀行為と考えられなくもないが確証はない。また全ての建物跡には完形の須恵器や土師器、鉄器が何点も出土している。建物を廃棄するだけであれば生活道具は持ち出すのではないかと考えている。

③は放火である。各建物跡の遺物の出土状態を見ると土器や鉄器が持ち出されず残っているので、不意に火災にあったと考えることができる。放火であれば離れた数棟の竪穴建物が同時に焼失した理由も立つのではないかと考えている。

以上のように推測ではあるが建物が焼失した原因を考えてみた。しかし今回の調査から明確な答えを出すことはできなかった。

次に竪穴建物の構造を若干考えてみたい。焼失住居は建築部材が炭化して出土するため建物の構造を考える上で非常に貴重な資料である。小丸遺跡で検出された3棟のうちSI05は建物の壁面に斜めに小さいピットが掘られていた。これは垂木穴と考えられる。SI04は炭化材が放射状に出土している。垂木穴は確認されていないが、炭化材は遺構の検出面より上から床に向かって倒れ込んでいるので、垂木穴はさらに上方のあったものと考えられる。樹種鑑定によると垂木はノグルミを使っているが、唯一、SI04で出土した板状の部材はケヤキを使用していた。建築部材は場所によって樹

種を使い分けていた可能性を指摘できる。

また土葺きの竪穴建物であった可能性も考えていたが、土層の観察からは判断できなかった。

以上が今回の調査成果をまとめたものである。小丸遺跡の様相は明らかにできた点とできなかった点があった。また周辺の遺跡と小丸遺跡の様相を検討すべきであったが、本報告書では検討することができなかった。この点も今後の課題として残った。

観察表（縄文土器）

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
10-1	浅鉢	DE	屋外炉	2K 89,171	(30.2)?	(3.0)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ、縄文	4ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
2	浅鉢	DE	屋外炉	2K 128	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	2ミリ以下の砂粒含む	明橙褐色	精製
3	深鉢？	DE	屋外炉	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	1ミリ程度の砂粒含む	暗褐色	精製
4	浅鉢	DE	屋外炉	2K 118,137	(19.0)	(5.2)	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)工具によるナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗茶褐色	
5	深鉢	DE	屋外炉	2K 176	(27.6)	(7.2)	cm	cm	(外) (内)条痕	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
6	深鉢	DE	屋外炉	2K 57	(25.2)	(22.1)	(26.0)	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	(外)灰褐色 (内)茶褐色	補修穴？
7	深鉢	DE	屋外炉	2K 147	28.0	cm	cm	cm	(外)粗いナデ (内)ていねいなナデ	5ミリ以下の長石含む	茶褐色	
8	深鉢	DE	屋外炉	2K 99	(29.9)	cm	31.7	cm	(外)条痕 (内)条痕をナデ消し	5ミリ以下の長石、砂粒	(外)黄茶色 (内)灰茶色	
9	深鉢	DE	屋外炉	2K 136	cm	cm	cm	cm	(外) (内)	5ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
10	深鉢	DE	屋外炉	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ケズリ後ナデ?(粗い) (内)工具によるナデ	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
11	深鉢	DE	屋外炉	2K 73	cm	(13.3)	cm	(7.6)	(外)ナデ (内)条痕、指おさえ	5ミリ以下の砂粒含む	暗橙褐色	
12-1	深鉢	DE	SK01						(外)ナデ (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む		
2	深鉢	DE	SK01						(外)ハケメ、ナデ (内)ハケメ	5ミリ以下の砂粒含む		
48-1	深鉢	DE		3K 117?	cm	cm	cm	cm	(外)爪形文 (内)条痕	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
2	深鉢	DE		3K	cm	cm	cm	cm	(外)爪形文 (内)条痕	2ミリ以下の砂粒含む	暗灰褐色	
3	深鉢?	DE		2K 340	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	黄褐色	精製
4	深鉢?	DE		2K 302	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	黄褐色	精製
5	深鉢?	H		2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文 (内)ナデ、工具によるナデ	4ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	精製
6	深鉢?			2K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文 (内)	2ミリ以下の砂粒含む	(外)淡暗褐色 (内)黒暗褐色	
7	深鉢	E		1K 62	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色 (内は黒色化)	
8	深鉢	H		2K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕 (内)条痕	3ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
9	深鉢?	H		2K	cm	(1.9)	cm	cm	(外)ナデ？ (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
49-1	深鉢		トレンチ11	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ケズリ後ナデ?縄文 (内)ケズリ後ナデ?	4ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
2	深鉢?		トレンチ11	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ (内)ミガキ？	1ミリ程度の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)黒褐色	精製
3	深鉢		T18	1K 74	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
4	深鉢		T22	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)茶褐色	
5	浅鉢?		トレンチ11	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ?縄文 (内)ミガキ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗橙褐色 (内)暗灰褐色	精製
6	？	Ⅳ西	ハイカ直上	1K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
7	深鉢		トレンチ11(ベルト)	2K	cm	cm	cm	cm	(外)？ (内)条痕	6ミリ以下の小石含む	茶褐色	
8	深鉢		トレンチ22	茶褐色土?2K	cm	(2.9)	cm	8.8	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	黄茶褐色	記号0
9	深鉢		トレンチ22	茶褐色土?2K	cm	(3.5)	cm	9.1	(外)ナデ (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)灰褐色	記号0
50-1	深鉢	Ⅱ	トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ナデ (内)工具によるナデ？	4ミリ以下の砂粒含む	(外)朱橙色 (内)薄黄褐色	
2	双耳壺	Ⅱ	トレンチ47	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？縄文 (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	精製
3	深鉢	Ⅱ	トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ナデ (内)？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)朱橙色 (内)薄黄褐色	精製
4	双耳壺		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ？ (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む		精製
5	？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕 (内)ミガキ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黒灰色 (内)暗灰褐色	
6	浅鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)？ (内)？	1ミリ程度の砂粒含む	薄黄褐色	
7	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ (内)ミガキ？	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
50-8	深鉢？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	1ミリ以下の砂粒含む	(外)黒褐色 (内)暗灰褐色	
9	深鉢？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	1ミリ以下の砂粒含む	淡橙褐色	
10	深鉢？		T48	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	3ミリ以下の砂粒含む	薄黄褐色	
11	深鉢		T48	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗茶褐色 (内は黒色化)	
12	深鉢？	Ⅱ	T48	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	1ミリ程度の砂粒含む	薄橙褐色	
13	深鉢		T48	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	白褐色	
14	深鉢？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ (内)ミガキ？	1ミリ程度の砂粒含む	(外)朱褐色 (内)暗褐色	
15	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
16	深鉢？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ (内)ミガキ？	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色 (外は暗め)	
17	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ (内)ミガキ？	1ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
18	深鉢	Ⅱ	トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外) (内)工具によるナデ	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
19	深鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)工具によるナデ (内)条痕	3ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
20	深鉢	Ⅱ	トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕、ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)茶褐色	
21	深鉢		トレンチ44	2K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕 (内)工具によるナデ	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
51-1	深鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)工具によるナデ (内)条痕	5ミリ以下の砂粒含む	(外)茶褐色 (内)黄褐色	
2	深鉢	Ⅱ	トレンチ47	2K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕 (内)条痕	3ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)黄褐色	
3	深鉢	H	トレンチ11,48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕、ケズリ (内)条痕	3ミリ以下の砂粒含む	(外)暗橙褐色 (内)暗褐色	
4	深鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ、板状工具ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	黄褐色	
5	深鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ケズリ後ナデ？ (内)工具によるナデ	5ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
52-1	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ？刻目 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	(外)茶褐色 (内)暗褐色	
2	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	薄黄褐色	
3	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
4	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
5	深鉢	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)不明 (内)不明	3ミリ以下の砂粒含む	黄褐色	
6	深鉢？	Ⅱ	T47	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	橙褐色	
7	浅鉢		トレンチ48	2K	cm	cm	cm	cm	(外)刻目文、ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	精製
8	浅鉢	Ⅱ	トレンチ47	2K	cm	(0.8)	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ	1ミリ程度の砂粒含む	黒褐色	精製
9	浅鉢		トレンチ47	2K	cm	(2.4)	cm	cm	(外)不明 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)淡橙褐色 (内)黒褐色	
10	深鉢？		トレンチ48	2K	cm	(2.9)	cm	cm	(外)工具によるナデ? (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	薄黄褐色 (部黒色化)	
53-1	深鉢	Ⅱ	2B	1K	(27.8)	(20.2)	(28.7)	cm	(外)ヘラミガキ (内)ヘラナデ、ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	淡褐色 (外部は黒色化)	
2	深鉢	Ⅱ	2B	1K 542,568	(26.9)	(16.7)	27.0	cm	(外)ナデ (内)棒状工具によるナデ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗橙褐色 (内)淡黄褐色	補修穴？
3	深鉢	Ⅱ	2B	1K 546,566	(42.2)	(24.3)	(42.5)	cm	(外)ケズリ？後ナデ (内)ヘラナデ	3ミリ以下の砂粒含む	暗橙褐色 (大部分が黒色化)	
4	深鉢	Ⅱ	2B 3B	1K	cm	(27.3)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	
54-1	深鉢	Ⅱ	3B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？縄文 (内)ミガキ	3ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
2	？	Ⅱ	B3	1K	cm	cm	cm	cm	(外)？ (内)？	1ミリ以下の砂粒含む	白灰褐色	
3	深鉢		B3	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ？刻目 (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗灰色 (内)薄黄褐色	
4	深鉢	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文 (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗灰褐色	
5	深鉢？	Ⅱ	2A	1K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ミガキ (内)ミガキ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗茶褐色 (内)暗黒灰色	
6	？	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
7	深鉢	Ⅱ	2B	1K 585	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ミガキ (内)ミガキ	3ミリ以下の砂粒含む	白灰色	

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
54-8	深鉢？	Ⅱ	2B	1K 584	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ミガキ、縄文	2ミリ以下の砂粒含む	白灰色	
9		Ⅱ	2B 旧河道T3	1K 北	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	(外)橙褐色 (内)暗褐色	
10	深鉢？		表採	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ？ケズリ後ナデ？ (内)ミガキ？	2ミリ以下の砂粒含む	暗黒褐色	
11	？	Ⅱ	B4	1K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文、ケズリ後ナデ？ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)淡黄褐色	
12	？	Ⅱ	3B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ、縄文、斜格子文 (内)ミガキ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)茶褐色 (内)黒灰色	
13	浅鉢？	Ⅱ	2B T2-3	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文？ (内)ミガキ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)茶褐色	
14	浅鉢	Ⅱ	5C 90	1K	cm	cm	cm	cm	(外)縄文 (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	薄灰褐色	
15	深鉢？	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	茶橙褐色	
16	？	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、縄文 (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	朱橙色(薄化)	
17	？	Ⅱ	B3	2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
18	深鉢	Ⅱ	3B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ？ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
19	浅鉢			2K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	淡橙色	
20	深鉢	Ⅱ	B4	2K 1282	cm	cm	cm	cm	(外)条痕？ナデ？ (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	暗茶褐色	
21	深鉢	Ⅱ	7F	2K	cm	cm	cm	cm	(外) (内)	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
55-1	深鉢	Ⅱ	C3	1K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕？ナデ、刻目 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	暗橙褐色	
2	深鉢	Ⅱ	C3	1K	cm	cm	cm	cm	(外)条痕？刻目文、工具によるナデ？ (内)工具によるナデ？	4ミリ以下の砂粒含む	(外)茶褐色 (内)暗褐色	
3	深鉢？	Ⅱ	5B	1K 46	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)工具によるナデ？	1ミリ程度の砂粒含む	(外)薄褐色 (内)暗褐色	
4	深鉢	Ⅱ	2A	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ、条痕	2ミリ以下の砂粒含む	茶褐色 (上部は黒色化)	
5	深鉢？	Ⅱ	5D	1K 191	cm	cm	cm	cm	(外)？ (内)？	4ミリ以下の砂粒含む	薄橙褐色	
6	深鉢	Ⅱ	5B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)？ (内)？	5ミリ以下の砂粒含む	茶褐色 (外は黒色化)	
7	深鉢	Ⅱ	2B	1K 414,415	(14.9)	(11.0)	(16.3)	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色 (大部分が黒色化)	突帯文、刻目文
8	深鉢	Ⅱ	5B	1K 東側ベルト	cm	cm	cm	cm	(外)ケズリ？ナデ、刻目 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	薄茶褐色	
9	？	Ⅱ	北端 旧河道	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)不明	4ミリ以下の砂粒含む	淡橙褐色	
10	深鉢	Ⅱ	A4	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目、工具によるナデ、沈線 (内)ナデ、ケズリ後ナデ？	3ミリ以下の砂粒含む	薄黄褐色	朱土が付着
11	深鉢	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	茶褐色/黄褐色	
12	深鉢	Ⅱ	5C	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	暗灰色	
13	？	Ⅱ	B3	1K	cm	cm	cm	cm	(外)刻目、ナデ (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
14	深鉢？	Ⅱ	C3	1K 1379	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
15	深鉢？	Ⅱ	15B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	灰茶褐色	
16	深鉢？	Ⅱ	B4	客土	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	
17	深鉢	Ⅱ	B3	1K 1495	(31.0)	(9.0)	(33.2)	cm	(外)ナデ (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
18	深鉢	Ⅱ	客土中	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ？刻目、ななめに沈線 (内)ナデ？	4ミリ以下の砂粒含む	(外)白褐色(内)暗黒褐色	
19	深鉢	Ⅱ	2B	1K 425	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)薄灰褐色 (内)暗茶褐色	
20	深鉢	Ⅱ	A4	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	茶褐色 (外は黒色化)	
21	深鉢	Ⅱ	5C	1K 81	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)不明	4ミリ以下の砂粒含む	暗灰褐色	
22	深鉢	Ⅱ	5C	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、刻目 (内)ナデ、刻目	5ミリ以下の砂粒含む	白灰褐色	
23	深鉢	Ⅱ	C3	1K 1359	cm	cm	cm	cm	(外)刻目、ナデ？ (内)ナデ？	3ミリ以下の砂粒含む	(外)灰褐色 (内)黒褐色	
24	浅鉢？			2K	cm	(1.1)	cm	cm	(外)？ (内)ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)栗褐色 (内)黒褐色	
25	浅鉢？	Ⅱ	B4	2K	cm	(2.0)	cm	cm	(外)ナデ？ (内)ナデ？	1ミリ程度の砂粒含む	暗褐色	
26	浅鉢？	Ⅱ	2B	1K 555	cm	(1.8)	cm	cm	(外) (内)ナデ？	8ミリ以下の小石含む	茶褐色	
27	浅鉢？	Ⅱ	2B	1K	cm	(2.8)	cm	cm	(外)ミガキ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)橙褐色 (内)白橙色	
28	？	Ⅱ	6C	1K	長さ4.1	幅3.5	cm	cm	(外) (内)	2ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	

観察表（弥生土器）

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
6-1	甕	Ⅰ	SI01		(20.4)				(外)ハケメ (内)ミガキ、ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗褐色	
2	甕	Ⅰ	SI01		(20.2)				(外)ハケメ (内)ミガキ、ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	
3	甕	Ⅰ	SI01						(外)ハケメ (内)ハケメ	2ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	列点文
16-1	高坏	Ⅱ	B3SI12	表採 1533 P11層	cm	(5.5)	cm	12.4	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	密1ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	凹条文(9条)
56-1	壷	Ⅱ	B-4-C		cm	(2.6)	cm	cm	(外)ヨコナデ、ミガキ？ (内)ヨコナデ、ミガキ	3ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	
2	壷	Ⅱ	5C	K1 75	(17.6)	(3.2)	(17.6)	cm	(外)ヨコナデ、ミガキ (内)ミガキ	3ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	突帯に刻目
3	直口壷	Ⅱ	B3	1526 1529	(18.9)	(5.2)	(18.9)	cm	(外)ヨコナデ、ハケ後ナデ (内)ヨコナデ、ハケ後ナデ、ケズリ？	3.5ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	
4	壷	Ⅱ	2B	1K 440	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ハケメ後ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	暗褐色／淡橙褐色	凹線文(3条？)
5	壷	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ミガキ (内)ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	(外)淡橙色 (内)淡茶褐色	
6	壷	Ⅱ	2B	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)不明	4ミリ以下の砂粒含む	(外)薄黄褐色 (内)薄黒褐色	凹線文(6条確認)
7	壷		2B	1K 430	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ハケメ後ナデ？	3ミリ以下の砂粒含む	(外)明橙褐色 (内)白茶褐色	凹線文(2条)
8	壷			37	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	黄褐色	羽状文 凹線文(5条)
9	甕	Ⅱ	A2	1652	(31.0)	(5.2)	(31.0)	cm	(外)ハケメ後ナデ (内)ハケメ後ナデ、指頭圧痕	2.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黄褐色 (内)明黄褐色	刻目
10	甕	Ⅱ	B3	1523 1527 1532	(30.2)	(11.0)	(30.2)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ハケメ後ナデ、指頭圧痕	3ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	
11	甕	Ⅱ	B3	1526	(33.4)	(10.2)	(33.4)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ハケメ	2ミリ以下の砂粒(1cmの石)	淡黄褐色	
12	甕	Ⅱ	2B	1K 618	cm	cm	cm	cm	(外)ハケメ後ナデ？ (内)ハケメ後ナデ？	3ミリ以下の砂粒含む	(外)黄灰褐色 (内)橙褐色	
57-1	甕		C4	574	(21.2)	(3.2)	(21.2?)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)不明	4.5ミリ以下の砂粒含む	(外)黒褐色 (内)明黄褐色	条痕？
2	甕	Ⅰ	溝上面		(29.8)	(3.4)	(29.8)	cm	(外)ヨコナデ、ナデ、ハケメ？ (内)ヨコナデ、ナデ、ハケメ	4ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	
3	甕	Ⅱ	2B	1K	(24.4)	(2.2)	(24.4)	cm	(外)刻目、ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ハケメ後ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	淡黄褐色	刻目
4	甕	Ⅱ or Ⅲ	1N 2R		(13.6)	(2.7)	(13.6)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ	3ミリ以下の砂粒含む	暗黄褐色(口縁部は黒色)	刻目
5	甕	Ⅱ	B3	黒土	(24.8)	cm	(24.8)	cm	(外)ナデ、ヨコナデ (内)ナデ、ハケメ後ナデ？	2.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黄褐色 (内)黄褐色	刻目
6	甕	Ⅱ	A3	1641	(21.2)	cm	(21.2)	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)明黄褐色	刻目 貝殻による条痕？
7	甕	Ⅱ	2北	1K	(26.3)	(3.1)	(26.3)	cm	(外)ハケメ後ナデ、ヨコナデ (内)ハケメ後ナデ？ヨコナデ	3ミリ以下の砂粒含む	(外)明黄褐色 (内)暗黄褐色	刻目、板目
8	甕	Ⅱ	2B	1K	(18.8)	(1.2)	(18.8)	cm	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	2.5ミリ以下の砂粒含む	暗黄褐色	刻目
9	甕	Ⅱ	2B		(30.1)	(2.6)	(30.1?)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ？ (内)ヨコナデ、ケズリ後ナデ？	3ミリ以下の砂粒含む	茶褐色(外一部暗灰褐色)	刻目
10	甕	Ⅱ	2A	1K	(29.8)	(2.6)	(29.8?)	cm	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	2.5ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	刻目 工具痕
11	甕	Ⅱ	4B 3B	1K	(28.8)	(1.9)	(28.8)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ、ナデ (内)ヨコナデ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黄褐色 (内)暗黄褐色～暗褐色	刻目
12	甕	Ⅱ	B4	1101 1222	(35.7)	(12.5)	(35.7)	cm	(外)刻目文、ヨコナデ、板ナデ (内)ヨコナデ、ハケメ後ナデ	2.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)暗黄褐色～暗褐色	刻目
13	甕	Ⅱ	5B	K1	(15.0)	(4.0)	(15.0)	cm	(外)ヨコナデ、ミガキ？刻目 (内)ヨコナデ	4ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	刻目
14	甕	Ⅱ		排土	(26.3)	(2.3)	(26.3)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ハケメ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)淡黄褐色 (内)明黄褐色	
15	甕	Ⅱ	A4		(21.4)	(2.8)	(21.4)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ後ナデ (内)ヨコナデ	3.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黄褐色～暗灰褐色 (内)黄褐色	
16	甕	Ⅱ	5C	6	(19.6)	(4.3)	(19.6)	cm	(外)ヨコナデ、ナデ、ハケメ？ (内)ヨコナデ、ナデ、ケズリ？	3.5ミリ以下の砂粒含む	暗黄褐色	沈線3条
17	甕		5C	1K	(25.2)	(4.2)	(25.2?)	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ハケメ	4ミリ以下の砂粒含む	暗黄褐色	刻目 9条の凹線文
58-1	壷	Ⅱ(Ⅳ?)	6C	1K	cm	cm	cm	(6.0)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	2ミリ以下の砂粒含む	暗黄褐色	
2	壷	Ⅱ	2A	1K	cm	(3.5)	cm	(7.6)	(外)ナデ？ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	(外)明黄褐色 (内)黄褐色	

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
58-3	壷	Ⅱ	2A	1K 620,621	cm	cm	cm	(6.1)	(外)ハケメ、ナデ (内)ハケメ、ナデ	3.5ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色(底外は暗黄褐色)	
4	壷	Ⅱ	C3	1588	cm	(6.6)	cm	(9.5)	(外)ハケメ (内)ナデ	4ミリ以下の砂粒含む	(外)暗黄褐色 (内)暗黄褐色~明黄褐色	
5	壷	Ⅱ	2B	1K 608	cm	(5.2)	cm	(10.9)	(外)ハケメ (内)ナデ、指頭圧痕	2.5ミリ以下の砂粒含む	黄褐色	
59-1	直口壷		トレンチ9		(25.6)	(4.7)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	(外)淡黄褐色 (内)暗黒灰色	浮文
2	広口壷	Ⅱ	2B T3-4	1K	(23.9)	(2.7)	cm	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	黄褐色	凹線文(1条) 波状文
3	壷	Ⅱ	5C	1K 104	(19.8)	(1.5)	cm	cm	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	1ミリ程度の砂粒含む	淡黄褐色	凹線文(3条) 波状文
4	広口壷	Ⅱ	2B	1K 446,448	(27.7)	(11.0)	cm	cm	(外)ハケメ、ナデ (内)ハケメ？ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	(外)淡黄褐色 (内)淡橙褐色	羽状文 凹線文(2条,1条?)
5	広口壷	Ⅱ	2B	1K 449,271	cm	cm	cm	cm	(外)ハケメ (内)ケズリ後ナデ？	2ミリ以下の砂粒含む	(外)淡茶褐色 (内)淡橙褐色	列点文 羽状文
6	甕	Ⅱ	2B	1K 433,483	(17.0)	(10.2)	cm	cm	(外)ヨコナデ、ナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ナデ、ハケメ?	1ミリ程度の砂粒含む	黄褐色 (黒色化部有)	列点文
7	甕	Ⅱ	2B						ハケメ	1ミリ程度の砂粒含む	明黄褐色	ヘラ描き？
8	甕	Ⅱ	2B	1K 422,424	(23.8)	(6.2)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	淡黄褐色	
9	壷	Ⅱ	2B	1K 482	(22.0)	(5.1)	cm	cm	(外)ヨコナデ、ナデ、タテハケ後ナデ (内)ヨコナデ、ナデ、指おさえ	密2ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)明黄褐色	
10	壷	Ⅱ	5-D-4	2K	(22.8)	(5.1)	cm	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ後ナデ (内)ヨコナデ、ナデ	密1.5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)明黄褐色	2条の凹線文
60-1	甕	Ⅱ	2B	1K	(20.0)	(6.3)	(21.0)	cm	(外)ハケメ、ヨコナデ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	7ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)明黄褐色	貝殻条痕
2	壷	Ⅱ	2B	1K 521	(22.0)	(7.2)	cm	cm	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ハケメ後ナデ	5ミリ以下の砂粒含む	(外)暗褐色 (内)明黄褐色	2条の凹線文
3	甕	Ⅱ	2B	1K 425	(30.0)	(4.3)	cm	cm	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	やや粗 2.5ミリ以下の砂粒	(外)暗赤橙色 (内)明黄褐色	凸帯、凹線? 貼付突帯+ヘラ刻目
4	甕	Ⅱ	5D	1K	(29.8)	(7.7)	cm	cm	(外)ナデ、ハケメ後ナデ (内)ナデ	密 1.5ミリ以下の砂粒	(外)暗褐色 (内)暗黄褐色	凹線文(1条) 貼付突帯+ヘラ刻目
5	甕	Ⅱ	2B	1K	(19.8)	(7.3)	cm	cm	(外)ヨコナデ、タテハケメ後ヨコナデ (内)ヨコナデ、指頭圧痕	2.5ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	塩町系 凹線文、ヘラ刻目(2条,2条)
6	鉢		2B		cm	(3.9)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	3ミリ以下の砂粒含む	暗橙褐色(黒色化)	刻目文
7	高坏	Ⅱ	2B T2-3	1K	(24.8)	(4.0)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	(外)薄黄灰色 (内)暗黒褐色	刻目文
8	高坏	Ⅱ	2B	1K 468	(19.9)	(3.7)	cm	cm	(外)ナデ、ミガキ (内)ナデ、ハケメ	1ミリ以下の砂粒(密)含む	淡黄褐色(外は黒色化)	刻目文 上面から側面に貫通穴
9	高坏	Ⅱ	2B 2TX	1K 314,315	26.8	(11.5)	cm	cm	(外)ヘラミガキ、ナデ (内)ナデ、ケズリ	1ミリ大の石英、長石含む	(外)にぶい橙色 (内)褐灰色	刻目、凹線文 櫛状工具による水線
10	高坏	Ⅱ	2B 旧道T3 T2-3		cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、指頭圧痕？ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	暗灰色	凹線文(6条?)円盤充填痕
11	高坏	Ⅱ	2B	1K 538	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ、ミガキ (内)不明	2ミリ以下の砂粒含む	(外)橙褐色 (内)灰褐色	刻目文
12	高坏	Ⅱ	2B T2-3	1K	(18.4)	(3.6)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	淡黄色	凹線文(6条)
13	高坏	Ⅱ	2B	1K 268	cm	cm	cm	cm	(外)ヨコナデ、ミガキ、ハケメ (内)ヨコナデ、不明	2ミリ以下の砂粒含む	(外)灰褐色 (内)黄褐色	凹線文(3条?確認)
14	高坏	Ⅱ	5B	1K 422,424	(9.6)	(8.5)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	凹線文 5条？6条)
15	?	Ⅱ	2A	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	薄橙色	羽状文
16	?	Ⅱ	5C	1K	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	茶褐色	突帯文 3条?確認
17	?	Ⅳ		1K 60	cm	cm	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	灰褐色	羽状文 突帯文(2条確認)
18	有孔土製品	Ⅱ	2B	1K 317	cm	(5.6)	6.1	cm	(外)ハケメ、ナデ (内)ハケメ、ナデ	1ミリ程度の砂粒含む	茶褐色(外面は黒色化)	
61-1	壷		トレンチ11		(22.8)	(7.0)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ、ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	薄黄灰色	刻目(4条、5条?)
61-2	甕	Ⅱ	2B	1K 296	(21.5)	(4.1)	cm	cm	(外)ナデ (内)ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	暗橙褐色	

観察表（須恵器）

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
20-1	坏蓋	Ⅱ	SI04	163	8.6	2.8	cm	cm	(外)ヘラ切り後ナデ、回転ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密	暗灰色	
2	高坏	Ⅱ	SI04 5B	K1 191,314	14.1	9.4	14.4	8.5	(外)回転ナデ、静止ナデ、回転ヘラケズリ (内)回転ナデ、静止ナデ	密 2ミリ以下の砂粒	(外)褐灰色 (内)薄灰色	
27-1	坏蓋	Ⅱ	SI05	71,79 211,212	10.2	現在(3.6)	10.3	cm	(外)ヘラ切り、ナデ、回転ナデ (内)ナデ、回転ナデ	密 3ミリ以下の砂粒	青灰色	
2	坏蓋	Ⅱ	SI05	279	10.2	4.2	10.4	cm	(外)ヘラ切り、ナデ、回転ナデ (内)回転ナデ	密 3ミリ以下の砂粒	淡青灰色 (内はやや黄)	

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
27-3	坏　蓋（蓋）	Ⅱ	SI05	281	10.8	4.1	11.0	cm	(外)ヘラ切り後ナデ、回転ナデ (内)ナデ、回転ナデ	密 4ミリ以下の砂粒	白灰色	内面にヘラ記号
4	坏	Ⅱ	SI05	284	10.3	3.5	12.3	cm	(外)回転ナデ、ヘラ切り、ナデ (内)回転ナデ	密 2.5ミリ以下の砂粒	淡青灰色	外面に自然釉
5	坏身	Ⅱ	SI05	421	10.0	3.5	12.3	cm	(外)回転ナデ (内)回転ナデ、ヨコナデ	密	(外)自然釉のため淡灰色 (内)青灰色	
6	坏身	Ⅱ	SI05	276	9.1	3.6	11.4	cm	(外)ヘラ切り後ナデ、回転ナデ、ヘラ記号 (内)回転ナデ、ナデ	密 0.5～1ミリの長石	淡黄灰色～青灰色	
7	坏身	Ⅱ	SI05	415	9.4	3.2	11.9	cm	(外)ヘラ切り、回転ナデ (内)回転ナデ、ヘラ記号	密 5ミリ以下の砂粒	淡青灰色	
8	坏身	Ⅱ	SI05	277	9.7	3.4	11.9	cm	(外)ヘラ切り、ナデ、回転ナデ (内)回転ナデ	密 2ミリ以下の長石	青灰色	
9	坏身	Ⅱ	SI05	431	10.2	3.5	12.4	3.9	(外)回転ナデ、ヘラ切り後ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密 3ミリ以下の砂粒	黄灰色	
10	高坏	Ⅱ	SI05	280	14.2	10.1	14.3	8.8	(外)回転ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密 1～2ミリの長石	青灰色	内面に重ね焼きの跡
11	高坏	Ⅱ	SI05	410	13.0	8.6	14.4	8.5	(外)回転ナデ、ヘラ切り (内)回転ナデ、ナデ	密 6ミリ以下の砂粒	青灰色～黄灰色	
12	高坏	Ⅱ	SI05	31	13.8	9.0	14.1	8.0	(外)回転ナデ、ヘラ切り、回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	密 4ミリ以下の砂粒	青灰色	外面に自然釉重ね焼き
13	高坏		SI05	278	13.6	8.9	13.8	9.5	(外)回転ナデ (内)回転ナデ、ヨコナデ	1～2ミリの砂粒含む	(外)青灰色 (内)淡青灰色	
14	高坏	Ⅱ	SI05	414	14.4	(5.6)	cm	(14.5)	(外)回転ナデ、ヘラ切り (内)回転ナデ、ナデ	密 1～2ミリの長石	淡青灰色	内面にス付着
15	高坏	Ⅱ	SI05	314,588 127,271	(14.6)	(6.8)	14.7	cm	(外)回転ナデ、ヘラ切り、ヘラによる穴 (内)ナデ、回転ナデ	密 2.5ミリ以下の砂粒	青灰色	
16	高坏		SI05	206 640	(13.1)	現在 (4.8)	13.4	cm	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密 2ミリ以下の砂粒	青灰色	
17	高坏	Ⅱ	SI05	197	(11.7)	(4.0)	12.0	cm	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密 1ミリ以下の砂粒	青灰色	
18	高坏	Ⅱ	SI05	146 326	cm	現在 1.3	cm	9.3	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密 4ミリ以下の砂粒	青灰色	NO.161と同一か
37-1	坏蓋		SI08	7.8	8.8	3.3	8.9	cm	(外)ヘラケズリ、ナデ、回転ナデ (内)回転ナデ、ナデ、ヘラ記号	密	暗灰色	
2	坏身	Ⅱ	SI08	1黒NO. 6	8.5	3.3	10.9	cm	(外)回転ナデ、ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密	灰色	焼成やや不良
39-1	高坏	Ⅱ	SI09	1黒	15.0	8.1	cm	9.3	(外)回転ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密 0.5～2ミリ大の長石	灰色	内面に重ね焼きの跡
2	高坏	Ⅱ	2B (SI09近辺)		cm	cm	cm	cm	(外)回転ナデ (内)ナデ	密	灰色	
63-1	蓋　坏（蓋）	Ⅱ	B3	K1	(12.1)	(2.5)	(12.6)	cm	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	灰色	
2	高坏	Ⅱ	2B T2-3	1K	(9.0)	(3.4)	(9.2)	cm	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密 1ミリ以下の砂粒	灰黄色	
3	高坏	Ⅱ		客土 285	cm	(2.5)	cm	(7.7)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	灰色	
4	高坏	Ⅱ	C3	1320	cm	(3.9)	cm	(8.6)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	灰色	
5	高坏	Ⅱ	6C	1K 159,172	cm	(6.5)	cm	(7.8)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ、ナデ	密	灰色	
6	高坏	Ⅱ	5C	K1 88	cm	cm	cm	cm	(外)回転ナデ (内)ナデ	密	オリーブ灰色	
7	高坏		D4	765	cm	(3.5)	cm	(8.6)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	灰色	
8	高坏	Ⅱ		2K	cm	(2.9)	cm	(10.2)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	灰色	

観察表（土師器）

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径	調整	胎土	色調	備考
20-3	坏	Ⅱ	SI04	8	12.9	5.4	cm	cm	(外)ハケメ、ナデ、ヨコナデ (内)ハケメ、ナデ、ヨコナデ	石英、長石、雲母含む	暗褐色	
4	甕	Ⅱ	SI04 かまど内		19.6	27.2	26.0	1.0	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
5	甕	Ⅱ	SI04	276,278 207,342 381,382他	20.4	(21.8)	25.1	cm	(外)ナデ、ヨコナデ (内)ヨコナデ、ヘラケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	明黄褐色	
21-1	甕	Ⅱ	SI04	278,299 392,394	21.0	31.6	28.0	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ、ナデ (内)ナデ、ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	淡褐色	くぼみあり
2	甕	Ⅱ	SI04	300 302 392	22.2	29.6	28.6	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ナデ、ケズリ	1.5cm以下の小石含む	橙褐色	
22-1	甕	Ⅱ	SI04	299 329	28.7	30.0	31.4	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ、指ナデ? (内)ヨコナデ、ケズリ	8ミリの小石含む	黄橙色	凹凸あり
2	甕	Ⅱ	SI04 東壁		27.4	32.3	31.1	cm	(外)ヨコナデ、ハケメ (内)ヨコナデ、ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	当て具跡?(内)
28-1	甕	Ⅱ	SI05	417	13.9	13.5	14.7	cm	(外)ナデ、ハケメ (内)ナデ、ケズリ	1ミリ程度の砂粒含む	(外)淡褐色(内)赤褐色	
2	甕	Ⅱ	SI05	416	12.6	15.0	16.4	cm	(外)ナデ、ハケメ (内)ナデ、ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	淡黄茶褐色	

挿図	器種	区	遺構	層位・取上No.	口径	器高	最大径	底径		調整	胎土	色調	備考
28-3	甕	Ⅱ	SI05	432	21.3	(22.7)	27.8		cm	(外)ハケメ?ヨコナデ,ナデ (内)ヨコナデ,ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	(外)橙褐色(内)黒灰褐色	
4	甕	Ⅱ	SI05	392他	24.0	27.1	28.3		cm	(外)ヨコナデ,ハケメ (内)ヨコナデ,ナデ,ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	淡褐色	
5	甕	Ⅱ	SI05	396	20.2	24.5	33.0		cm	(外)ナデ,ハケメ (内)ナデ,ケズリ	1cm程度の小石含む	淡黄褐色	
6	甕	Ⅱ	SI05	394	(17.8)	(11.1)			cm	(外)ヨコナデ,ハケメ (内)ヨコナデ,ケズリ	6ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
29-1	甕	Ⅱ	SI05	393	18.5	23.1	23.1		cm	(外)ハケメのちナデ (内)ヨコナデ,ケズリ	2cm程度の小石含む	(外)赤褐色 (内)淡褐色	
2	甕	Ⅱ	SI05	443	20.7	30.0	26.1		cm	(外)ヨコナデ,ナデ,ハケメ? (内)ヨコナデ,ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
3	甕	Ⅱ	SI05	436	18.7	28.3	26.2		cm	(外)ヨコナデ,ハケメ (内)ヨコナデ,ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
4	甕	Ⅱ	SI05	478	(18.8)	30.4	25.2		cm	(外)ナデ,ケズリ (内)ナデ,ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	淡褐色(白色化)	
5	甕	Ⅱ	SI06	45	20.6	27.3	25.1		cm	(外)ヨコナデ,ハケメのちナデ (内)ヨコナデ,ケズリ不明	4ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
2	甕	Ⅱ	SI06	52	20.0	28.9	27.2		cm	(外)ヨコナデ,ハケメ (内)ヨコナデ,ナデ,ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
37-3	甕	Ⅱ	SI08	12	22.3	(21.0)	24.4		cm	(外)ヨコナデ,ハケメ後ナデ? (内)ヨコナデ,ケズリ	2ミリ以下の砂粒含む	赤褐色	
4	甕	Ⅱ	SI08	2	22.6	27.4	26.6		cm	(外)ヨコナデ,ナデ (内)ヨコナデ,ヘラケズリ	3.5ミリ以下の砂粒含む	(外)明黄褐色~淡赤橙色 (内)明黄褐色	
5	甕	Ⅱ	SI08		14.4	(15.0)	14.7		cm	(外)ヨコナデ,ハケメのちナデ (内)ヨコナデ,ケズリ	1ミリ程度の砂粒含む	橙褐色	
6	甕	Ⅱ	SI08	58,55 52,50 54	21.5	27.3	25.4		cm	(外)ハケメ後ナデ? (内)ナデ,ケズリ	3ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
39-1	甕	Ⅱ	SI09	16	16.2	20.8	20.0		cm	(外)ヨコナデ,ハケメ後ナデ? (内)ナデ,ケズリ	2ミリ以下の砂粒含む	橙褐色	
63-9	甕(小)	Ⅱ	2B	1K 396	(8.8)	(9.0)	(13.4)		cm	(外)ナデ(粗い) (内)ナデ(粗い)	2ミリ程度の砂粒含む	(外)橙褐色 (内)茶褐色	
10	甕		5C	1K 33	(12.0)	(11.6)	(16.2)		cm	(外)ヨコナデ,ナデ,タタキ (内)ヨコナデ,ナデ,ケズリ	5ミリ以下の砂粒含む	濃橙色	
64-1	皿	Ⅱ	2B 旧道 T1-2	98?	cm	(0.9)	cm		cm	(外)回転ナデ,細切不明 (内)回転ナデ	2ミリ以下の砂粒含む	薄橙褐色	かわらけ
2	皿	Ⅱ		客土 272	cm	(1.1)	cm		cm	(外)回転細切,ナデ (内)回転ナデ,ナデ	1ミリ以下の砂粒含む	淡橙褐色	かわらけ

観察表（金属器）

挿図No.	器種	区	遺構	層位・取上No.	長さ	幅	厚さ		備考
22-3	刀子	Ⅱ	SI04C		(6.0)	cm	cm	cm	はばきあり1.6×0.7×0.9
22-4	鉄針	Ⅱ	SI04	353	11.6	0.35	0.35	孔径0.1	断面　方形中空
29-5	穂積具	Ⅱ	SI05	355+c2層	たて2.2	よこ8.2	0.1～0.2	cm	接合
6	不明	Ⅱ	SI05	灰色粘土	(1.6)	(1.4)	0.45	cm	断面丸形
37-7	不明	Ⅱ	SI08	1	5.4	1.0	cm	cm	ソケットあり工具か？

観察表（石製品）

挿図No.	種別	区	遺構	層位・取上No.	長径	短径	厚さ	重量	備考
65-1	スクレイパー				8.65	3.5	0.9	23.0 g	
2	楔形石器				3.25	2.3	1.0	3.9 g	
3	石包丁				7.6	6.2	0.6	43.0 g	
4	磨製石斧	D		91	(7.4)	5.45	3.7	228.9 g	
5	石錘	Ⅱ	A3A4	客土	4.5	3.1	1.9	31.9 g	
6	石錘	今田郎後			7.2	5.0	1.7	93.7 g	
7	石錘	DE		97	4.9	4.65	2.0	67.5 g	
8	打製石斧				9.7	7.8	1.9	136.1 g	
9	磨製石斧				14.35	5.9	1.3	184.3 g	
10	磨石	Ⅱ	B3	1479	10.5	11.3	3.6	683.8 g	
11	凹石	Ⅱ	A5		9.8	11.6	4.7	854.3 g	

観察表（土製品）

挿図No.	種別	区	遺構	層位・取上No.	長径	短径	厚さ	備考
62-1	人面土器	Ⅱ		1黒	(2.7)		(1.1)	
2	人面土器	Ⅱ		1黒	(4.0)		(1.0)	62-1と同一個体か

写真図版

小丸遺跡調査前状況

カラー図版1

カラー図版2

小丸遺跡全景

Ⅰ・Ⅲ区完掘状況

カラー図版4

Ⅱ・Ⅳ区完掘状況

SI04遺物出土状況（北から）

SI05遺物出土状況（北から）

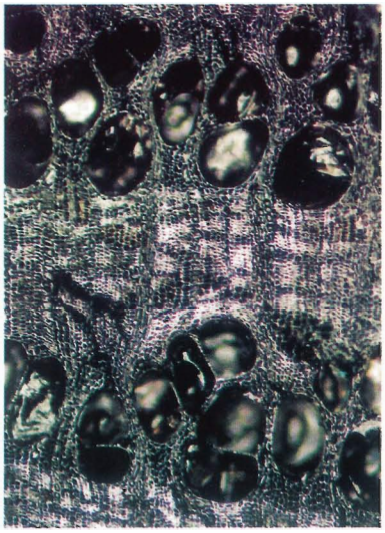
カラー図版6

SI04出土遺物

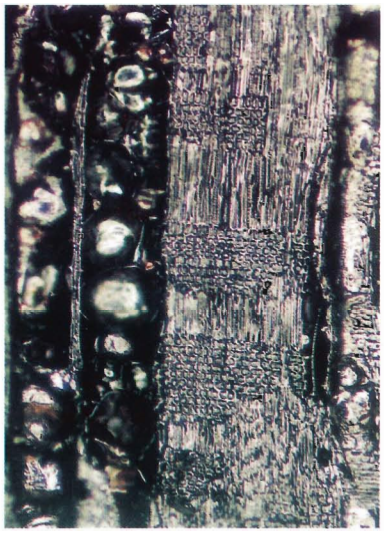
SI05出土遺物

カラー図版8

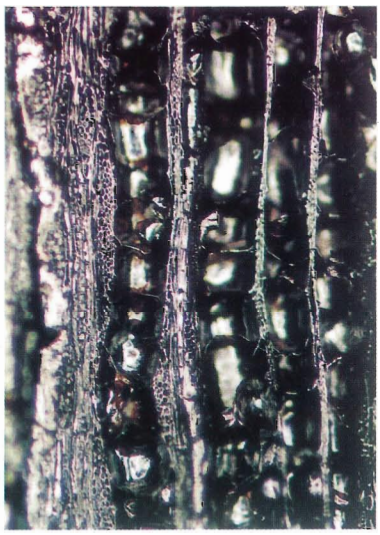
小丸遺跡の炭化材Ⅰ



横断面 ——— ：0.4mm

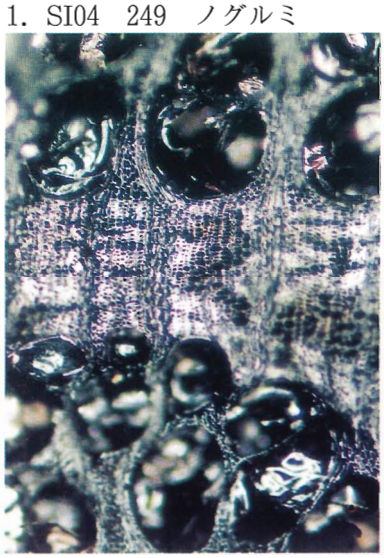


放射断面 ——— ：0.4mm



接線断面 ——— ：0.4mm

1．SI04　249　ノグルミ

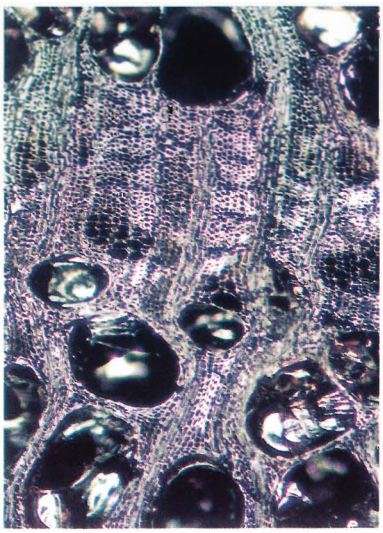


横断面 ——— ：0.4mm

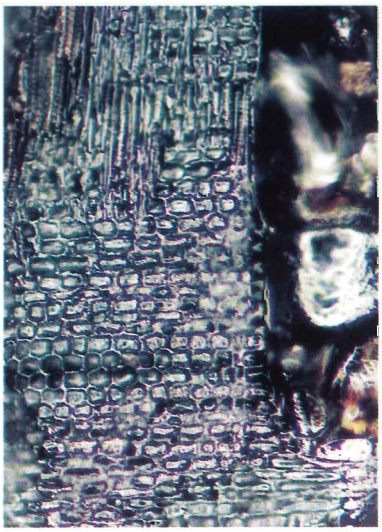
放射断面 ——— ：0.2mm

接線断面 ——— ：0.2mm

2．SI04　263　ノグルミ



横断面 ——— ：0.4mm



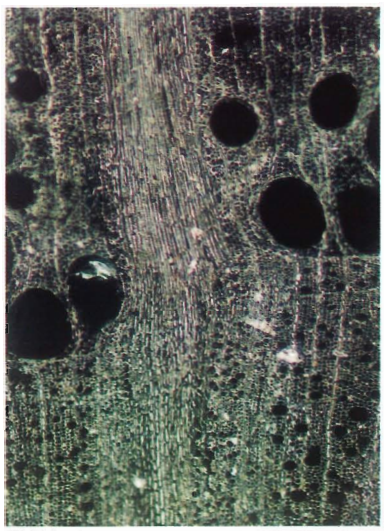
放射断面 ——— ：0.2mm

接線断面 ——— ：0.4mm

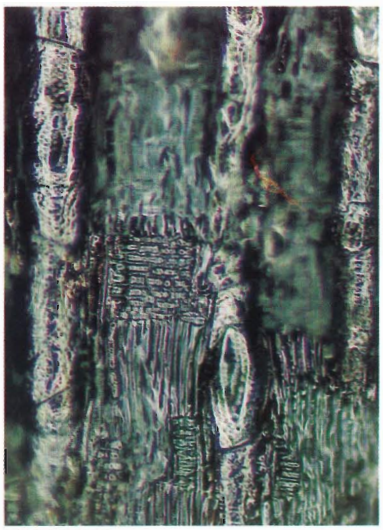
3．SI08　22　ノグルミ

小丸遺跡出土炭化材顕微鏡写真(1)

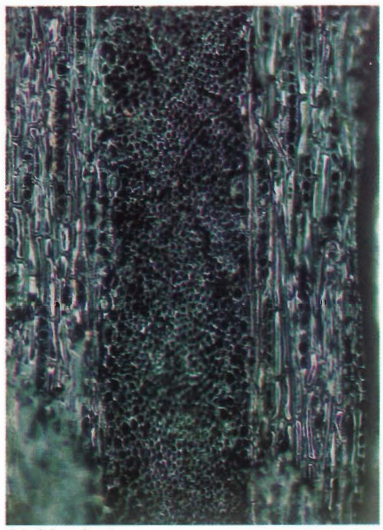
小丸遺跡の炭化材Ⅱ



横断面 ——— ：0.4mm

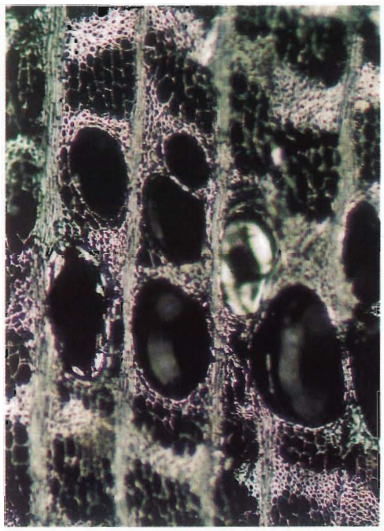


放射断面 ——— ：0.2mm

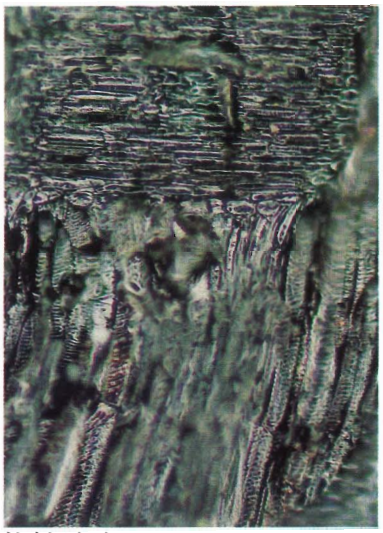


接線断面 ——— ：0.2mm

4．SI04　290　コナラ属コナラ節



横断面 ——— ：0.4mm



放射断面 ——— ：0.2mm

接線断面 ——— ：0.2mm

5．SI04　396　ケヤキ

横断面 ——— ：0.4mm

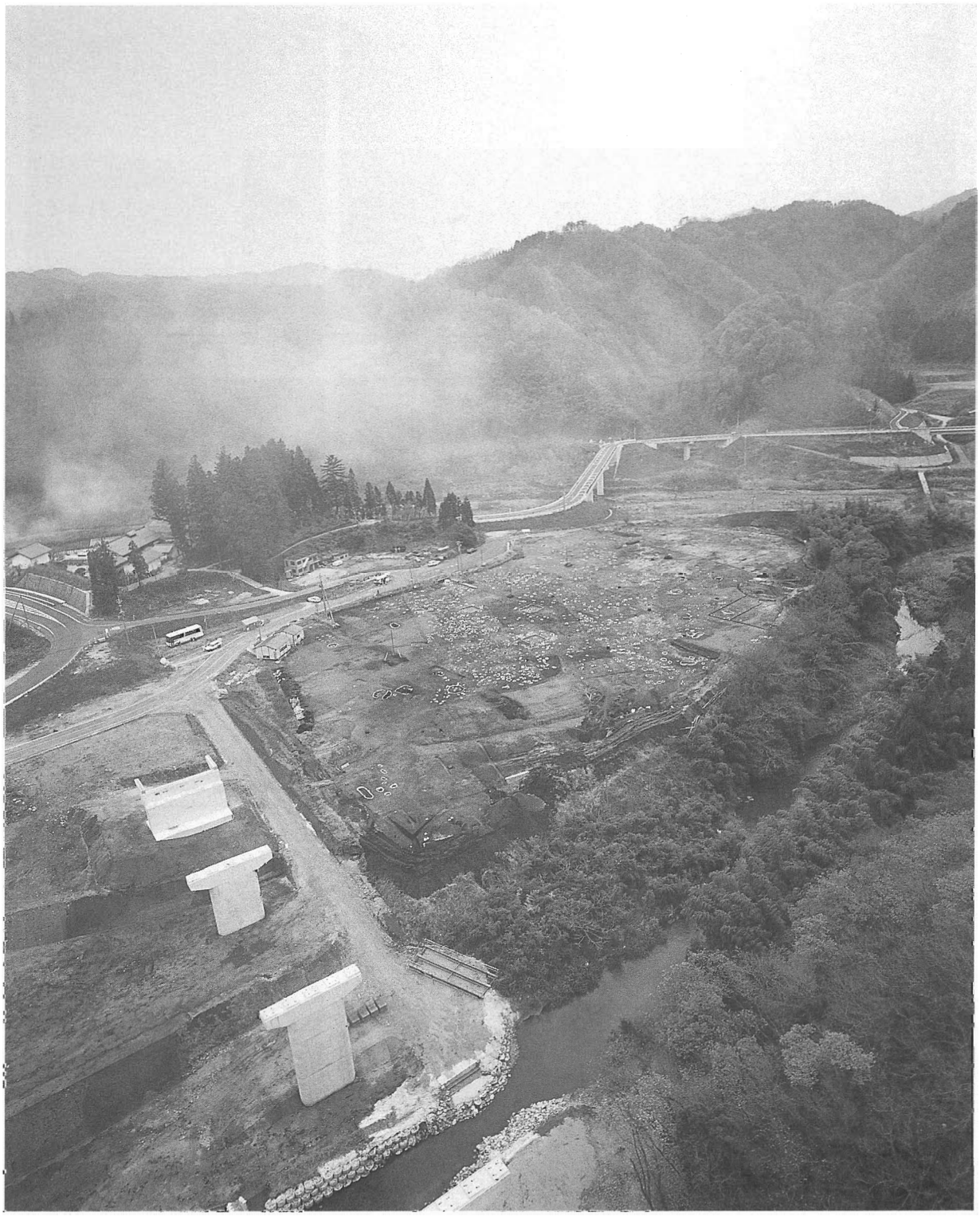
放射断面 ——— ：0.2mm

接線断面 ——— ：0.2mm

6．SI08　24　ミズキ属

小丸遺跡出土炭化材顕微鏡写真(2)

図版1



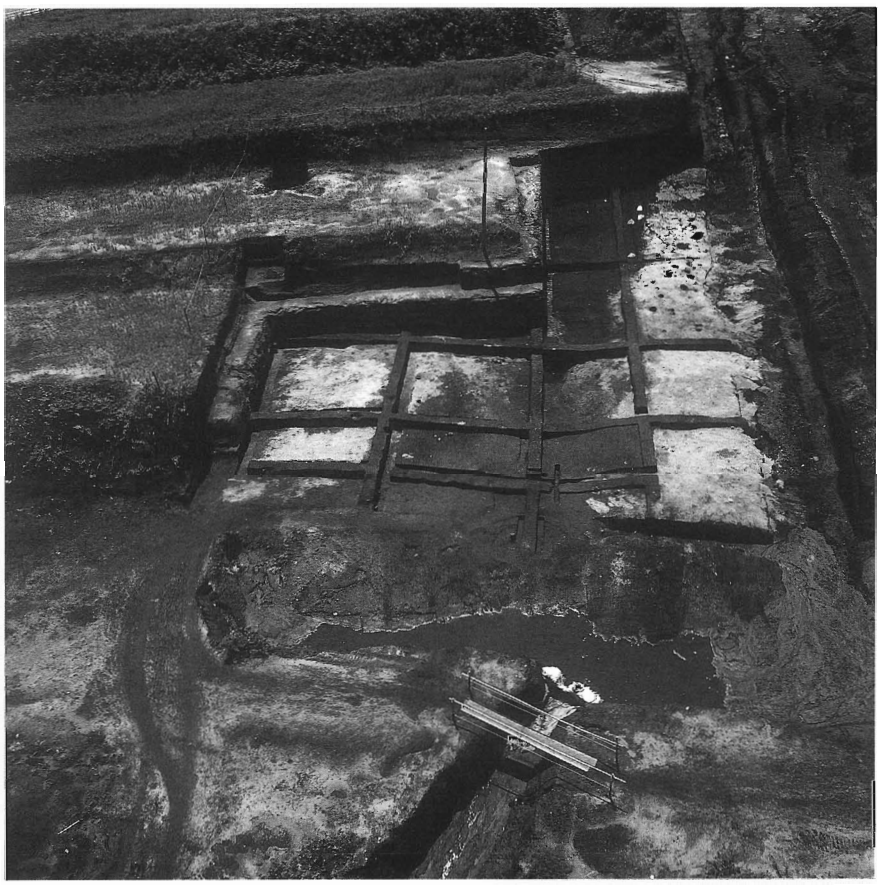
Ⅱ・Ⅳ区全景

小丸遺跡調査前状況

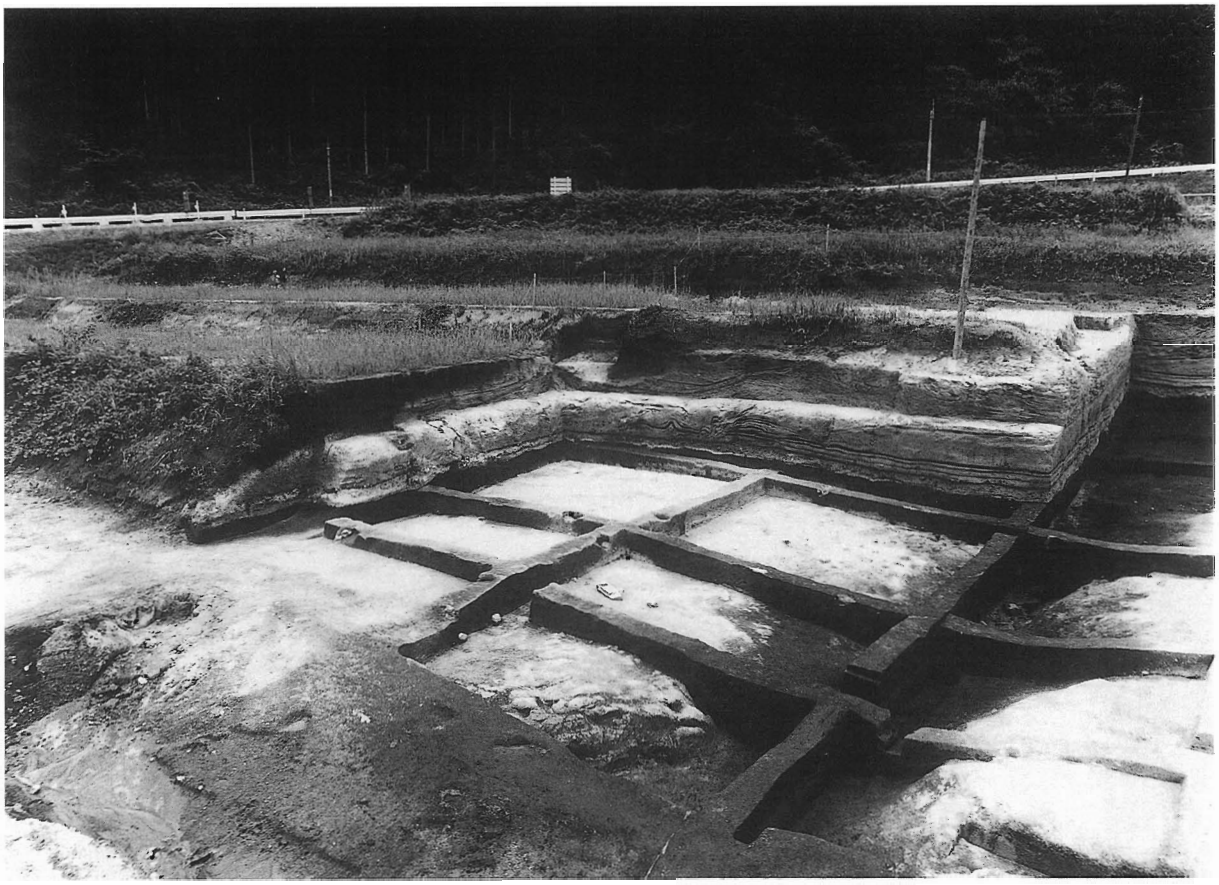
Ⅱ区調査状況

図版3

Ⅱ区完掘状況



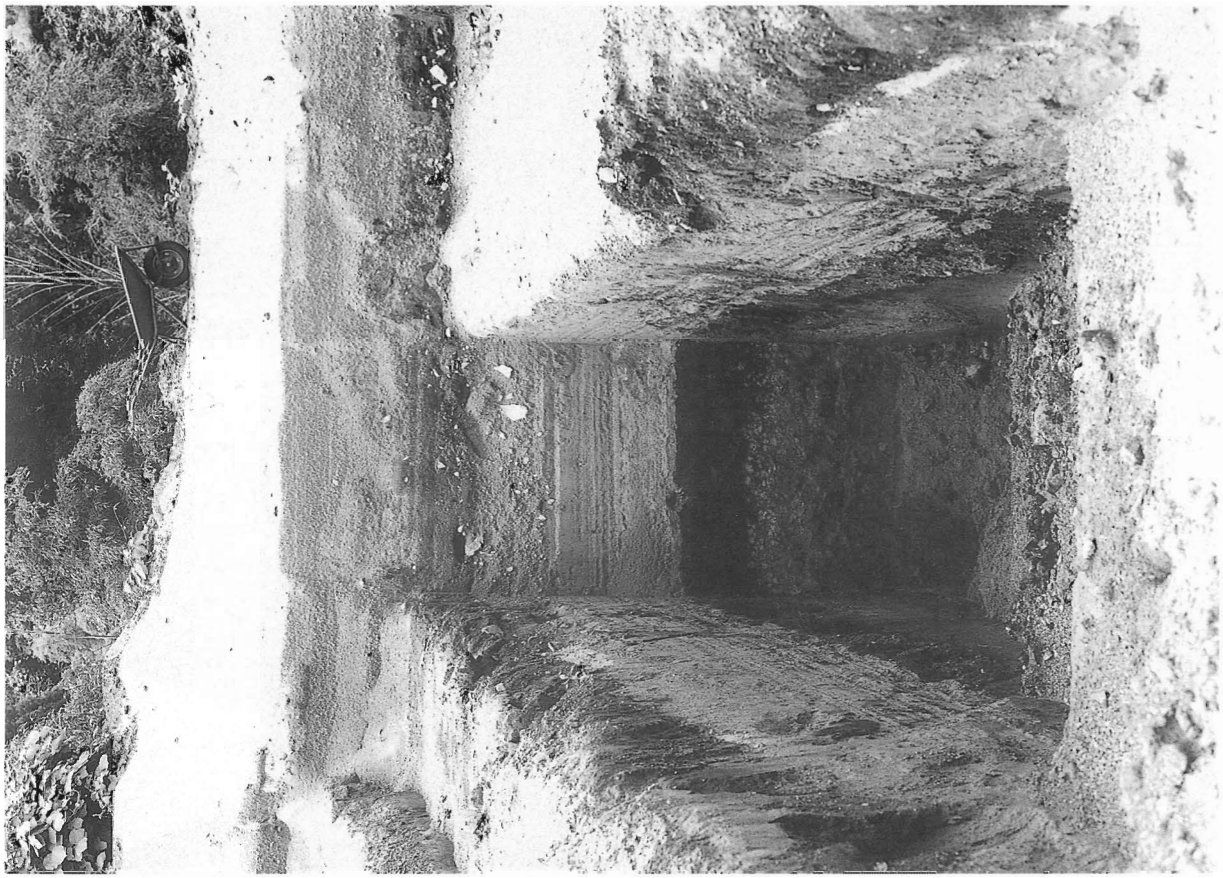
Ⅰ・Ⅲ区第2黒色土層除去状況



Ⅰ・Ⅲ区第2黒色土層除去状況

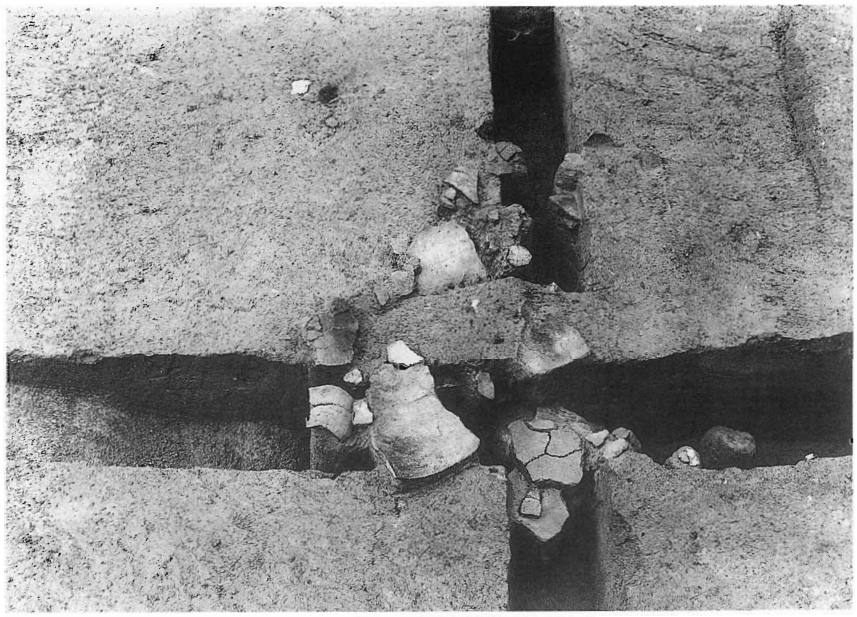
Ⅰ区第1ハイカ除去状況

図版5

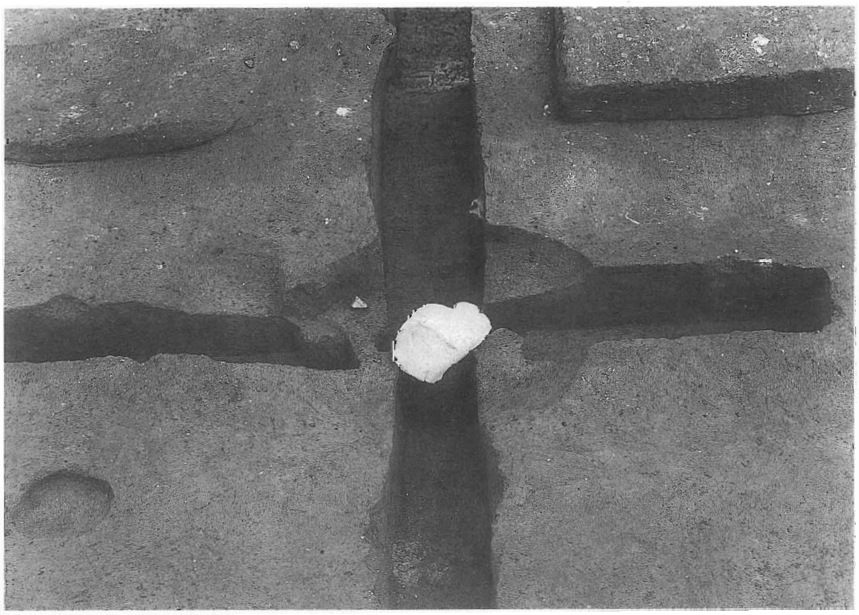


Ⅳ区土層

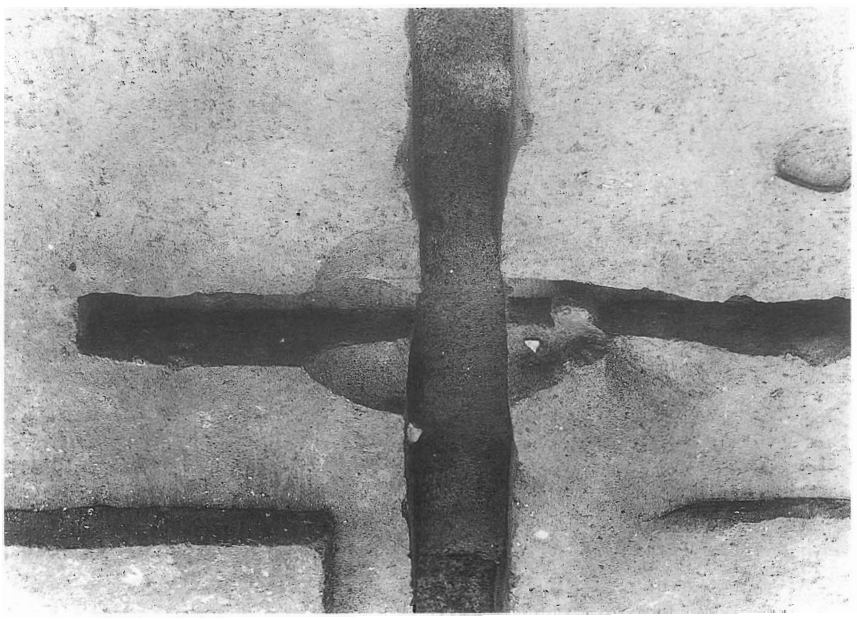
Ⅰ区土層



屋外炉検出状況



屋外炉土器除去状況



屋外炉完掘状況

図版7

SK01遺物出土状況

SK01完掘状況

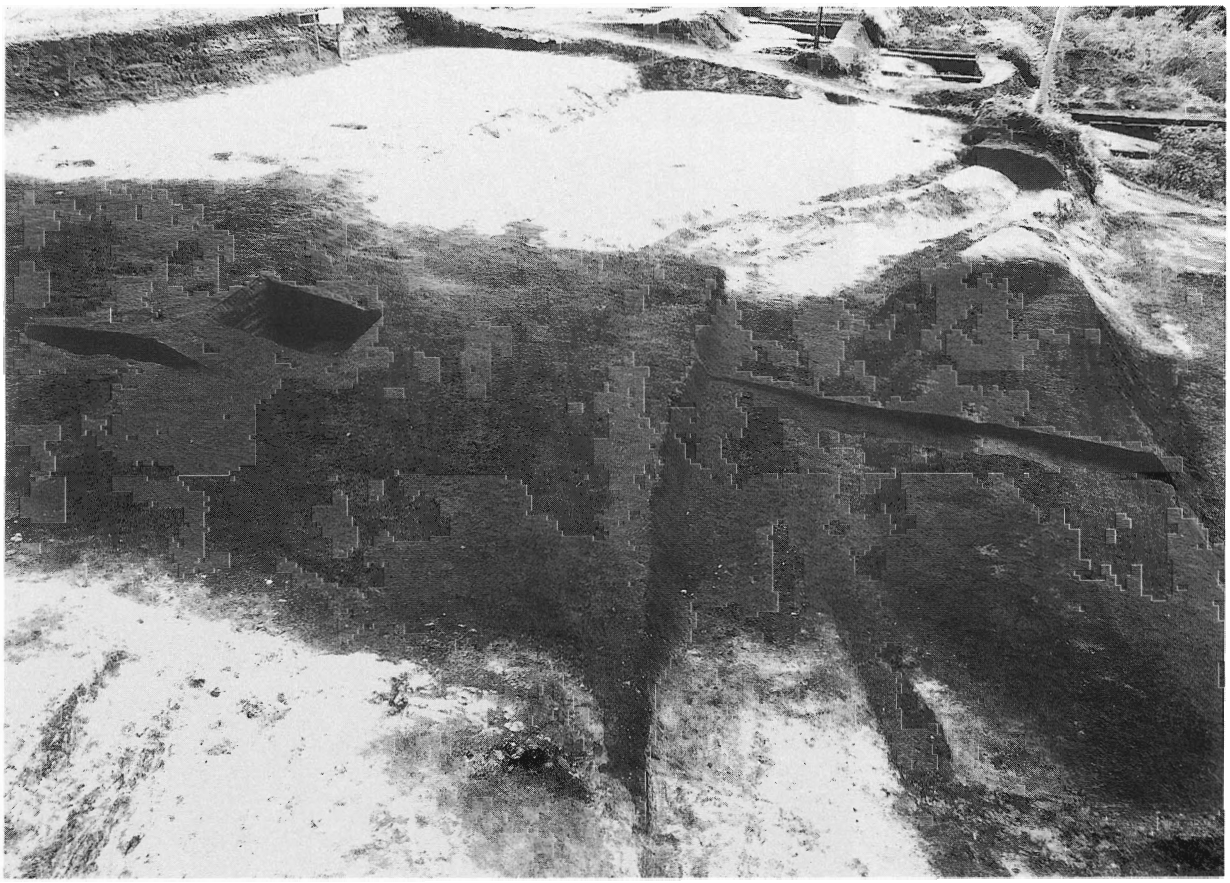
SI01検出状況

SI01遺物出土状況

SI01完掘状況

図版9

SD02～06完掘状況



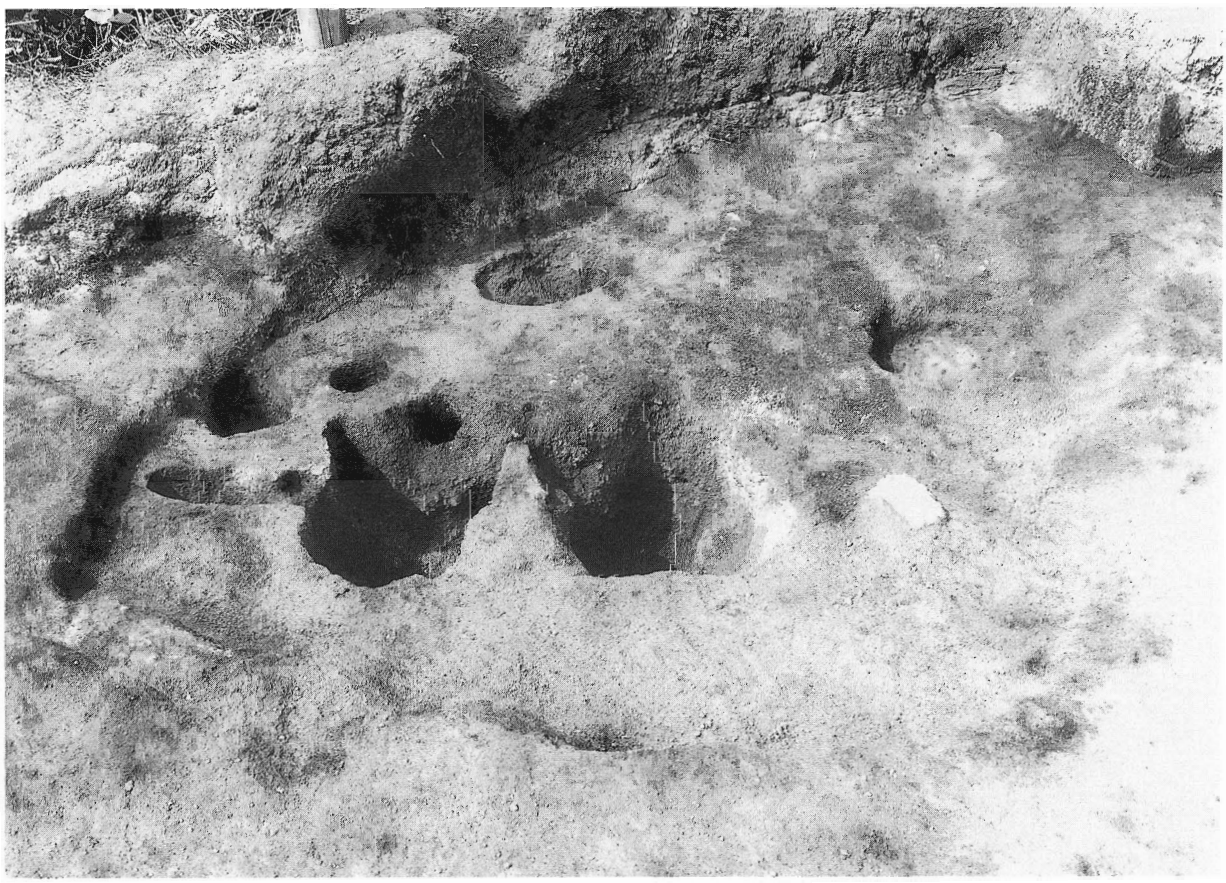
SD02～06検出状況

SI07検出状況

SI07土層

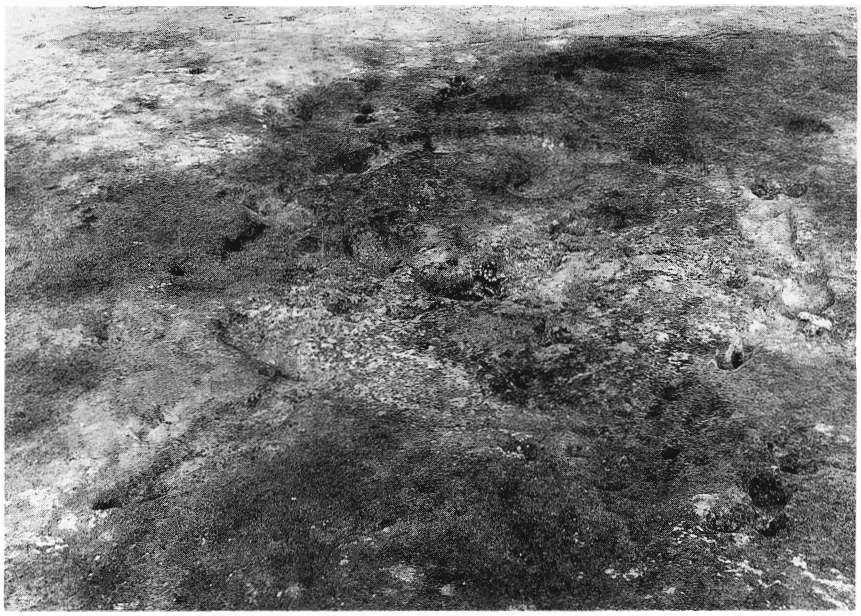
図版11

SI07遺物出土状況



SI07完掘状況

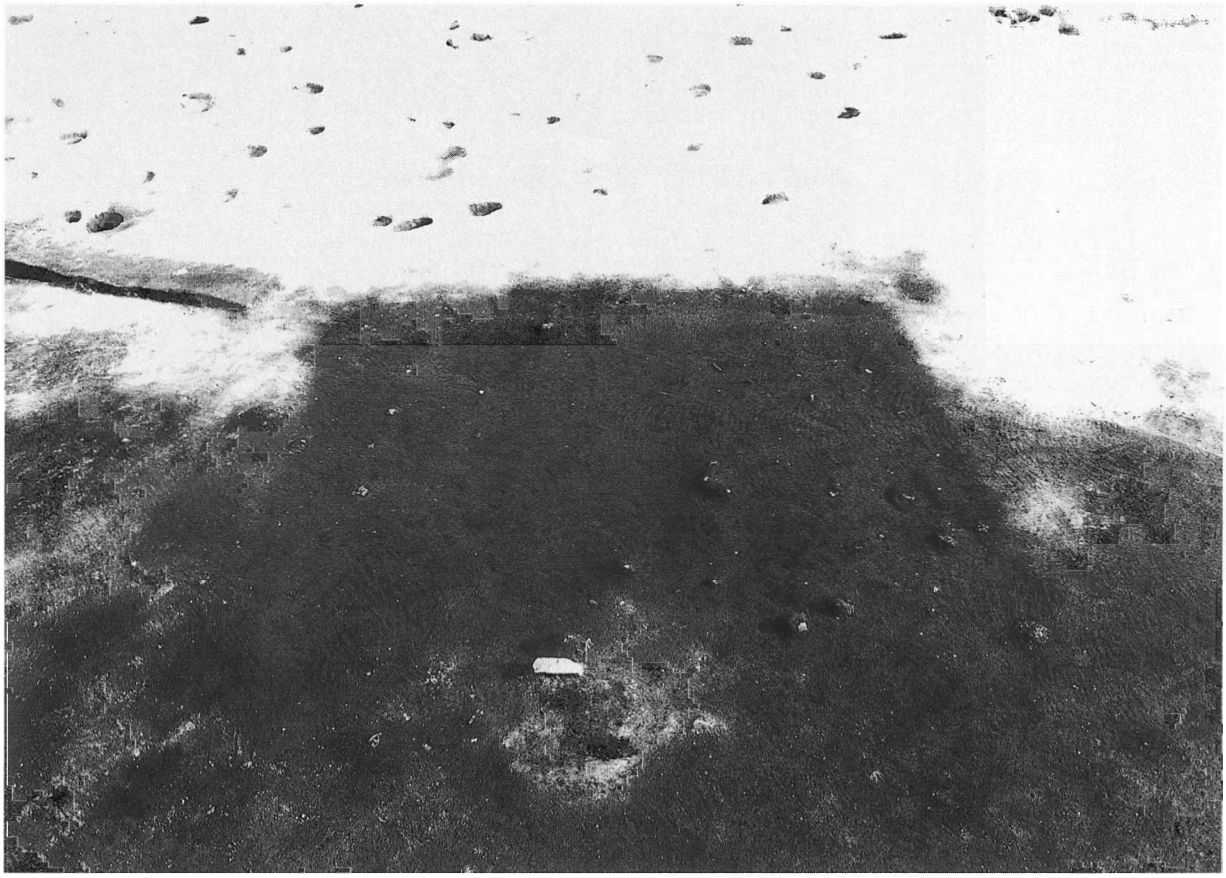
SI12調査状況



SI12完掘状況

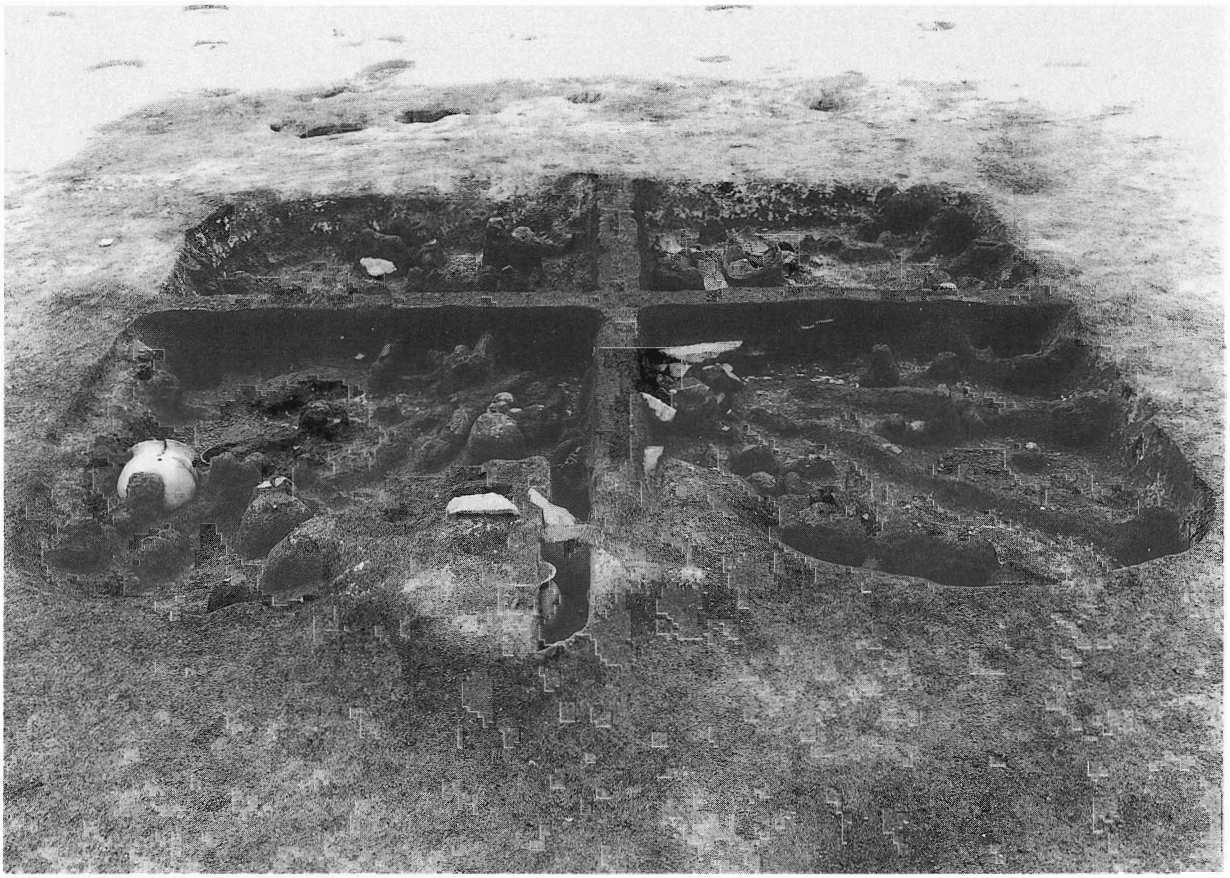
SI12遺物出土状況

図版13

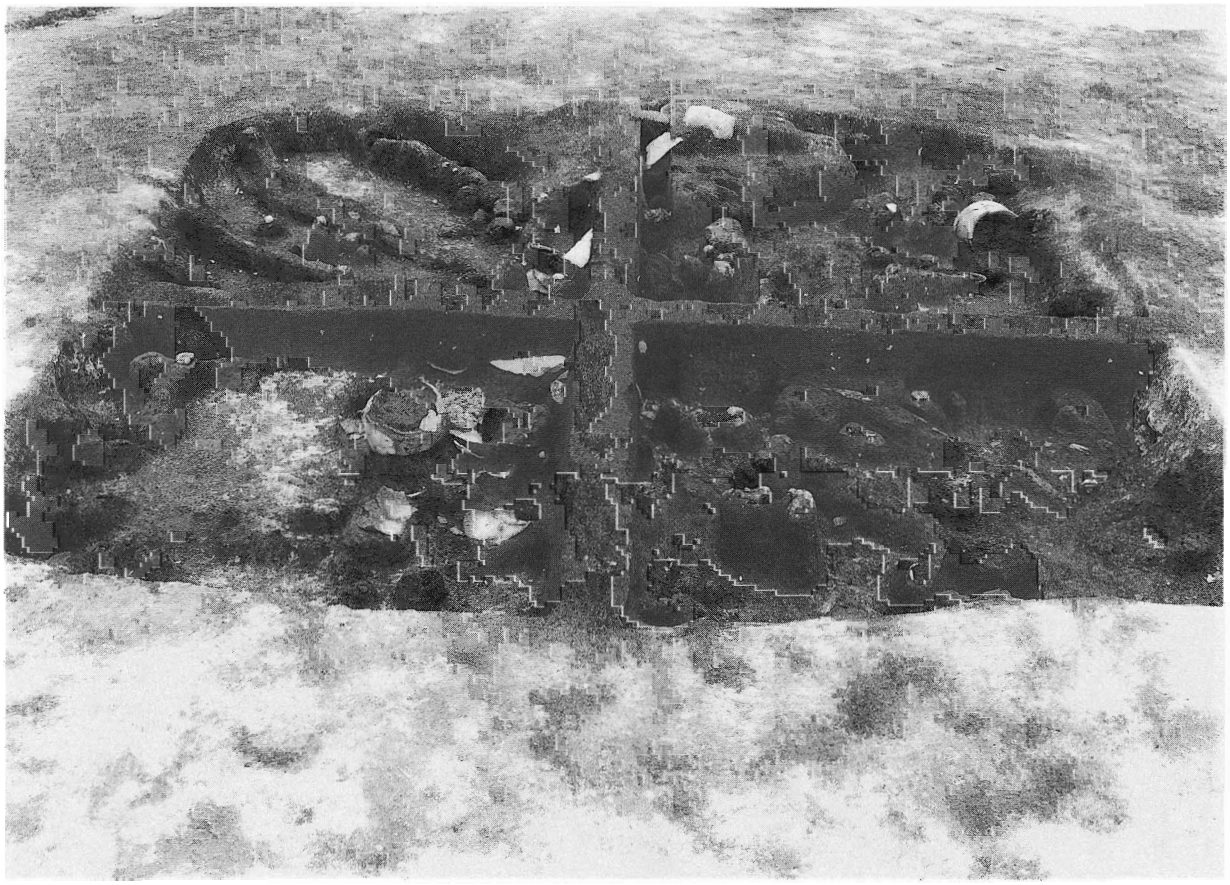


SI04検出状況（北より）

SI04上層遺物出土状況

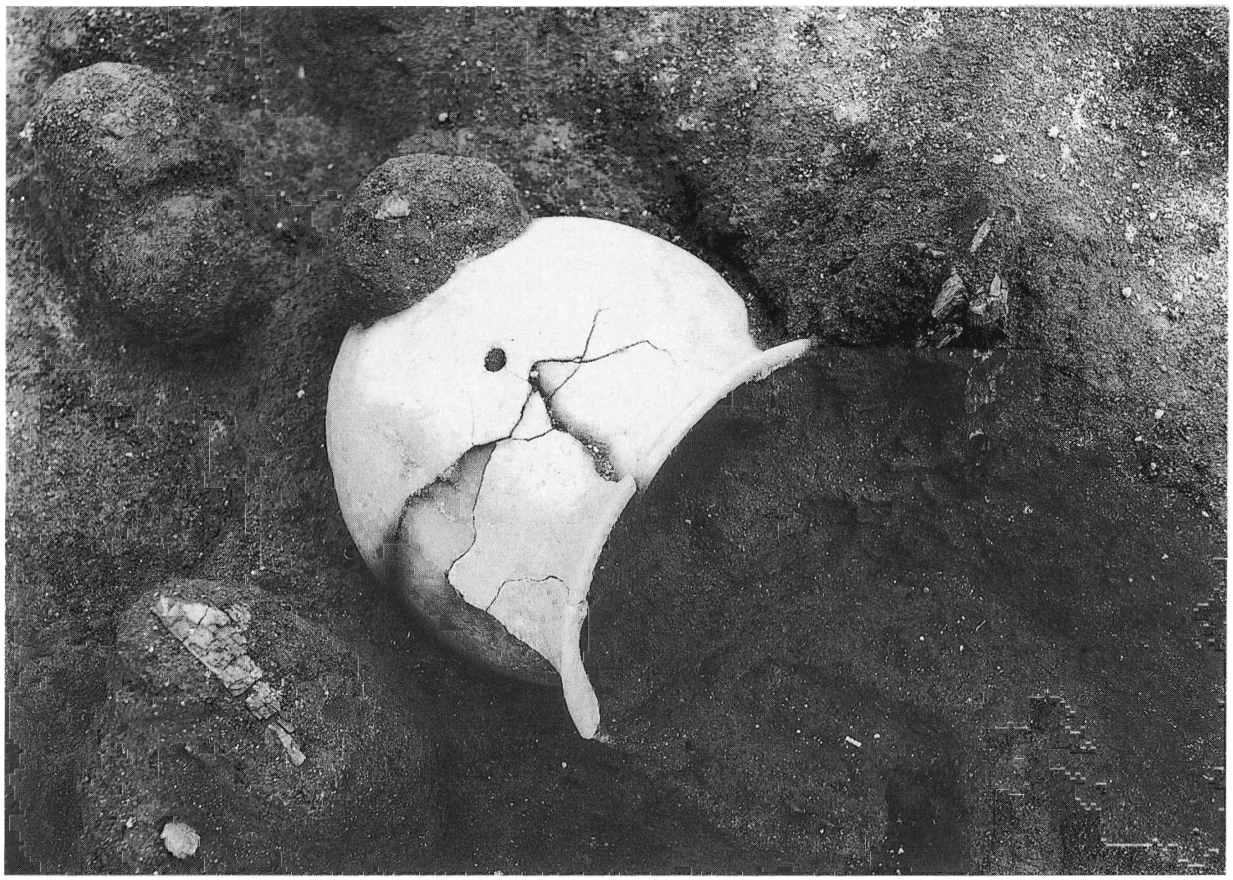


SI04遺物出土状況（北より）



同　上　（南より）

図版15



SI04遺物出土状況(1)

同　上　(2)